
（毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）
明治十五年九月廿四日發行
第貳百六拾壹號
東京國

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



女鑑第貳百六拾壹號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分前金五拾七錢
十二册半年分前金壹圓拾錢
廿四册一年分前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年九月十九日印刷
明治三十五年九月廿日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 並木頁雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

各本山名所圖會

佛光寺派御門跡題詠同新門跡題字

石倉羽葉著　山中古洞畫

佛光寺名所圖會

全壹冊　洋装菊判美本

正價二十五錢　郵稅四錢

口繪　●後醍醐天皇綸旨●後醍醐天皇宸翰●後水尾天皇宸翰●後西院天皇宸翰●孝明天皇御寄附菊形香爐●皇太后大進有範卿眞筆●見眞大師自作の有範卿及吉光尼の木像●見眞大師眞筆嗣法相承の名號●御影堂●本山外面●表玄關●東山別院●同唐門●東山本廟●同側面●其他木版數十個挿入

眞宗各派中に最も由緒の正しき佛光寺派の本山内外の事蹟歷世の重寶史料一切を親く其門に就て精査し同派僧俗の朝暮觀覽に備ふ此冊の眞價は喋々を要せず

◉本派本願寺名所圖會（全壹冊）　洋装寫眞入正價金六十錢●郵稅十錢

◉大谷派本願寺名所圖會（全壹冊）　洋装寫眞入正價金四十錢●郵稅八錢

風雅文庫第五編

鶯亭　長井金升君著

狂俳句の栞

●全一冊正價金二十錢　郵稅金六錢

狂俳の可笑しみは狂句を離れて別に一の調わり本書は狂俳の名附け親たる金升君が狂俳始まつて以來の狂吟を四季に別けて集めたるものなれば俳人は古池に蛙の飛だ事を言たものだと呆れ離俳家は乙なものだと嬉しかり一讀腹を抱へる珍書にて避暑の鞄中には無くて叶はぬと云ふ奇特の珍に御座候

續帝國文庫第四十二編

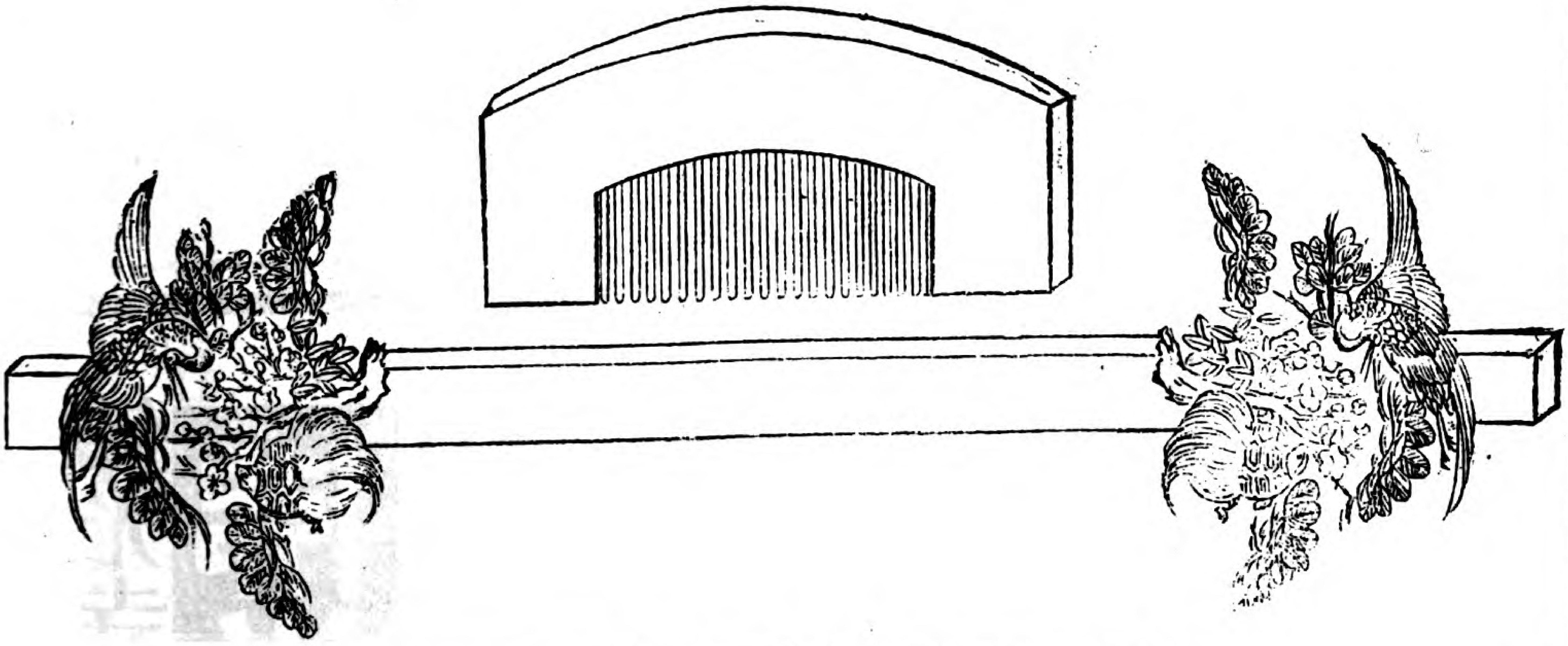
博文館編輯局校訂（製本出來）

釋迦八相倭文庫

下卷　全一冊洋装背皮金字入●正價金六十錢　郵稅金十六錢

現實を天竺の皇室に則り趣旨を無數の經文に假り進んでは因果應報の理を明にし退ては善惡邪正の果を示し能く五戒を諷し巧に六慾を戒め變幻の文簡明の辭不知不識の間世俗を敎導訓諭する者是れ本書の梗概とす今や上下二卷玆に完成せり萬亭應賀の作實に近來無比の雄編と云べし

發兌元　東京日本橋區本町　博文館



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からす此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生せず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製（金三十圓　五十圓　七十五圓　一百圓
一組之價（百五十圓　二百圓　二百五十圓以上

四方張製（金八圓　十圓　十五圓　十八圓　二十圓
一組之價（金二十五圓　三十圓　三十五圓以上

右の外御婦人装飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覽の榮を賜り度候市地内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に可供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送りに被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依三週間以内は代金又は他品と御交換可致候

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

店主　松田幸治郎

（特電話新橋五百五拾壹番）



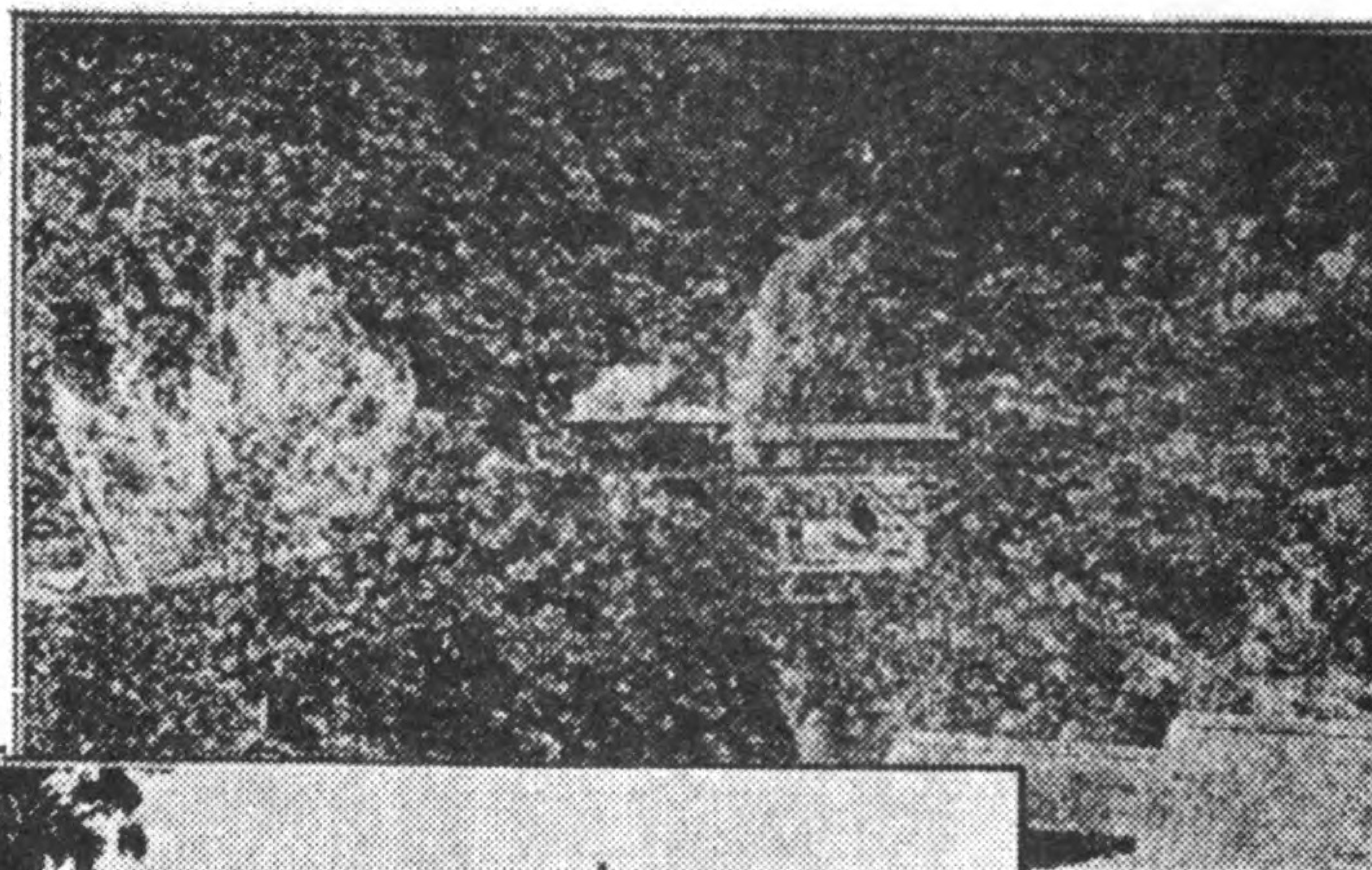
青森縣立第一高等女學校長
近藤良造氏



東京府第二高等女學校教諭
高木光子



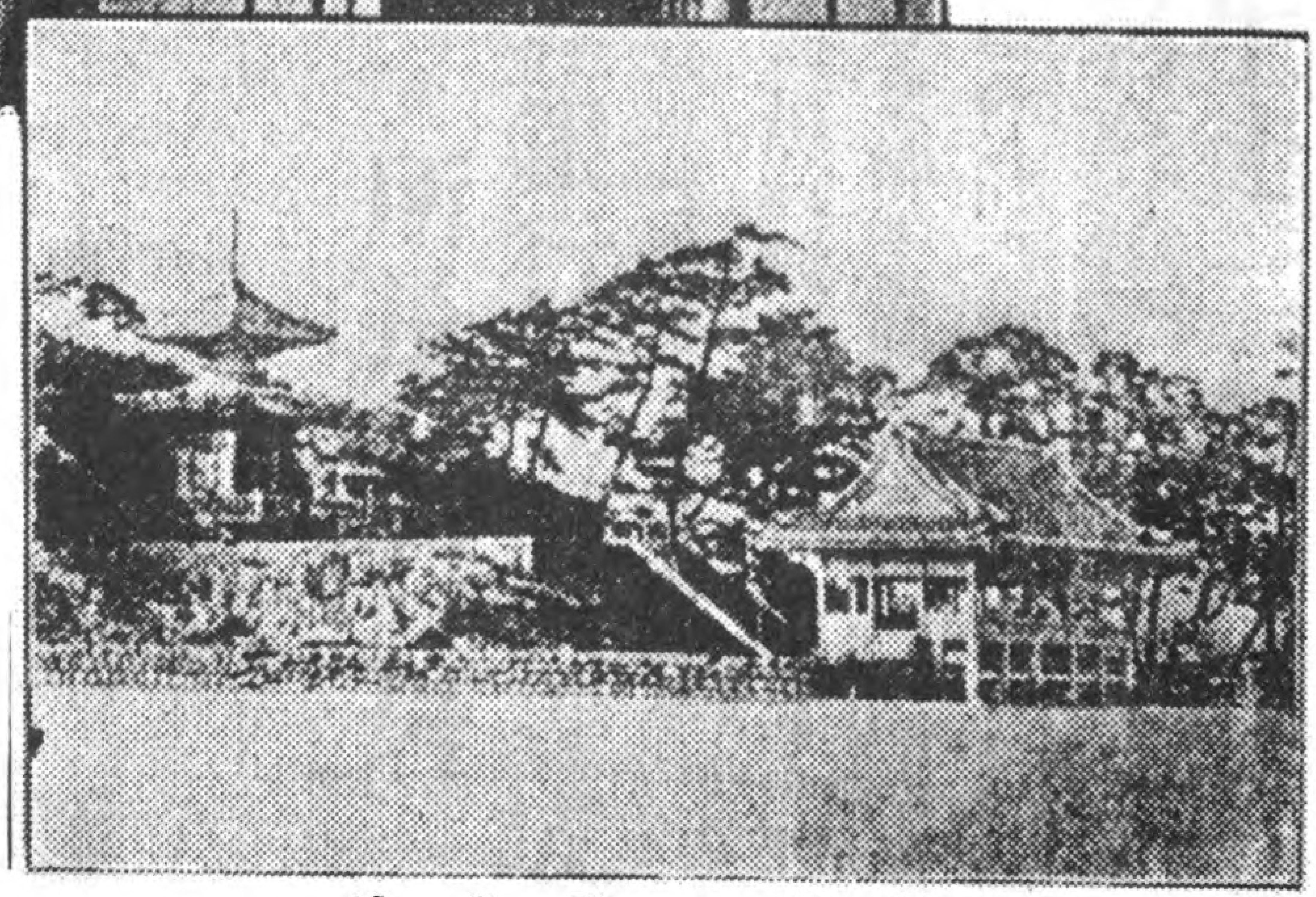
陸軍少將福島安正氏の家庭



攝津布引の瀧



近江堅田浮御堂



紀伊和歌の浦

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御附記被下度候

久津見蕨村先生著　増訂三版

家庭教育　子供のしつけ

定價廿五錢　郵稅四錢

假洋裝頗る美本全壹冊

世の父母兄姉が大事中の大事、人の子女たる者の大責任たる子女教育の事を等閑に附するを遺憾とせられ著者が多年の實驗に依り、最も平易に通俗に家庭教育の仕方を説示せられたる者なれば新日本の父母兄姉は勿論學校と家庭の連絡に意を注ぐ教育家は是非精讀せざるべからざる良書なり

宮中御歌所寄人　中邨秋香著　訂正三版

文鑑　千草の錦

印刷鮮明　紙數三百頁餘

和裝頗美本　定價卅五錢　郵稅四錢

此書は中邨秋香先生が男女學生の模範となるべき美文記事、記行、論説、消息、物語體等無慮數百編を撰出せられ、特に上段には要語數千を載せ、作習の模範と應用とに供せられしは他に其比を見ざる國文學參考の好資料あり

發行所　東京市日本橋區箔屋町十六番地　前川文榮閣

女生徒三拾名募集

授業開始九月五日　申込八月卅一日限

當所は會計事務員養成卒業後紹介の外華族官吏紳士商家與向會計整理○女學校其他出教授の依頼に應す

東京市神田區表猿樂町四番地

私立銀行事務員養成所

所長　黑岩規

女鑑廣告

本社同樣取扱申候

神田千代田町　博報堂　電話本局一四四番

京橋區尾張町　弘報堂　電話新橋八五一番

京橋區南鍋町　廣告社　電話新橋二六一番

家庭の讀物

清淨なる家庭には、その日夕の娛樂に供すべき清淨なる讀物なかるべからず。人は食物のみを以て生けるものにあらずとは、其の語や陳套なりと雖も、其意は永遠に新なり。身體を强健にせんが爲めに、滋養ある食糧を要するが如くに、精神を清爽にし、快活にし、修養せんが爲めには、有益なる讀書の必要なるは、固より論を待たざる也。然り而して家庭の讀物として、清淨なる書籍を擇ばざるべからざるは、家庭の元と清淨なるを貴べばなり。

小說、雜誌、及び新聞紙の類は、何人も朝夕の伴侶となし、讀誦して以て家庭娛樂の趣味を添へんとするところのもの也。故に歷史、傳記、詩歌、等の書籍を除きては、小說、雜誌、新聞紙の類は最も家庭に歡迎せらるべき性質を有するものなり。否な家庭に於ける勢力よりして之を云へば小說、雜誌、新聞紙の類は、歷史、傳記、詩歌等よりも、實際に於て遙に强大なる勢力を有するものなるは何人も詳知するところなるべし。然らば則ち家庭の讀物として、新聞、雜誌、小說の類に重きを措くは誠に當然のことなりと信ず。

然るに今の小說、雜誌、新聞紙といふものを見るに、果して家庭の讀物として、清淨なる家族の希望に應ずべき滿足なる娛樂を與ふるに足るものあるか。その趣向、趣味、及び用語は正しき家庭の讀物たるに適當して、人心に善感化を與へ、家族の和樂に供するに足るものあるか。試みに一葉の新聞紙を取りて、その謂ゆる三面記事なるものを朗讀し見よ、その中必ず父子兄弟の間に於て口に上すべからざる文句と用語とあるに遭ひ、赧然として之を中止せずんばあらざるべし。又た試みに坊間に行はるゝ小說を繙きて、父子兄妹の間に之を音讀し見よ、其の趣向の猥陋、用語、の卑野なるに堪へずして、未だ全篇を讀み了らざるに遂に卷を擲たざる者なきに非ざるへし。想ふに清淨なる家庭に養成せられ、若くは養成せらつゝある家族は今の謂ゆる新聞紙の三面記事といふもの、及び或種の小說といふものを開きて家庭の間に誦讀するの勇氣に乏しからざるを得ず。吾輩亦た寧ろかゝる勇氣の乏からんことを望まざるを得ざるなり。昔は鄭聲の音を亂るの故を以て、風敎に害ありとし、之を國風の中に歯ひせしめざりき。今の新聞及小說の記事の風敎に於ける、豈啻だ古への鄭聲のみならんや。

人或は言はん、陽春白雪の歌は人之を解するもの甚だ稀れなり。下里巴人の調に至つては、卑夫野郎と雖ども之を和するに難からず。是を以て一般世俗の希望に添い、その歡迎を受けんには、勢ひ其の調を卑くし、其語を野にするも亦た已むを得ざるに出づるのみと。蓋し時勢の要求に應じ、社會の希望に

適すべき小説を作り、文章を綴るは、著作家及び記者先生の寧ろ得意とするところ、若し之を以て著作者及び記者を彈すべしとせば、苛酷も亦甚しからざるを得ずと雖も、小說及び凡ての文學的興味ある文章の眞正なる目的が、知ず識らずの間に、人心を善化し善導し、遂に一般社會の風教を感化して、時代の好指針たるにありとせば、縦ひ一代の風潮に逆らひて、眞理を開拓し、風教を振作するを以て其の任務とするまでには至らずとも、淫媟陋劣の文字を排列し、猥雜蕩冶の趣向を弄びて、却つて之を以て至情なりと稱へ、天眞なりといふが如きあらば、著述家、及記者先生の德義の輕重を議するものあるも、如何ぞ之が責を逃るゝを得んや。然り吾輩はかゝる著作を生出せしめたる社會と時勢とに向ひて、大に遺憾とする所なき能はずと雖も、亦以て今の著作者及び記者先生に對し慊焉たらざるものなきを得ざる也。

裸體畫を以て美の極致を得たりとなし、之を公道に掲げて、憚らざる今の世に方りて、獨り小說、文章のみの清潔ならんことを望むは、或は無理なる注文と思ふ人もあらん、然れども吾輩は風教、德義、節操を以て最も人世に重んずべきものなりと信ずるが故に、勢ひ、今の智慮あり、手腕あり、才識ある文學者先生に向ひ、其力を以て、清淨にして興味ある文學的著作を出さんことを望むは、決して難きを人に責むる所以ならざるを信ず。否な吾輩は彼を以て之に責むるの權利あるを疑はず。

吾輩は多く西洋の小説を讀まざるを以て、今遽かに彼國一般の文學に對し、臆斷を縱まゝにする能はずと雖も、近世の名家たる、スコットの如き、リットンの如き、サッカレーの如き、ユゴーの如き、チユマの如き其の高妙なる著作の中に於て、孰れか家庭の讀本として、淸淨なる娯樂に供し得べからざるものあるか、又以て西洋諸國一般の好尚を知り得べきにあらずや。吾輩は今の文學者に向つて是等大家の著作に均しき著述を出せと責むるものに非らずと雖も、せめて其の趣向と文字との淸淨潔白なること是等諸大家の如くならんことを望むも、亦强ち無道理の要求にはあらずと思ふ。家庭に適當せる淸淨の讀物なきは、猶は滋養ある食物の乏しきに同じ。滋養ある食物乏しければ、身體を强壯ならしむる能はざるなり。何ぞ又た淸淨ある讀物なき家庭が精神上の幸福を享くる能はざるを異まんや。故に吾輩は淸淨にして興味ある小説、雜誌、新聞紙の類が頻々生出して以て、家庭の幸福となり、快樂となり、和樂となり、精神を淸爽にし、快活にし、遂に社會一般の風敎に裨益を與へんことを翹望して止まざるなり。思ふに今日の讀書界殊に家庭にあつては淫媟卑猥なる文字に厭き果てゝ、淸淨潔白なる讀物を迎ふるや頗る切なり。若し今の時に及びて此等の希望に應ずべき興味ある文學上の著作を出だすものあらば、一般の歡迎を受けんこと、豈に啻大旱の時雨のみならむや。

（靑眼子）



母親の心得（承前）

愛敬女學校長　棚橋絢子

小學校卒業後の教育（二）

既に女學校或は稽古塲に通學する女子に對しても、小學校時代の家庭教育の部に於て論述せし諸注意は、尙は繼續して行ふべきこと勿論なりとすれど、たゞ其年齡の增加に應じて、多少異なるべき點ありとす。此時代に於て、父母殊に母の躬行以て模範を垂れ、能く訓戒し監視を怠るべからざることは、女子をして家政に慣れしむることなり。學校に於ての教育を以て足れりとし、兒女に家事を課せざるは、良妻を作る道にあらず。教育を完全にする法にあらざれば、必ず家事に練習せしむべし。家政は實行のものにして、空理空論の者にあらず。徒らに家政の書を讀みて足れりとするは大なる誤謬あり。家政は技藝と同じく、實習を積まずんば行ふ能はざるものなり。家政の要は、日常一家の經濟と、僕婢の使用等とにあり。一家經濟の要は、其使用物品より其最大の効果を得るにあり。能く物の働きを盡さしめ、如何にして其働きを最も多く、最も有用になさしめんかを考ふるにありて、これ一家の興廢の係る處、まことに重大なるものとす。國家の強弱を探らむとならば、其下層の社界を觀察すべしとは常に云ふ所、一家の盛衰を見んとならば、其家の掃溜を見るべし。一家の運命の消長は、實に家政を掌る主婦にありといふを得べし。

抑も人間の要するもの種々あれども、之を大別すれば衣食住の三となり、中に於て尤も切要にして、通常消費の額の巨大なるは食物なるを以て、一家經濟は重に流し元にありといふも不可なし。されば食物を大切にすべし。これ天の吾人に與へて生命を保續せしむるものなるを思はゞ、一粒一葉も正に珍重すべきなり。日々の野菜等を購入するにも、或は農家にありて之を拾收するにも、唯下女等に任せず、人數にあてはめ、過不及なき樣に注意し、價安き物品と雖も、之を無駄にせず、廢棄せざるを期すべきなり。彼の農家に於ては、あるにまかせて飽食する如き往々見うくる所なるが、これ掃溜に放棄するにあらずして、貴重なる身體を掃溜として之に放棄する所業にして、誠に淺間しきことといふべし。到來品の如きも能く注意し、其品の性質により夫れ／＼仕末を付け、一切の物をして其効を充分に致さしむべし。割烹は女子の任務なり。食物の品位、味等をよくするもあしくするも一に此にあり。能く其技に習ふべきなり。一日業務を終り、一家團欒し、和氣洋々として食ふべき夕飯の如きは、主婦たるもの殊更に注意し、同じき食品も味よくすべきものなり。家庭は和樂ならざるべからず、西洋のことはさておき、日本の家庭には陰欝なるもの往々見うけらる。此責めは過半を男子に歸すべきものなれども、そは男子の教育に於て訓戒匡正せらるべきものなれば、今おのれは女子教育に於て之を云ふを欲せず。唯女子は常に力を盡くし、家庭を愉快にせざるべからざる責めあることを說かむのみ。

裁縫は女子第一の技藝なり。之を習熟せざる女子は、他に如何なる智識技藝あるも、完全なる女子といふべからざるなり。近來一派の女子教育家あ

らはれ、裁縫等は之を職業とするものなれば、高等なる教育を受け、或は上流の家に妻たるべき女子は、之を棄てゝ、須らく他の學藝を研鑽すべしと説くものあり。これ教育の何たるを知らざる輕薄なる論者といふべし。裁縫は女子に缺くべからざる技藝なり。其後來自ら用ゐると否とを問はず、女子必須の技藝として必ず修習すべきものにして、女子普通教育に於て缺くべからざるものなり。彼論者の如きは、技藝の何たるを知らざる僻見者流のみ。裁縫澣洗は、女子の一技藝として古來后妃の貴きを以てすら修習せられたり。詩の葛覃の小序に、葛覃后妃之本也、后妃在㆓父母家㆒則志在㆓於女功之事㆒躬儉節用、服㆓澣濯之衣㆒云々とあり。朱文公等に從へば、小序は採るべからざるも、古儒の一見解として見るべきものなり。實に裁縫は、女藝の第一位に置くべきものなるが故に、女子たるもの熱心に修習せざるべからず。

其他器具、物品、衣服等を整頓し、順序正しく藏する習慣を附け置き、決して亂雜ならしむべからず。又日常の金錢出入を嚴密に記すは、最も必要のことなり。これ一見甚だ容易なるが如しと雖も、常に其習慣を附け置かざれば、疎漏に流れて行ひ難きものなり。

座敷、應接の間の装飾品の配置等は能く注意し、無趣味野卑の點なき樣に心掛くること又必要なり。衣服装飾等流行を追うて新奇を競ふは、甚だ好ましからざる處なり。常に質素にして而も趣味あるを要す。衣服は實用と装飾との兩要素より成るが故に、いかに實用に適切なる衣服ありとするも、余は直に日常の衣服とするを好まず。彼の女學生の着する袴の如きも、家庭に常用するは如何はしく思はるゝなり。況んや中年老年の婦人の用

ゐるをや。元來衣と住とは密接なる關係を有し、相伴ふて變遷するものなれば、住居の體裁を變せずして衣服の體裁を變ずれば、其不都合、不便なること實に思ひ掛けなきものあり。猥りに新樣のものを採らば、必ず失敗に終らむ。（未完）

都下女學生に告ぐ（承前）

東京女學校長　折田重任

明治の女子教育は、一度は十八九年頃彼の突飛輕卒の歐化主義に出て誤られぬ。其の後幾回か逡巡躊躇して、漸く四五年前より再び頭を擡げ來り、以て今日の盛運を現出せり。卿等は宜しく前に鑑み、後に慮り、戰々として歩み、兢々として進み、再び彼の覆轍を踏みてはならぬ。宜しく愼重の態度と高尚の精神とを保ち、急かず又休まず、一歩は一歩より女子天職の旗幟を望み、人間の正道に由り、理想善に向て進行せねばならぬ。女子に向て牝鷄晨鳴を警告したる時代は已に去り今日の我國は家庭の上に於ても社會の上に於ても、卿等の手腕を竢つ所の者が甚だ多い。否卿等は自ら進んで、邦國開明の先導者とならねばならぬ「エメルソン」曰く「國の開明は善き婦人の感化あり、故に婦德の長短を見て邦國開明の度を知るに足れり」と、卿等は邦家の爲、自重自愛して成業の後、有爲の活動をせねばならぬ。余嘗て女子教育に就て述べしことあり。曰く、

夫れ男女は、性格を異にするを以て、其の天職にも內外の別あり。然れども決して輕重の差あるに非ず。故に男子教育の必要なると同時に、女子教育の必要なるは知者を待て後に知らざるなり。其の家政を經理して、男子をして內順の

愛なからしめ、其の子女を教養して、他日智德圓滿の人物たらしむる素地を造り、其の家族及び社交の親和を維持して常に憤怨と衝突と失望とを融解する等、女子の任たる重且大と謂はざる可からず。故に教育の一方に偏するは、決して國家の慶事に非らざるなり。國力の不進も、風紀の頹敗も、家族の不和も、皆男女智力道德の平均を得ざるに基因す。西哲曰く「國の文野は女性の智識道德の進否如何に關す」と、女子教育の忽諸に附すべからざる、以て知るべきなり。

然らば則ち女子を教育するには、女子をして自已天職の何たるを知らしめざるべからず。薄志弱行一時の感情に制せられて他の誘惑に陷り、浮華輕佻裝飾を衒ひ、安逸を貪るを以て能事畢れりとし、偏狹固陋事物を曲解して他を猜忌憎惡するが如きは、男子に比して寧ろ女子に多きを見るべし。之れ全く理性と感情との調和を欠き、識慮淺近にして自立心なきの致す所なり。

故に女子教育の任に當るものは、其の品性を陶冶して、貞淑温良の美德と、高尚純潔の嗜好と、堅固不拔の志操とを修養し、以て女子たる品位體面を保たしむると同時に、日新文明の世に處して不足なき知識、技能を確實に受得せしめ、質素節儉の習慣と、周到綿密の注意と、輕快敏捷の擧動とを養成し、一朝不慮の變に處しても、克く自己を處理して、餘りある素養と才能とを具備せしめざるべからず、斯くして益々本邦女子の眞面目を發揮し、家に在りては淑女たり。他に嫁しては良妻たり。子女に對しては賢母たり。又克く社會の親和を維持し、社會の風紀を改善し、男子と幷び立ちて國家の半面を形成せしめざるべからず。女子教育の目的は焉

に存すと謂はざるべからず云々。

詩に曰く、自求二多福一と、人間は自ら輕んじ、自ら侮る程、畏るべきことはない。其の結果たるや、男は僕隷に甘んじ、女は婢妾に安んじ、靦として人間羞恥の何物たるを解せぬ樣になる。一度斯く墮落しては、一擧一動、他人の掣肘を受け、最早人間思想の獨立と、身體の自由とを說く餘地はあい、孟子曰く、自侮而後人侮レ之と、人間の禀性には、生れながらにして、多大の差別あるものではない。況んや運命あるものは、大抵は自己の修養如何に因りて左右せらるゝものである。只自ら重んずると、自ら輕んずるとに由て、後日其の地位階級上に月鼈の差を生ずるのである。彼の秦の始皇帝に仕へて丞相の印を帶ぶるに至りたる李斯其の人は、實に好模範である。今史記李斯傳の一章を翻譯せん。

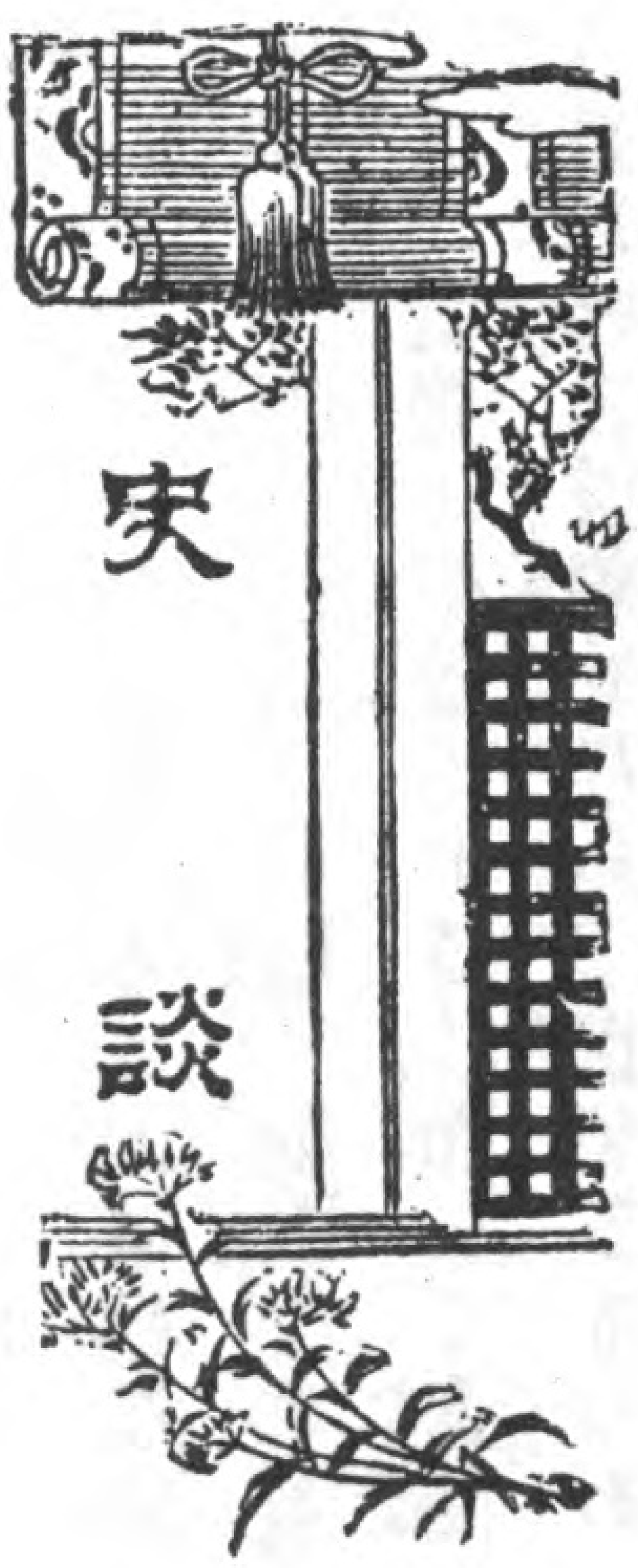
李斯は楚國蔡郡の人あり。年少き時に、郡の小吏とある。吏舍の厠中の鼠、不潔を食ひつゝ人犬に近づきて、數々驚き恐るゝを見る。或時李斯官倉に入りしに、倉中の鼠が積み累ねたる穀物を食ひ、大廡の下に安居して、更に人犬の憂を見ない。是に於て李斯乃ち歎じて曰く、人の賢不肖は、譬へば鼠の如し。自分の居所に由て、賢不肖が分るゝのであると。乃ち荀卿に從ひて、帝王の術を學び、學業已に成る。度るに楚の王は事ふるには足らぬ。而して當時の齊、燕、韓、魏、趙も、皆弱の功を建つべき國ではない。乃ち西の方秦國に入らんと欲す。入て荀卿に辭して曰く、斯聞く、得レ時無レ怠と。今各國幷び爭ひて、遊說者が事を主つて居ります然るに秦國獨り强大であつて、其の上、秦王が天下を吞み、帝と稱せんとする雄志があります。之れ誠に吾々布衣の遊說者が、其の間に周旋盡力

する秋かと思ひます。卑賤の位に處りて、之を救ふの計を爲さゞるものは、之れ淵に臨みて魚を羨むと一般であります。故に恥辱は卑賤より大なることはなく、悲は窮困より甚しきことはありません。久しく卑賤の位と、困苦の地とに處りて、却て世を非り、利を惡み、自ら無爲自然に託くなどは、之れ士たる者の眞情ではありません。故に斯今より先生に辭して、西の方秦國に入り、秦王に說かんと存じますと。

是に由て之を觀れば、李斯は郡の一小吏たりしとき、鼠を見て感奮し、自ら修養したる結果、遂に宰相の高位にまで昇つたのである。然れども李斯の志たるや、決して高尙とは云はれない。何となれば李斯の悲む所は、貧賤、窮困である。其の望む所は、富貴、榮達である。而して人間の目的には富貴以外に道義的最高理想なるものあることは知らぬ、故に一旦宰相の高位には昇りたれども、其の終りを全うせぬのは、當然と謂はねばならぬ。

右は男子出身の一例には過ぎざれども、其の修養如何は以て、自己の運命を左右する力ありと云ふことを證するに充分である。然るに吾々幸榮ある臣民、即ち此の明治の聖世に生れ、一天萬乘の至尊を戴ける日本國民たるものは、男女の別なく、各々其の天職の存する所を盡して、報効を圖らねばならぬとは、多言を要せざることである。時に社會が卿等に向て大に其の手腕活動を俟ちつゝある今日に際し、卿等は宜しく修養自ら重んじ、學德を積み才藝を硏き、以て社會の要求を滿足せしめねばならぬ。又、何ぞ彼の無敎育女子の如く、奢侈と粉華とを弄するの閑あらん哉。

（完結）



小林しん及淺井こふ

（第貳百五十六號口繪參照）

文學士　大町桂月

しんは、和泉國、日根郡、尾崎村、小林宗四郎の女なり。性質温順にして、幼少の頃より、父母にやさしかりしが、年やう〳〵十となりし春、母なる人病にかゝりけるに、しんいたく憂ひ、たえず病床に侍して、大人も及ばぬばかり、看護したれど、病勢は少しもおとろへず、日にまし危篤になり行くに、しんのかなしさ言はむかたなく、遂に寢食を廢して神佛に祈願せしかど、天命如何ともする能はず、母終にみまかりぬ。しん女いたく慟哭して、聞知するものをして思はず泣かしめしと云ふ。のち父亡妻の妹なる人を容れて後妻としたりしに、しん女はたゞ敬、たゞ愛、母の再び生れかへりし如くに思ひつかへければ、繼母もまた慈愛を加へて、まゝしき行ひなく、一家むつまじうくらずほどに、慶應の頃、繼母の甥を迎へてしんが婿とし、一男子さへまうけゝるが如何に心狂ひけむ、數月をたつまゝ、夫は無賴の徒に交はり、日日賭博を事として、家産を消失するに、父、親戚等とも〴〵に訓誡すれども、心をあらためず、ます〳〵放蕩になり行き、遂に自ら家をさりぬ。されど繼母は己が甥なれば、父にかくれ、屢々財貨を贈りなどして、家産大に傾き、困窮に至りしが、やがては事あらはれて、父いたく怒り、之を去らむとせしに、しん女いたく悲しみ、泣哭して之を

とゞめ、隣家の人々をたのみて、母をば去らぬやうにし、それより自ら一心に機を織り、糸をつむぎ、或は田畠の事をつとめて、一日も身を休めず、孝養をつくすこと十有五年、父もはや七十路近く、母もまた六十路を二つ越えて、手足たゝず、事皆しん女一人の力になりければ、人これを憐み、再び夫を迎へて家業を助けしめよと說きすゝむるものあれど、しんは更に耳にもかけず、ひとりはげみ、ひとりつとめて、父を敬し母をうやまひ、一子を鞠養して、凍餒の憂ひなからしめ、よく一家を維持し郷里皆其效を賞し、その節操に感せざるはなしと云ふ。明治十七年十二月官遂に綠綬褒章を賜へり。

淺井こふは、甲斐國、西八代郡、市川大門村の人、淺井周慶の次女なり。母をときと云ふ。周慶に三男二女あり、長女は既に他に嫁せしが、三男相次いで夭折しければ、今はこふのみ殘れり。その家世々醫を業としけるが、僅に宅地二畝一歩と畑十一歩とを有する外には餘產なく、殊に父は年老い、精力衰へ、其業も世に售れずして、貧困日に加はれり。

こふ十八歲の時、親戚議して、同族なる小田切松吉を迎へて、こふの夫となしゝが、松吉放蕩度なく、僅に數月にして出奔せり。かくて、父年六十に餘り、最早醫業を爲すに堪へず、貧窮益々甚しけれども、こふ毫も屈せず、晝は機織に從事するの側、母を助けて父を慰撫し、夜は紡績を爲し、晝夜寸時も怠らざりしが、明治二年、再び飯田虎松といふ者を夫に迎へ、醫業を繼がしめむとて、苦しき中より資を出して遊學せしめしに、懶惰にして、業成らずして歸り、遂に離緣せり。かゝる程に周慶病に罹れり。こふ常に其側に侍して、看

護到らざるなく、父の眠るを伺ひて、職業を務め、數日の久しき、睫を交へざることさへあり。聞くもの、感涙を灑がざるはなし。人之を憐みて、更に夫を迎へてその助を得むとを勸むるものあれど、夫を迎へては、或は父母の侍養を缺くことあるべく、且つ父の嚴格なる、老て減ぜず、他人を入れては、反て累を增すに至らむとて、辭みて從はざりしが、父の病益重く、家道益傾くを見るに忍びず、親戚及び近隣の人々、强ひて勸めて、河西利三郎を贅養子に迎へしめぬ。時に明治十二年三月なり。仝月、一周慶遂に長逝せり。年七十三。母もその年の八月に果敢なくなりぬ。年六十九。かく前後親を失ひて、こふの悲歎言はむかたなく、爲に身體の瘦衰を致せり。その後、夫に事ふること、猶ほ父母に事ふるが如しといふ。あはれ、十餘年の久しき、纎弱なる一女子の身を以て、外は租税より、内は醫藥に至るまで、獨力にて之を辨し、孝養をつくすこと一日の如きは、まことに婦女の龜鑑といふべし。明治十五年十一月、綠綬褒章を賜ひて、其孝行を表彰せられたり。

『西比利亞の孝女』（承前）

宮館さだ子

○途上の困難

時しも西比利亞の秋、正に闌なる頃とて、空模樣常に、怪しう曇がちなりしかば、さなきだに、纎弱き乙女子の、日ねもす、馴れぬ旅路に、身體綿の如くに疲れ、たゞ、とぼ〳〵と辿り行くのみなるに加へて、雨に浴し風に櫛り、はては寒さとも戰はざるべからず、途上の困難は、开も如何ばかりなりしぞ。

家を出でゝより、若干の日子を旅中に過しぬ。時恰も『カモイチーフ』村を前程數里の地に望みて進みける折、雲脚低く垂れて、天候極めて穩ならざりしかば、路を急ぎて歩みつゝありし中、雨を帶ぶる朔風荒原を捲いて吹き荒び、路傍の樹木一切に、吹き倒されて、到底、一歩も進むべくもあらざりき。止むなく、近きわたりの森林中に潛み、疲と寒さとに苦しみながら、空模樣の晴るゝを待ちける折、幸にも通り掛りの一農夫に援けられ、次の村まで送り屆けられしは、天祐の未だ此孝女を棄てざるにや。されど、長途の旅行中、風に打たれ、雨に曝され、衣服は泥に塗れて、其姿の見る影もなく、窶れ果てたるより、村人は皆な乞食か盜賊の類と見誤まり、一時の雨宿りさへ、借し與るゝものなきに困じ果て、寺院の入口の階段に蹲まり、寒さに慄へながら、しばし憩らひにき。此處ならば、神の惠の手前にても、旅に惱める不幸者を追立つるが如き、無情なることの、よも、あるまじと思ひしに、村の小供等其周圍に群がり來て、或は辱かしめ、或は石を投ずるなどし、しばしの雨宿さへ許さゞりき。

可憐なる『プラスゴヴィー』は、殆んど二時間の久しきに渉り、涙を呑みて、村童等の嘲弄侮辱に忍びつゝありしが、仁慈なる一婦人の、座ろに其窮狀を憫み、村長の許に走りて、其旨を告げけるに、やがて、村長も現場に來りて、具さに、『プラスコヴィー』の語るところを聞き、亦た其携帶せる旅行劵を檢査して、茲に始めて其怪しむべきものにあらざることを明かにし、一先づ該婦人の家に伴ひ、救助を與ふるとゝはなれり。然るに『プラスゴヴィー』が、寺院の入口の階段を去らんとせし時、其兩脚は痛く脹れあがりて、起立つこと

さへも叶はず、且又た跣足のまゝ何物をも穿ち居らざりしことを見るに迫んで、今迄、嘲侮を加へつゝありし村童さへ、そゞろ、憐の情に耐へず、各々相競ふて、何にくれとなく、保護を加へ、やがて、一輛の荷車を輓き來り、之に『プラスゴヴィー』を乗せて、該婦人の家に送り届けぬ。

彼は此惠深き婦人の厚意に依りて、其家に寓すること數日、健康も全く舊に復して、起居不自由なきに至りしかば、茲に再び其旅程に上ること、はなりぬ。されど、此時に於ては、秋既に老い、北極の寒風荒原を掠めて霙さへ降りしきる頃なりしかば、初の如くに前程を急ぐこと能はず、從つて、其進行は比較的に遲々たることを免れざりき。

或時、彼は常よりも多くの里程を歩み、小夜更けて、一寒村に到着しけるとき、とある家を訪づれて、一夜の宿泊を乞ひしに、其家のあるじと覺しき老人出で來りて、其請を拒絶してけり。彼は詮方なく／＼も疲れたる足を蹈みしめながら、稍々姑らく行き過ぎし後、前の老人追跡し來りて、其家に招じけることの、いと訝かしきに加へて、老人夫婦の相貌、極めて獰惡にして、新來の客に對し、一方ならず、不安の念を起さしめたるのみならず、やがて『プラスコヴィー』の導かれしまゝ、其家に入りたる後、老婆は除ろに起つて、堅く家の戸を鎖したりき。暫らくして、老夫婦は『プラスコヴィー』に對して、其行先を尋ねなどし、斯くも遠き旅行を企つるに付きては、多額の旅費を携帶せしなるべしとて、漸く、盜賊の本性を顯はし、『プラスコヴィー』の只僅に數『コペック』を所持するのみなることを告げしも、虚僞の言なりとして、毫も信用するの色なく、はては粗暴の言を放つて、痛く叱責を加へたりき。

やがて、『プラスコヴイー』が、爐の側の『ベンチ』に横はりて、睡に就かんとする折(露國の農民の家にては何れも爐の側にベンチを据ゑ列べ其上に睡るを例とす)態と、其衣嚢を外面に露出し、寧ろ老夫婦の己が身のまわりを檢査して、其言の虛僞ならざりしことをば、實地に、證明せんことを望みたりき。彼が終日の旅の疲れに、間もなく、スヤ〳〵と睡に入りけるを見すまし、老夫婦は、果然、彼の身邊を隈なく、搜索せしかど、所持金とては僅々數『コペック』に過ぎずして、其他價値あるものとては、一も發見すること能はず、彼等の絕望言はんかたなかりしが、老婆は更に『ベンチ』の上に這ひ上り、一層綿密に彼の身のまわりを搜索せんとせし折、漸くにして醒覺し、其狀を見て、痛く打驚き、己が言の虛僞ならざることを繰返して、只管、命乞を爲せしが、彼等は之に對して、一言の答をも與ふるとなく、隈なく身のまわりを取調べ、靴の中までも檢め了りき。されど、彼等は何物をも發見すること能はずして、折角の搜索も全く水泡に屬せしかば、失望の極、絕え入るばかりに打擲を加へて、己が臥床に立去りにき。

不幸なる『プラスコヴイー』は、思ひがけなき、厄難に遭ひて、魂も身に添はぬ程なりしが、長き旅路の疲れに、何時しか再び睡に就き、其醒めたるは、日も旣に三竿の高さに上りたる頃なりき。然るに彼の臥戶を出で來りたるとき、先づ彼を驚かしたることは、前夜までは鬼とも山賊とも譬へんかたなき老夫婦の全く其面目を一變して、極めて優しく親切なること殆んど見まがうばかりなることにてありき。彼は直に其家を立去らんとせしに、朝餐の馳走を爲すべければとて、強て引き留め、俄かに『スチー』(獸肉に「キャベツ」を入れ煮詰めたる汁)を調理し、

又麥酒をすゝめなどして、優待到らざる所なきより『プラスコヴィー』に於ても、稍々、安堵の想を爲し、彼等の問ひ尋ぬるがまゝ、一家の狀態及び露京に到る目的等をも斷續に語り聞かせぬ。

やがて、『プラスコヴィー』の別を告げて、立去らむとしける折、老婆は『昨夜のことは、一場の夢と思ひ、必ず心にな留め玉ひそ、我等夫婦は御身の窮狀を憐み、亦た其孝心に感じて、只管、御身の恙なく、京地に達することを祈るものぞかし。若し御身は御身の携帶せる路銀を檢めなば、我等夫婦は、決して御身の思惟する如き、惡徒にあらざることを、了解し玉ふなるべし』とて、昨夜の出來事をば、成るべく、彼の腦裡より、拭ひ去らんことを呉々も歎願せり。

『プラスコヴィー』は數哩を行き過ぎたる後、試に其少さき財嚢を檢めしに、不思議にも一錢の不足なかりしのみならず、別に四十『コペック』丈增加せられありしを發見せり。蓋し該老夫婦は、剽盗を業とするものに相違なきも、彼の眞摯なる行爲と、高尙なる使命とを帶び、單身長途の旅行を企てたる孝心とは、醜惡なる盗賊の心をさへ、軟化し了りたるにてありき。　（未完）

英國の女文豪　ジョージ、エリオット

（承前）

土肥羊次郎

千八百四十一年父ロバートエヴンスはおひ〳〵老年と成りましたので、グリフ村の家產を殘らず長男の某に讓與しまして、自分はコヴエントリーのフォルシル村に隱居する事に成りましたので、日頃から孝心深きエヴンスも老父と共に其處に移住

する事に成りました。此の移住致しました事こそ彼女に取つては又たと得がたい幸福な出來事に遭ふ梯で有りまして、又た能く思へば獨り本人の幸福に止まらず、爲めに社會を益した事も決して少なくはない、夫れは同じフォルシル村に何代となく住居して居る素封家でチャールスブレイと云ふ人が有りました。營業はリボン商で取引先も廣く外國にまで名前の響いた人でござります。當代主人のブレイといふ人は頗ぶる學問に熱心な人で、生活は素より豊に致す處から嗜に任せて學問をされた、政治經濟法律理化の如き實用學は素よりの事哲學社會學其他にも通曉し、且又夫程の人であるから充分慈善心にも富まれて居る。此のブレイ氏がエヴンスの非凡なる處に早くも目を注けられ、ラテン、ギリシヤの古典、或は純理哲學心理學より科學の蘊奥に至るまで、充分に研究する

事が出來ましたのは、全く此のブレイ氏の御蔭で、此頃容易に手に入れる事の出來ぬ珍本までも容易に讀まれ、尚又た文學上有益の敎へ等も得たのであるから、僅かの内に驚く可きほどの進歩をしまして小説家としての博學多識では、實に全歐中に彼女と肩を並べる人のないとまで言はれましたも、全く此時分苦學した研究の結果で有るといふ事で有ります。

フォルシル村に靜かに晩年を送れる老父に侍して、朝夕孝養を盡くせる傍らブレイ氏の智遇を得て、專心諸學の攻究に力めつゝあつた彼女は、千八百四十六年に至つてストラウスが『基督の生活』の飜譯を公けに致しました、是れ實に彼女の處女作であつたさうで、勿論いふまでもないブレイ氏の補助に依つたには相違ないが、此書一度公けにせらるゝや、漸く時の思想家の注意を惹起し、批評

論議する先輩の後から〳〵顯はれまする處より、忽地にして歐洲の讀書社會に知られ、洛陽の紙價爲めに高しといふ程の發賣高で有つたさうで、故に此の著述からエリオット、なる名の社會に知られ、ハーバートスペンサー、ジョージ、ヘンリー、ルイス抔といふ時の大家と交際を致すやうに成りました、是れ永年彼女が苦學の結果稍や成効に近き來つた一現象として見らるゝのである。

世の中の事は何に附けても喜憂伴ふもので、彼女が成効の期は近附きて其の天才の衆人に認めらるると同時に、不幸は他の半面より何の容赦もなく襲ひ來つた。千八百四十九年父ロバートエヴンスの病ひに罹り、終に死去したといふ悲慘なる一つの出來事は起つた。孝心比類なき彼女は愁傷の餘り深くも勇氣を沮喪したが、素より非凡のエリオットなれば、其れが反動は早やくも來つて、突飛にも大膽にも單身大陸漫遊を思ひ立ち父の後事を營める後猛然としてフォルシルを發程致しました。是等は如何にも勇猛に過ぎて、我々日本人の目から見ると少しく奇異の感を起さぬでもないが、豪宕の風習ある英國婦人としては、殊に就中非凡なる彼女としては、老父の永別に悲しみを遣るに處なく、却つて全身の勇氣を皷して此の旅行を決行したのはむしろ當然の事で有つたかも知れぬ。併しながら何か支障の起りてや半途にして彼は立歸り、再度恩人チャールスブレイ氏に身を寄する事とは成りました。斯くて一年あまり經過する中、倫敦なる『ウエストミンスター』評論に聘せられ之れを主宰する事に成りました。之れ實に千八百五十一年、彼女が三十二歳の秋の事で、之れより愈々赫灼なる光彩を全歐に放つ時期に立至りました。

左れば彼女が雄健なる筆もて政治文學史傳倫理美術の諸問題を縱横に論評したる評論は、爾來ウエストミンスター評論誌上に顯はれ、以て時の文壇を風靡したる事實は今も尙は人々の唱道する處である。其後千八百五十四年、是れも亦た文壇の一勇將として知られたるジョージヘンリールイス氏と婚する事とは成つた。之れ双蝶の花に舞ひしが如く、他をして其の良緣を羨望せしめたといふ事である。然るにルイス氏が先妻との關係にたづさはりたる事のわりしが爲め、多少彼女の面目を云爲する人も出來ましたが、夫等はまことに些細な出來事であつた。却つて彼女はルイス氏の援助を受けて少なからざる利益を得たといふ事である。現に千八百五十七年の一月に『ブラックラード』誌上に掲げたる『法教師の生活』の如きは、最も多く氏の援助を受けたといふ事である。

其後千八百五十九年にマダムヘード、其翌六十年にミルオンチフロスの二書を顯はし、大いに讀書社會を賑はし何れも非常なる讚美の聲を以て迎へられた、其後間もなく夫妻打連れ伊太利漫遊に出立なし、歸來後あらはしたる一著ロモンこそ、所謂其の伊太利土產なるもので、彼女が一生の著作中他の作物に比して、一段の推敲苦心に成りしものと彼女自身の述べたる程、哲學的小說の最上乘なるものとして永く其の光彩を放ち、今尙は多數の讀書子に愛誦さるゝ千古不滅の文章である。千八百六十六年『フエリックスホルト』を顯はし、二年後の六十八年に『西班牙の惡徒』と云へる戯曲的詩を作り、尙又た七十一年に『ミッドルマーチ』、七十六年に『ダンエルデロンダ』と、殆んど頻年名著作の後を追ふて刊行さるゝものから、彼女が名聲はいよ〳〵高まり來り、今は英國文壇一流の小

說家として畏敬さるゝに至りしと。斯くて千八百七十八年の十一月に至り、良人ルイス氏の病歿せしより、太く悲しみに打たれて、勇氣に富む彼女も一時其の意氣を消沈し、暫らく文壇に其の後を絶ち、再び前日の大手腕を試みられざりしが、超えて千八百八十年の五月、良緣を得て倫敦の銀行家クロイス氏と云へるに嫁したり。是れ彼女が六十二歲の時なれば、斯る高齡の身を以て再婚するが如きは、我邦の人情風俗よりすれば少しく感服する能はざる事あれど、良人の死後は婦人の貞操を喧ましく云爲せぬ彼國の風習としては、是れ以て深く怪しむには足らぬのであらう。

左れど彼女の生命は永からずして同じ年の十二月、假初の病ひに罹り、同月二十三日の夜、遂にまた起たざるの人とは成つた。此の悲報の一度天下に傳はるや、師を失なひしとさけぶ者、畏友に別れしと嘆く者などあらはれ出でしと、其の如何に彼女の讀書社會に迎へられつゝ有りしかを知るに足る。

ハイゲート埋葬地なる、先夫ルイス氏が塚の側らに其の遺骸は葬むられ、永く其の光りを殘し居るとの事である。

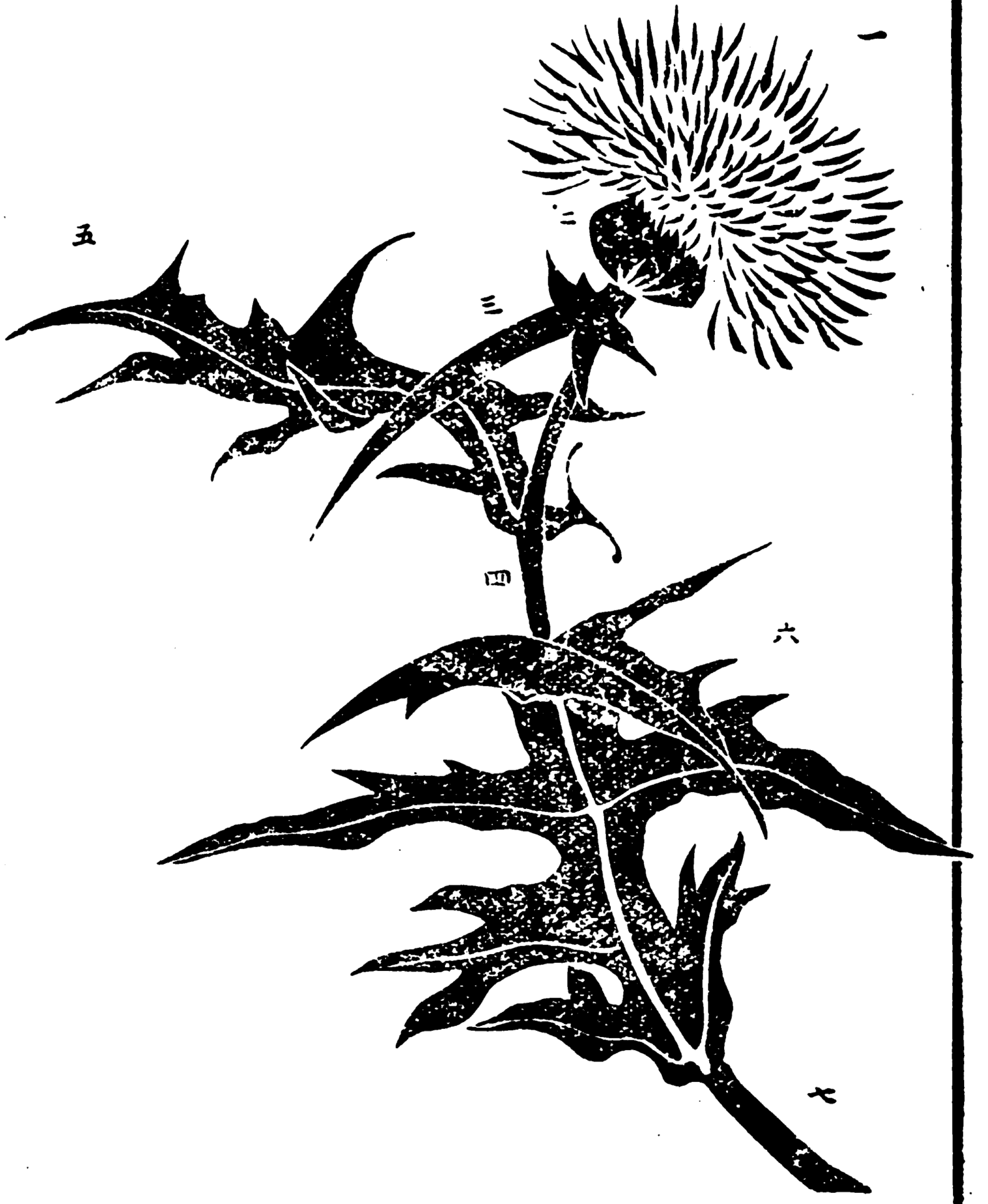
（完結）



和畫通信講義（第卅三回）

山崎彩峨

墨畫にては、淡墨にて、花弁に花臺莖等を畫き、葉は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して畫き、乾きて後ち、濃墨にて葉脈を入るゝなり。


一
二
三
四
五
六
七

彩色にては、胭脂か、または黃色にて花を畫き、黃がち青色にて、花臺莖等を畫き、藍がちの青色にて、葉を畫き、濃墨にて、葉脈を入るゝなり。

地震の話

田中嘉三郎

地震と云ふのは我々の住んで居る土地が、不意に動搖することを申します、我邦は隨分地震の多い國であります。

地震の原因　何故この堅固な土地が動搖して地震を起すかと申しますに、其原因には大凡そ三種類あります。

(一)火山地震、地中で強熱せられた所の水蒸氣、溶岩などが未だ噴出する塲所を得ない時には、何んでも地上に噴出せようとするので自然其邊の土地を震動させ噴火口を中心として順次其附近に震搖を傳へます、併しこの水蒸氣、溶岩も火山となつて噴出するとそれで地震はなくなるのです、火山地震は恐るべきものでありますけれども其害を及ぼす箇所は割合に狹少なものであります、明治二十二年の磐梯山破裂の際に起つた地震は則ちこの種類であります、

(二)陷入地震、地中に滲入した水は伏流となつて地下を循環するものでありますが、此の水流は順々地中の物質を溶解いたしますから自然、地中に空洞が出來ます、そうなると其の空洞の上に當る地盤は自己の重量のために俄に陷沒いたします、この陷沒の折に則ち地震を起るので御座ります、併し其の被害の區域は狹少であります、

(三) 地辷地震(一名斷層地震)　地球はもと熱した瓦斯體が順次冷却して今日の狀態になつたので、今

日とても尚地球内部は冷却を續けて居ります、それ故冷却するに從うて收縮いたします、收縮すれば必ず罅裂が出來ますからそこで地盤が陷没いたします、その陷没が即ち地辷地震又斷層地震と云ふのでありまず、此の種類の地震は前の火山、陷入の二地震よりも度々發生いたし且つ震動も激烈で被害の地も廣くあります、明治二十四年の濃尾の地震は則ち此の種類であつたのです、

地震の震動。地震の震動には二た通りあります、直動(上下動)と波動と云ふのです、直動と申すのは震動の際に地盤が上へ下タに震動するのでありまして地震の中一番恐るべきものであります、激しいのになると地上の岩石、人家、器物などは高く空中に飛び揚げられます、安政二年の江戸大地震は則ち此の種の震動でありまして座つて居つた人が突然一丈位も空中に上げられたこともあります、波動と云ひますのは直動とは反對でして、水平線に平行して震動しますので力は強くても割合に恐ろしくない地震です、大概の地震は大部分が波動の樣でありまず、濃尾の大地震なんかも矢張りこの種類でありました、

も一つ旋動と名ける震動があります、それは二つ以上の震動が互に相衝突し相交叉する塲合に起るので地盤を回轉させるものを云ひます、地震の後家屋などが方向を變へて仕舞ふことがありますのは則ちこの旋動のためであります、

○震動が傳播する速度は一定しません、地盤の構造や岩石の性質等で種々遅速を生ずるのですが大抵一秒時に數百尺以上數千尺以内でありまして平均五六町位のものです、同一の地震は餘り長く續くものではありません又極く大害を及ぼす樣な激動は一瞬間のことであります、併し澤山な地震

が連續して起ることは時々あります、大地震になりますと其の前後に多く小地動が伴ひます、俗に搖り返しと云ふのは則ちこの小震動です、

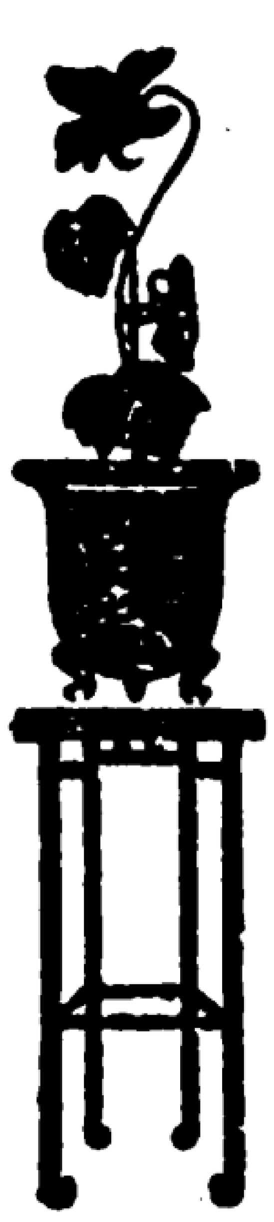
○地震の前兆及び伴隨現象、地震の前兆と云ふて別に一定した者はありません、陰暦の朔望月が地球と最も距離の近い時に地震は多く起り易く、又非常に低氣壓を示し氣候の激變を來たし動物不穩の狀を示すときには、地震が起り易いと申しますけれども、之を以て判然豫知する譯には參りません。

地震に伴隨して起る現象には種々あります、地下が著しく鳴つたり、地盤が裂けて蒸氣溶岩其他の瓦斯を出したり山嶽を崩したり、河水を漲らしたり、其他諸般の現象を伴隨して起します、

地震が若し海中又は海岸で起るを海嘯を申します、明治二十九年の三陸地方の海嘯は則ち海岸の地震であつたのであります。

○地震の分布。地震は火山と大關係ある者でありますから、火山地方には從つて地震が多いのです、故に地震の分布を知らうと思へば火山脈の分布を見れば大概分ります、日本にて地震の多い所は關東地方、仙臺地方、甲府地方、濃尾地方、陸奧の北方、紀伊阿波地方等であります、

東京でも山の手は地震の震動は割合に弱く、下街は割合に強い樣であります、その譯は本鄕、小石川などの山の手は土地が洪積層で硬く、日本橋、京橋などの下街は、泥沙から出來た沖積層又は埋立地だからなのであります。



家庭

家庭に必要なる　法律上要語の略解

磯部武者五郎

法律上の要語には耳馴れざるものありて、従て家庭に於て良人が他人と話しを為す折に法律上の語に及ぶときは、主婦たる者、之を聞きて一寸も其の話の全體が分らなくなることあるべし。されば法律上普通に用ゐられ、また、家庭にて主婦たるもの、一應必要なる要語を左に列記せん。

民法商法に關する要語

資産　人に屬する財産を總括したる名なり。

不動産　移すこと出來ざる財産、若し移すときには、其の物の形を損して其の用を失ふもの、即ち土地、土地に固着せる建物の類をいふ。

動産　移すことを得、移しても形を變せざる財産を動産といふ、家具什器及び版權、所有權の如きものなり。

有體物　形ある者、家屋とか、机、火鉢の類、有體動産といへば室内勝手にある諸道具のこと

無體物　形なき者、權利に關するものなり、專賣特許權、版權の如きもの

物權　所有者が直接に有體物を管理する權利なり

所有權　物を所有して法律の保護を受くることを得る權利なり、之れには占有とて現に其の物品を所持して居ること。次に其の物品を使用することの出來得ること、又其の物品を處分することを得ること、此の占有、使用、處分の三要素を具備するときは完全の所有權あり、

、、身分權　身分上の位置より生ずる權利にして、人格權、親族權の二つをいふ。

、、人格權　生命、身體、名譽等に關する權利なり、

、、親族權　親類上の關係より生ずる權利、即ち親の子に對し、後見人の被後見人に對し、夫の妻に對する權利の如きをいふ。

、、債權　他人に對し義務を行はしむる權利、即ち金の貸主が借主に對して辨償を求むる權利なり。

、、任意　心任せといふこと。

、、代理　他人の事を代りて處理することなり。

、、無効　其の行爲が法律の上で、何等の効果を生ぜずとの意なり。

、、取消　既に爲したる事を、後に至りて以前の有様に回復せしむることなり。

、、抹消　取消と同じことなり。消滅に歸せしむることをいふ。

、、不法行爲　法律に禁ぜられたる行爲を爲して他人を損害せしことなり。犯罪とは別なり。

、、善意　不法なる事實を知らずして又は、將來他人の迷惑となる事を知らずして爲したる事は善意の所爲なり。

、、惡意　不法なる事を知り、又は他人を迷惑せしめんとして爲したる行爲は、惡意の行爲なり。

、、損害賠償　損害とは、現在、過去、未來に於て利益を失ひたることをいふ。現在の損害とは現に有する利益を失ひたること、過去の損害とは、過去に於て、既に得たる利益を失ひたること、未來の損害とは、未來に於て收得すべき利益を失ふこと、賠償とは、其の損失を塡補して損害を受けざりし以前の有様に回復せしむるをいふ

、、地上權　他人の所有する土地の上に建物を建て又は耕作物を爲し、又は樹木を植ゑて所有する爲

其の土地を借り受け使用することを得る權をいふ。

永小作權　二十年以上五十年以下の期間に於て、小作人は小作料を地主に納め、其の土地を耕作し、又は牧畜を爲すことを得る權をいふ。

地役權　他人の土地を約束を定めて使用する權をいふ。たとへば、自分の田に水を引く爲に、他人の土地に溝渠を作り、自分の土地へ往來する爲に他人の土地を通行するが如き權なり。

（以下次號）

慈母と愛兒（承前）

山形女子師範學校長　津田元德

●胎敎の効力

されば、前回心、身發達一般標準に叶ひたる生兒は、所謂普通の玉の如き愛兒たるにて、此等の標準に合せざるは、何れか不完全なるものと知るべし、其の不完全にして普通の標準に合せざるは、そも何故なるか。此等の事こそ慈母たる人のいと深く、いと厚く考ふべき事ならめ。世人或は胎敎の無効なるを大聲する人あり、げに六歳以上の兒童を學校に入れて、文字文章を學ばしむる如く、胎兒には賢明聰智の、目に見ゆべき敎育を施され得ざるは、前回心意の發達狀態に照しても明かなるべし。故に、マレブランチ氏の著なる眞理の探求中に、一婦人セントピーターの頭を見入りたりしが爲に、其の生兒の顏は其人の如くなりきと云ひしは過大に失せしものにて、甚しきに至りては、乳汁によりて、其乳母に酷似するものありとの說を爲すものあれども、未だ牛乳のみ食せし幼兒が、牛の如く遲鈍たりしを聞かざるなり。然れども、大人も飲食物によりて其身の健否別

る、如く、幼兒も、實に此の乳汁特に胎内に在りては、母の血液の如何によりて、生兒强弱の別を生じ、從つて賢愚の基礎、特性偏向の要素等は慥かに此血液の問題によりて決定せらるべし。況んや其の受胎當時の血液を良否に於てをや。されば要するに、胎敎は、兩親の血液問題に歸着すといふべきなり。

則ち、モンテール氏の云へりし如く、出産は、吾人に父祖の體形を以てするのみならず、又世の心情の鑄型を以てすると云ひし如く、(一)生命と人類とを賦與せられ、(二)種族と家族との特性幾分を傳ふるは明かなる事にて、此等を傳ふるもの必竟、血液に外ならざるべし。されば、

一、受胎以前の兩親の血液

二、受胎當時の兩親の血液

三、受胎以降の母體の血液

は、新生兒より老年に至るまで、則ち一生涯に非常の關係を有すべきなり。今其の影響の尤も大なる條項を詳述すれば、左の如し。

- 一、受胎以前の兩親の血液
  - 血族の重姻
  - 兩親の不謹愼
- 二、受胎當時の兩親の血液
  - 兩親の飲酒
  - 兩親の感情
- 三、受胎以降の兩親の血液
  - 血液の變化
  - 母體の激情
  - 母體心身特に神經過變の使用
  - 母體の顚躓

●●●●●血族の重姻　此一事の人生に大關係あるは、既に、我民法に於ても、從兄弟姉妹の結婚を禁じたるにても明かなり。尚、其の恐るべきを知らんには、盲啞學校生徒の失官原因を取調ぶること專

要なれ。實に、世のなべての盲唖は、大凡此の重姻の爲に生れながらの不幸兒とあり、胎敎も旣に業に力及ばざる有樣なり。恐れても恐るべきは、近き親族の結婚なるべし。

東京盲唖學校に於て、明治三十三年三月末日に取調べられたる盲唖生の失官せる原因を見るに五歲以内にて種々の原因により失官せるもの尤も多く、特に、生來失官せるものは、殆んど三分の一以上たるが如し、此生來の失官者は、十中八九迄は、近き親族の結婚せる兩親より生じたるにて、生後失官せる原因の十中七八も、亦此の如き兩親よりの子なりといふに至りては、誠に恐るべき事といふべし。特に、

●●●●●

兩親の不謹愼――盲生の大部分を占めたる原因の、遺傳黴毒、化膿性結膜炎等の如きは、實に兩親、又は、其祖先が不謹愼の結果たる事は、誠に

東京盲唖學校　盲生失官原因表　　明治三十三年三月末日

年齡＼原因	生來	遺傳黴毒	化膿性結膜炎	神經知覺核敏	腺膜結敏	麻疹	角膜炎	外傷	天然痘	腦膜炎	膿漏性結膜炎	内障眼	網膜炎	生初眼炎	窒扶斯	打	不詳	合計
生來	三																	三
一歲		一	一			一								一			五	九
二		三			一		一											五
三		二	二	一	一			一	一						一			九
四		一		二		二						一						六
五		一			一		一								一			四
六				一														一
七				二	一	一	一	一	一								一	八

東京盲啞學校　啞生失官原因表　明治三十三年三月末日

原因＼年齢	生來	一歳	二	三	四	五
生來	五二					
急性腦膜炎（キューキョーフーナウマクエン）		八	八	五	一	一
腦膜炎（ナウマクエン）		七	六	七		一
外耳炎		六	二	四	二	
打腦		五	五	一		一
百日咳		一				
麻疹			一	一		
インフレーンザー				二		
咽喉ヂフテリヤ		一		一		
頭部濕疹						
頭痛				一		
熱病			一			
胎毒			一			
脱腸					一	
不詳		一	一	二		
合計	五二	二九	二五	二四	四	三

恥づべきの至りにて、其子に對しても、面すべき理なしといふべきをや。況んや啞生の大部分を占めたる原因の急性腦膜炎、腦膜炎、外耳炎、打腦等も、素より血族の重姻、熱病、其他の原因もあるべけれど、兩親の大酒、其他情慾の攝生を誤りしもの、其主要なるに於てをや、上に掲けたる表を見ば、思ひ半ばに過ぎむ　（未完）

挿花の話（承前）

小畑いく子

○本花各論

常盤木（つゞき）

常盤木の一般は前回に述べました通りですが、或一派などでは、松、槙などにも或は線金を用ゐて種々の形を造る事がありますが、それは毎度申す通り、花の本旨に背きます。前回に申しました常

盤木類の中にでも、檜にも幾種もあり、槇にも同じく、眞木にも、松にも羅葉、五葉など申す如く幾種もありますが、いづれも本花以外には「低ながし」より外は出來ぬものであります。「低ながし」は既に述べました通り「三」の枝ののびたので松、槇、などには、最多くある自然の形であります。眞木などは殊に勢よく立ちのびた質ですから、其心して挿さねばなりませぬ。またこれに反して這杉は一名をそなれと申しますが、實に其名の如く地上に這ひますものですから、これは充分矯めて、高、中、低のながしものにも用ゐられ、また本花の「二」を高く出して、殊さら「二」の先を垂れて挿る事が出來ます。然しこれは、全體が高く立ちのびる木でないから、「根」はあまり高からぬがよろしい。また矯もよくきゝ保ちもよいものですから、初心の人の稽古挿には最適して居ります。

此這杉についての注意は、此木は非常に表裏のわる木ですから、よくこれを見て同じむきに出さぬやう、且つ「奥」或は「心」には、なるべく側面を現さねば、平たく見えてまことによくありませぬ。

秋草類

「秋きぬと目にはさやかに見えねども」の古歌の心の今更のやうに感ぜらるゝは、年々歳々同じ事ですが、殊に今年の如く雨續きでは、格別夏らしき事も知らねば、いつが夏の終か、いつ秋には移りたか殆んど分らぬ程でありましたが、流石に吹く風にはあらそはれぬ秋の聲を立てゝ居ります。猶それのみならず、夕の露か宵の雨か人こそは知りませぬが、草木はよく知つて居りまして、はや糸萩はひもときかゝる、朝顔は少し過ぎがた、尾花刈萱いづれも穂に現はれて、實に野邊は錦をさらして居りして、四季中此節ほど草花の多き時はあ

りませぬ。そこで挿花の方にも、最も材料は多き時ではありますが、秋草ほど挿け難く、且つ保ち悪いものはありませぬ。然し挿け方に於きましては格別異る事もありませぬが、少しづゝの注意が入るのであります。まづ、

●撫子　は晩夏より初秋にかけて咲く最もやさしき花でありますから、挿方にも其心してやさしく、余り茂らぬやうにありたいのです。また矯めるに困難な花で、もし節の所にて矯めんとすれば、直に折れますから、節と節の間で静に氣長く矯めるやうにせねばなりませぬ。總て本花は「一」の腰を充分矯めて「二」はなるべくすなほに出すやうにするのでありますが、是等の如く矯めのきかぬものは「一」と「二」の分れが窮屈になりて「心」などが出し悪くなりますから、少しは「二」の方も矯めるがよろしい。また撫子は、女郎花と其形はあまり變りはありませぬが、是れには只枝があるため、其枝の配置によく注意をせねば、見切りなどを生ずる事があります。

●女郎花　は其名に負へる如く、何となくなまめかしき姿を備へて居るものですから、なるべくすなほに、やさしく挿したいものです。古歌にも、「秋の野になまめき立てる女郎花云々」とある如くで、すらりと立ちたる處が此花の本分でありますから、腰のあたりなど太らぬやうに致さねばなりませぬ。殊に此花の注意は、花莖が左右中と幷行した三つより成り立ちて居りますから、其向けやうによりては、平くも見え細くも見ゆるのでありますから、同じむきの枝を用ゐぬやう、或は正面を出し、或は横をむけ、或は斜めといふやうに意を用ゐねばなりませぬ。殊に「心」「奥」などは、側面を見せるやうに致しませぬとなりませぬ。また

女郎花の葉遣ひと申して、口傳の一つに致して居る流などもありますが、別にむづかしき事はないのです。全體此花は根の所に葉のあるものですから、其本分を失はぬために「根」に其葉を少しつかひ置くとのとであります、下圖を御覽になれば分ります。

●●桔梗　は女郎花のやうに、一莖一花のものではありませぬが、別に枝のなき花でありますから、かやうな類はやはり「輪挿」のやうに、五本、七本或は九本、十一、十五といふやうに、漸々奇數を以て増しつゝ「一」「二」「三」をはじめ、其他を程よく配置して行かねばなりませぬ。

女郎花　十一本



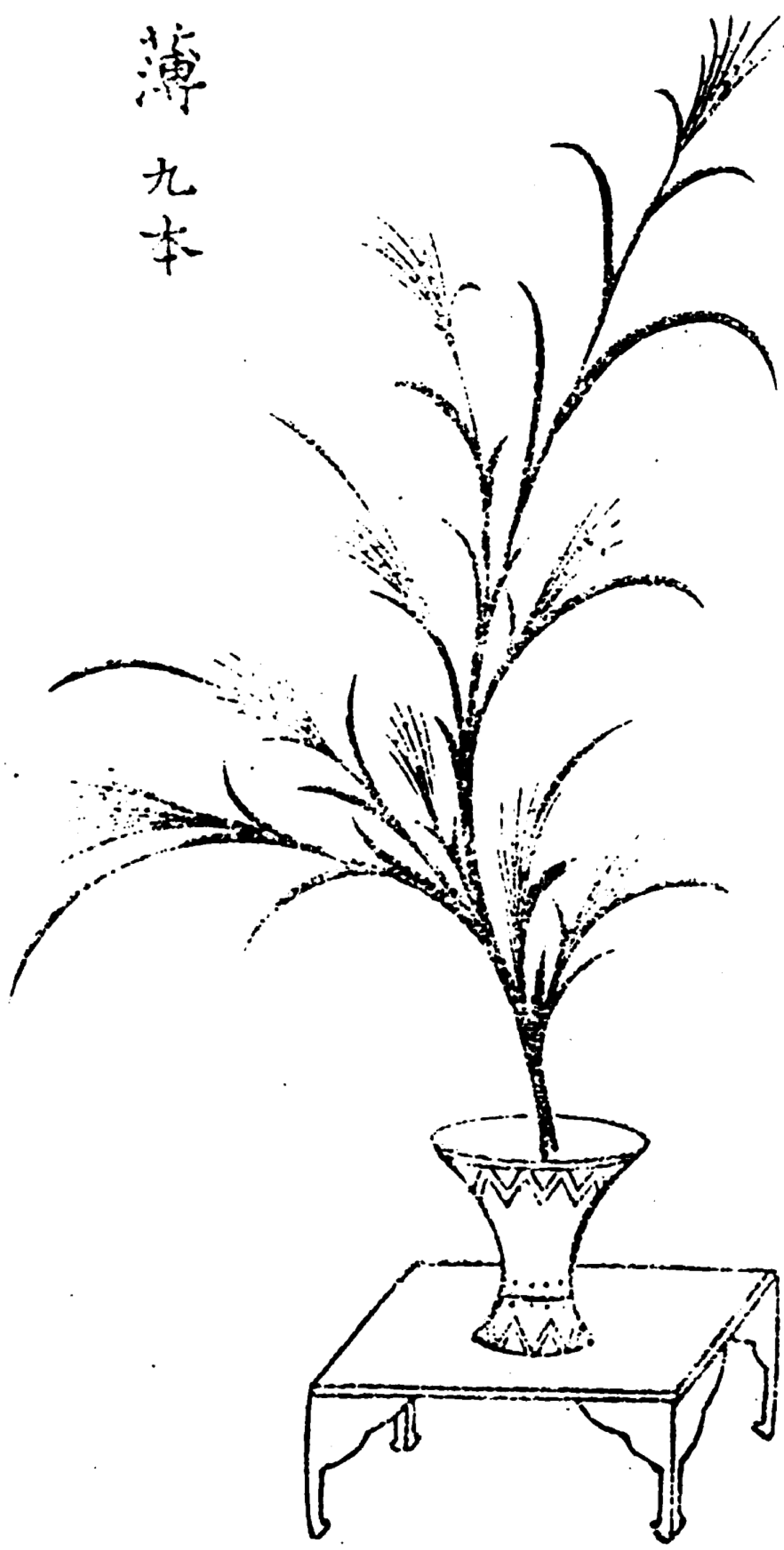
また此花は性質上あまり矯めぬ方がよろしい、殊に此花の水揚法は、所謂中傳以上の者でなければ免許せぬなど、申した者で、現に只今も其邊は行はれつつあるのでありますが、玆に其法を一つ二つ申して置きます。

其切口に石膏をすりつけ、熱湯に浸し湯のひえたる後、冷水に移し置く。又は少しばかりの蓬を

よく煮出し、其煎じ汁にて、凡そ十分間程根元を二寸許り煮たる後、冷水に移し置くのもよい。

是らの種類は皆撫子と同じく、少しづゝ[illegible]を矯るがよろしい。

●刈萱　は至て細きもの、且つ薄などのやうに穂も葉も長くありませぬから、少し位挿したのでは目にもかゝらぬ程であります。また少しにては容易に根がとまりませぬから、是非數には關係なく、株數のみを定めて挿さねばなりませぬ。然し數が多くなると困難なるは、一つにかたまる事と、長短の差のつけ難いのでありますから、なるべく注意して、同じ長さの出來ぬやう、パラリと廣がるやうに挿すのが此花の主意であります。



薄　九本

●薄　は刈萱と性質は同じものでありますが、薄

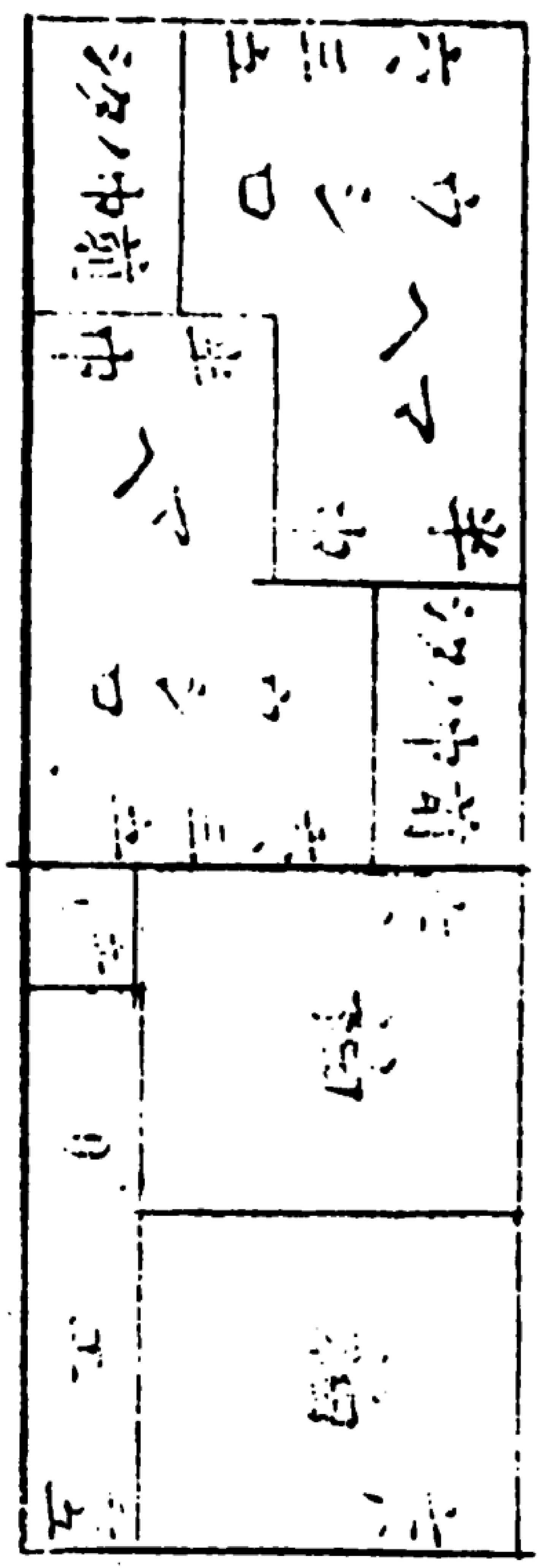
の葉は長く、且つ左右同一平面に生じて居りますから、正面より見る時は、いかにも巾ひくゝ見えます。それ故、もし正面ばかりつかひまするると、双方の葉によりて多くの見切が出來て、それを避けん爲には、遂に葉をのこらず除くやうな事が出來てきますから、必ず同じむきをつかはぬやう、多く側面を現すやうに致さねばなりませぬ。これも矯め方は、決して節に手のかゝらぬやうにせねば直に折れる憂があります。(未完)

裁縫(承前)

横濱高等女學校講師　中村むめ子

三つ身襦袢のつゞき

(一)用布一丈一寸を以て、三つ身襦袢を裁つに袖丈一尺五寸五分にせば身の丈何程なるや、圖に就きて考へよ



(二)常巾一丈三尺七寸の布を以て一つ身襦袢三つ身襦袢各一枚を裁つに、一つ身襦袢の丈一尺一寸袖丈六寸になし衿繼にして、三つ身襦袢の袖丈一尺五寸五分にせば、身丈何程なるや圖解せよ

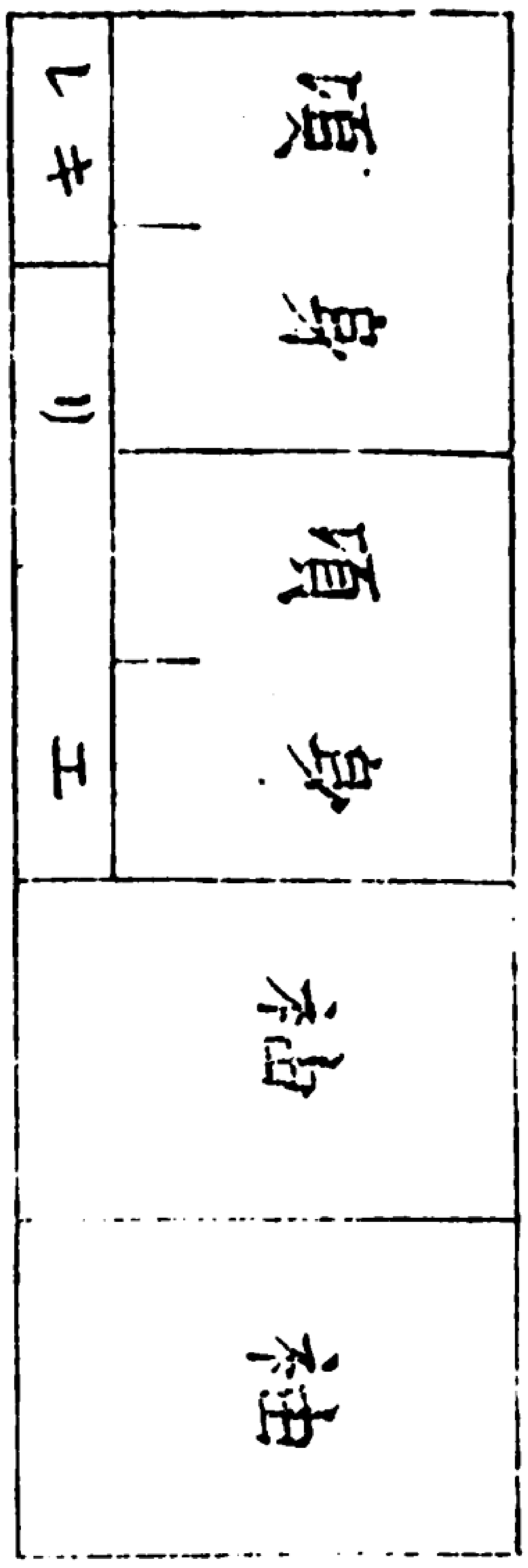
附言　(一)は前巾足しの裁方でありまして、大ぶりの三つ身襦袢であります。
(二)は一つ身襦袢と三つ身襦袢の裁合せ方であります。

四つ身襦袢の裁方

一丈二尺二寸の布を以て、四つ身襦袢の裁方及び積り方

裁切り寸法

袖丈	一尺五寸五分	身丈	一尺五寸
身巾	七寸	衿肩	一寸七分
衿巾	二寸五分		



袖15,5＋身15,×4＝122用布

裁方の解

一丈二尺二寸の中より袖丈の四倍を取りまして、之を二つに切り左右の袖に致します。その殘りの六尺の片端より二寸五分落しまして衿とし、廣き方を四つに折なして衿肩を一寸七分切りて身頃とするのであります。

積方の解

袖丈と身の丈とを合せて四倍すれば用布を得られます。

仕立上寸法

袖丈	一尺五寸	袖巾	七寸五分より八寸
袖付	五寸	身丈	一尺四寸五分
後巾	いつぱい	前巾	いつぱい
衿肩	一寸五分	衿巾	一寸二分

縫方

縫方は三の身襦袢と異ること無し。只衿に裏衿を付くるの差あるのみ。

だいどころ

女子東京美術學校講師　石井湧太郎

○芋摘入の拵やう、

薯蕷、又は馬鈴薯、或は甘藷等、何芋にても皮を剝きて、よく湯煮して擂鉢にて擂り潰し、尤も茹方淺ければ、ぬめり出でゝ具合よろしからずと知るべし。夫れに饂飩粉を三分一程（芋の擂りたる量の）入れ、よく〱練り合せ、俎の上にのべ付て、庖丁の先きにて掬ひ取り、沸湯の中に入り、湯引きて浮上るを取て用ふべし。或は味噌汁を仕立、加料見計ひにて、これに右のすりいもを好きかげんに丸め、取つて煮込み、すいとんの如く食するもよろし。

○薩芋の煮方

なるべく身の厚き薩芋を撰び、皮を剝き、小口より三四分位の厚みに切り、水に浸してよく洒し、薄醬油にて直ちに煮付るなり。尤も煮ながら攪きまわすかよろしからず、煮汁を澤山にして攪きまわさぬ樣煮る事肝要なり。

○いも飯の炊きやう

馬鈴薯又はさつまいもの皮を厚目にむき、五分才形位に切り、水に晒して後ざつと鹽茹にして、笊などに揚げ置き、米は平常の如く、釜或は鍋に仕掛け、煮え立つ時、右の芋を入れ、よく靜かに攪き交せ、煮き上ぐべし。分量は米壹升に、大芋二本位をよしとす。

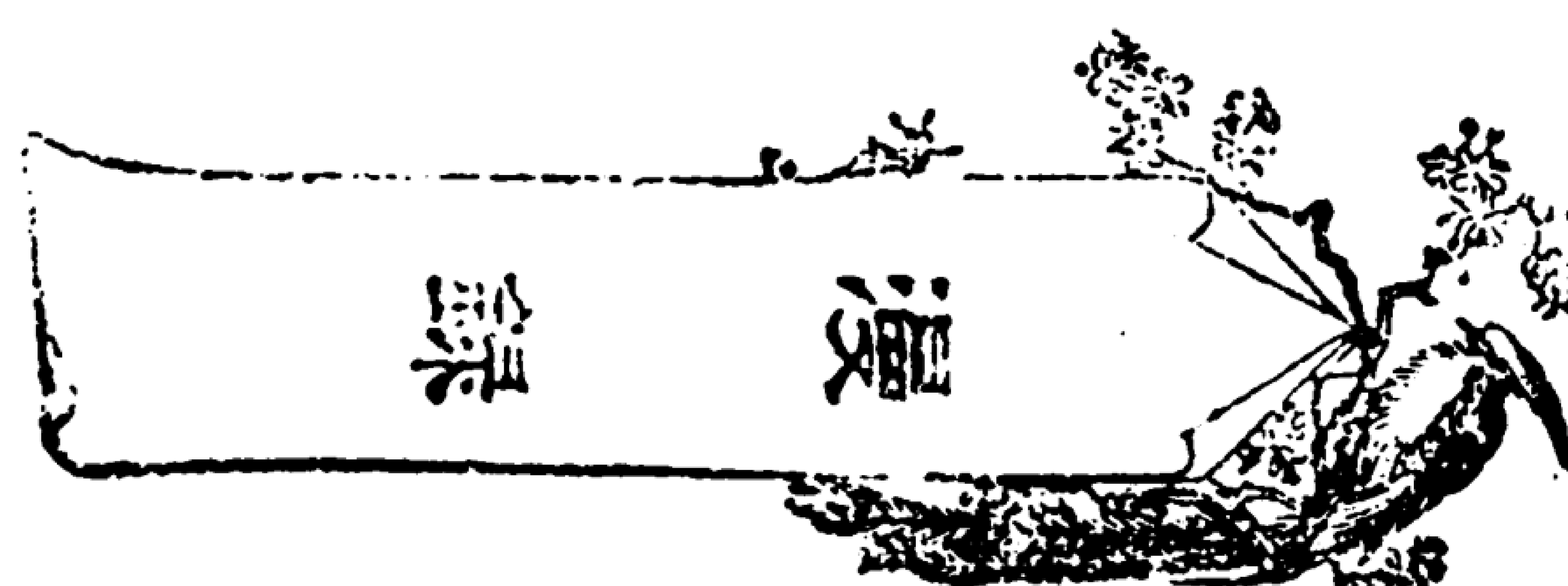
○衣かけ芋

芋の皮をむき、生にて細く切り、生姜も同じく細く切りて、芋の切りたる物に少しを交じへ、麵粉を水にて、ねばりある位にとき合せ、醬油少しを

加へたる物を衣にかけ、胡麻の油にて揚げ食するなり。尤も揚油は、一度煮立たる處に入れ揚げざれば、油の臭香ありて、氣味わるきものなり。

○粉皮豆腐の拵やう

豆腐を板の上に載せ、其の板を少し斜になし置けば、豆腐の水氣自然に絞るゝなり。斯くして之れを奴豆腐位の大さに切り、之れを崩さぬ樣に注意して、前に葛粉を米粒位に崩し置きて、其の中に、右の豆腐を取り入れ、四方に此の葛粉を付けるなり。但し葛粉は盆の如き平なる器に一面に敷き置きて、其の上に轉ずるなり。而して、葛粉の粉皮とありたるを、胡麻の油又は豚の油にて揚げ、洋紙の上に置きて、外部の油氣を取り、醬油、大根おろしにて食するなり。之れは熱き内を最上とするなり。



女子服飾の沿革（第十四回）

上地信成

○髮の裝束

髮の裝束と云ふのは、前回にも記るしました通り、内々の服である。女官飾抄に、主人（主婦也）は、唐衣を着せざる時、小袿をつけ、女房（召仕女）は、單衣、表着、打衣、唐衣を着して、裳を着けぬ例なりと見えて居るが、併しながら、此制は、足利時代一條家の例なれば、平安時代の制とは少しの相違はありませうが、おしなべて、内衣、緋袴、

單、打衣、表着、小袿と着用して、唐衣などは、晴の時以外には左程用ゐなかつたのである。今此順序で説明しませう。

一、內衣　二、打袴

三、單……(以上晴裝束部に記す)

四、打衣＝表着の下に着用する服である。晴の時は、大低畧して用ゐぬのを例として居たが、褻の時は、必ず着用して畧したことはない。地質は綾で、重菱の紋をつくるのが通例である。後世は、専ら平絹の板引を用ゐた。さて打衣と云ふ名は、古へ砧にて打ちて光を出したものであるから、打ちたる衣と云ふ義である。女官飾抄に「打衣の事、紅の綾を打ちて重ねられ候。幼き人は、濃き打衣なり。夏冬かはらず、ひきつくらふ時重ねられ候。常は單ばかり重ねるあり。又單の上に重ぬることもあり」と在るので、其大畧は知ることが出來る。



褻服着用圖
一云小袿姿

此服は、平安朝の末より、足利時代に至る迄は褻の具として專ら用ゐられて居たが、徳川の時代に成つてはいつしか廢せられて、着用する人もなくなつたことは、正徳年間に出來ました、裝束要領抄の後附に「五衣の上に重ねられしが、今の世には見えず」とあるので、明かに知ることが出來ます。

五、表着（晴の裝束の部に記す）

六、小袿＝一に宿直裝束とも云つて、唐衣の代りに着用するものである。こは男子の大袿に對した名で在て、打着るものなれば、かく名けたのであります。其製は、大體表着に同じく、長さは表着より一寸程短かく仕立てある。地質は重に浮織物或は綾を用ゐ、裏は平絹を附けるのが故實でありまする。又中倍と云つて、表裏の間に色變りの絹を重ねることもある。色は一定して居ない。が、其尤も普通に行はれたものは、白小袿二藍小袿（二重とも云ふ、赤花、青花にて染むるを云ふ）紫小袿（紫の白らみきばみたる色なり）葡萄染の小袿（表蘇芳、裏花田に染めたるを云ふ）黒袿（紫の色くろみたるを云ふべに色のぬけたるなるべし）などであります。

〇采女裝束

采女は、晴の服即ち十二單を着用する事が出來ないから、殊に一種の服が定めてあります。此定めてある服を世間で、采女裝束と稱へて居るのである。序ですから一寸采女の事を申しませう。

采女と云ふは、宮中の女官で在つて、重に御膳部の事を掌る。人員は四十七人、何れも諸國の國司や郡司の娘で、年十三才より三十才迄の中から、容儀のよろしいのを撰拔して、之に充て、一定の年期を限つて交代したのであります。

一、内衣　二、緋袴　三、單表……（晴服の條に記したり）

四、繪衣＝采女服の上衣であつて、其製作、及び

形は大體小袿と同じきものである。地質は表に白練或は萠黄の絹又は綾を用ゐ、裏には生絹を附けるのを通例としてあります。而して表には胡粉に種々の色を配合して、雪に椿花、或は海濱に松、浪に千鳥など、目もあやなるまでに、畫いてあります。下の圖に依て御覧になりますれば、大抵は知れますから、別に圖を掲げることは畧します。

采女服着用圖



五、掛衣＝これも、地質、色合、模様などが違ふ外、體裁、製作は唐衣と同じものである。單に衣とも云ひます。唐衣を打かけ着ると云ふ義で、掛衣とも申したものでせう。表は生絹を花色に染め、夫れに胡粉で、青海波或は胡蝶などを畫いたものです。其體裁は、前號に出て居る唐衣の圖を御覧下さい。而して其着用の圖は、上圖に就て見ればよくわかります。

六、大垂髪、釵子平額、………（頭髪の部に記す）

以上は、只其一班ですが、元より之を精細に申しますれば、位や官或は家柄によりまして、地質、文色など、一々定まつて居ります。又禁色と云ふ制が在て、何位にならなければ何々の色は着ることは出來ぬなど云ふ制が定めてありました。併しながら、何れも地質又は色あひ、文がらなどの相違して居るばかりで、衣服の種類は以上申しました外に、細長、水干の二つがあるばかりで、如何に皇后、女御などの貴き方々でも、他に異なつた服はないのであります。故に皇后様は何色で、何々の模様の服であるなど〻細かいことを、一々記載したとて、左程必用もないこと〻思ひますから、只其名丈を記るして置きませう。

女御御装束　典侍装束　内侍装束　命婦装束
内親王御装束　女藏人装束　走孀装束　雜仕装束
姫君御装束　女嬬装束　下仕装束　童装束
高宮御装束　乳母代装束　おシモ装束　樋洗装束

以上其主なものであります。何れも地質色文などで區別がしてあります。

筆のしづく（四）

文學士　田淵芙蓉

昇殿をば許されで、伊勢の瓶子（平氏に通ず）とまで罵られし人の子も、一たび時をだに得ば、など、花咲く春に遇はざらむ。保元平治以來、しら旗つひにきそひかね、一門の榮花極まりて、淨海おもふが儘に振舞ひにたれば、玉夢夜な〳〵おだやかならず、院の御心の中やいかなりけむ。西光康賴等と語らはせられ、東山の麓なる鹿谷に集はせられて、深く謀らしめ給へり。されど、口洩れ易きは、

たゞに酒瓶のみにはあらざりけり。これを聞きたる淨海、烈火のごとく怒り立ち、俄に物具したる兵を呼び寄せて、あはや、畏れ多くも、院の御所まで寄せんとせしが、小松の操かたくして、ことわり盡せし言葉には、さすがに耻ぢてや、そのまゝに思ひ止まりぬ。かくて西光は斬られ、成經、康賴、俊寛の三人は、南の端なる、鬼も住むらむ鬼界ケ島に流されて、こゝに一段落を告げたり。

されば、その妻子らは、此處にさ迷ひ、彼處に隱れて、世を深草や紫野、軒端にかゝる忍草、葉末の露を命にて、細き烟の詫住居なれど、八重の潮路遙かに、彼人等は、なほ甚しからむなど思ひ遣りぬ。同じ心の流人等も、鳥も通はぬ絶海の孤島に放たれ、竹を柱に、海屑を蔽ひとして、僅に身を置きけれど、雨のあしたはふせがむすべもあらで、徒らに涙の袖はぬれ増り、風の夕は、潮風いとゞ身に染みて、故鄕の空ぞ忍ばれける。年月に關守なく、三月と經ち、四月五月と過ぎぬれば、衣は破れて文目も分かず、塵垢皮膚に滿みて臭氣紛々たり。髮蓬々として顴骨そびえ、姿いたくやつれて毫も昔の俤を留めざりき。康賴成經は、熊野權現を深く信じければ、今一度都に歸らなむとて、常に祈禱したるが、殊に康賴は、その悲みに堪へで、千本の卒塔婆を作りて、面に左の二首の歌を書きつけたり。

さつま潟波の小島にわれありと
　親には告げよ八重の汐風

思ひきやしばしと思ふ旅だにも
　なほ故鄕は戀しきものを

さて、その頭には、阿の字の梵字を書き、下に康賴法師と記し、うちよする白波ごとに投げ入れて、一心をこめて祈りけり。あゝ、その歌は、巧妙な

らざれども、眞心流露して余蘊なく、雄大ならざれども、悲痛の跡、能く人を泣かしむるを見ずや。こゝに康頼のゆかりある僧ありしが、若し風の便りもやあらむかと、都を跡に殘して、西國に旅立てり。まづ嚴島の社に詣でゝ、廣前に伏し拜みけるほどに、暮色蒼然として遠きより來り、磯の千鳥の聲さわがしくて、そゞろ斷腸の念やみがたく、鬼界ケ島の流人を案じ煩ひつゝ、ふと青海原を見渡せば、白波にゆられて、岸近く寄するものあり。魚貝にもあらず、藻屑とも見えず、拾ひ取りて見れば、待ち設けたる康頼の、はかなき筆のあとを殘せる卒塔婆なりけり。鬼の首を得たる心地やしつらむ。神の靈驗とうち喜び、再び都に上りて、かの母君の隠れがなる紫野に到りて、これを示しければ、母君え堪へで伏しまろびぬ。千筋の涙袖を濕して、玉の緒もやがて消えなんとす。かくてあるべきにあらざれば、やがて之を小松の大臣に奉る。情けふかき大臣の事なれば、すぐさま父の入道に傳へたり。院はこれを聞召して、いとあはれに思召し、平家の殿上人どもまで、みな衣の袖を絞らぬはなかりけり。且つ京洛の人々此歌を聞きつたへて、やう〳〵口ずさむにいたりしかば、さすが暴横なる入道も、木石ならねば憐れを催しけむ。當時、女の中宮建禮門院、御産のおん惱みありて、祈願ありける折りなりければ、遂に成經、康頼の二人をば赦免せられたり。噫、鹹風蠻雨に苦みし身の、都の月を見る樂しさ。これ僅か二首の歌が、この動機となりしが故にあらずや。

（未完）



枕草子に現はれたる社會

文學士　小林雨塔

文學として枕草子の價値は此に云はず、淸女が燃犀なる眼光は、當時の社會の眞相を洞見し得て、之を機才縱横の筆に發し、寫し出せる所、千紫萬紅の態を成せるものは此の草子なり、上は鳳闕の中を初として、下は乞丐の徒に至る迄、彼女が精致なる觀察を漏れず、縉紳侍姬生活の表裏、世の笑ふべき事、哀しむべき事、憎むべき事、宛ら當時を見るが如く、魑魅魍魎悉く見はるゝものは此の草子あり、されば、かゝる作物の史料としての價値の絕大なるも亦知るべきのみ、人の熟知せる如く、平安王朝正史を有すること少年代に過ぎず、其餘の歷史は茫漠として、漸く二三の雜史によりて、其萬一を伺ひ得るに過ぎざるあり。されば此の草子の如き文學的作物を除いては、當時の社會の眞面目得て見る可らず、又貴重すべき史料ならずや、此の草子の記せる所、多く一條天皇の御宇に係れば、本書にて伺ひ得しも、亦、此の一代の事實に過ぎず、されど思ふに人情風俗の轉移しかく急劇ならず、以てやゝ平安全朝の狀態を類推するに足らん乎、世平安王朝の柔惰淫侈を口にすること多し、されどいかばかり然りしかを詳にせず、此等を見得るもの、此等の草子に若くはなからん、遮莫、此の一部の書の記事、社會萬般に悉く涉れるにもあらざれば、出來得べくば、他の多くの作物をも見て、彼此照合すべかりしに、今は之に及ぶを得ず、只當時の社會の一班の實相を見るを得ば足れり、

第一　信仰

佛教我が邦に傳はりてより、既に多くの年所を經

たり、其人心に入れる事の深さ又知るべきのみ、佛敎は前世後世の因果應報を說き、現世の無常を敎ふ、少納言が犬の打ち殺されしを聞きては「何の身にかこのたびはなりぬらん」と云ひ、結緣八講の尊さに感じては「もとめてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは」と詠める如き、明らかに佛の敎へし思想にして、人々夢寐の間も此る觀念を懷きしなるべし、さはれ思ふに、夫の敎の眞影響は未だ甚だ大ならず、浮世の味氣なさを覺るは身の逆境にある時のみ、こは人間あべての情なるべけれど、生を厭ふて故らに死に赴くものは未だ聞かず、枕草子一篇殆ど厭世の語句を見るを得ざるは、此れ必ずしも淸女一人の思想なりと云ふべからず、又當時上下の生活狀態より見るも、方に時は樂世時代の絕頂にして、法師の生活尙且殆ど俗人と異なるなく、說經、法會、佛講の類に、男女互に相見て喜ぶの場に過ぎざるの感あり、因果の理は聞けど、爲に身を愼しむものもなく、信仰の敬虔終に見る可らざる歟、要するに當時佛敎の影響多く皮相にして、寺院堂塔の莊麗、儀禮法式の盛華の人目を眩せしのみ、後世鎌倉室町時代の如き、厭世の悲觀は平安朝の人心の知らざりし所ならんか、只此等の知識を得て、社會の思想豐富となりしは疑を容れざるなり、今少しく當時專ら行はれし說敎佛會の狀よりして、寺院の樣を見む、

●●說經、納言記して曰く「說經師は顏よき、つとまもらへたるこそ、その說く事のたふとさも覺ゆれ、外目しつれば、ふと忘るゝに、にくげなるは罪や得らんと覺ゆ」、當時人々の說經所に行く目的の浮きたるも思ひやらるゝに、尙記して云ふ樣「又たふとき事、道心おはかりとて、說經すといふ所に

さいそにいきゐる人こそ、猶この罪の心地には、さしもあらで見ゆれ』と、此れ明らかに、逸早く說經所に行くもの丶、さあらずもがなと尤めしもの、信仰崇佛の爲めに出るに最初に行きしとて何をか尤めん、其目的の多く信仰にあらざるを以てなり、一度か丶る塲に足を容れては、常に詣でんことを思ひ、しかも裝束の美に思を凝らし、久しく逢はざりし人に會しては、珍らしと物語し、左右を眺めては、聽衆の車の美惡を評し「この說經の事もき丶入れず、なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れて、めづらしう覺へぬにこそはあらめ」、會するものは男女、老少、貴賤打ち混じ、美男、美女の出で入るには、眼を圓かにして喜び見る如き、以て其塲の狀を察すべし、さて說經終れば、「聽聞衆など立ち騷ぎ、ぬかづく程にもなくて、よきほどに立ち出づ」さもあるべし、而して

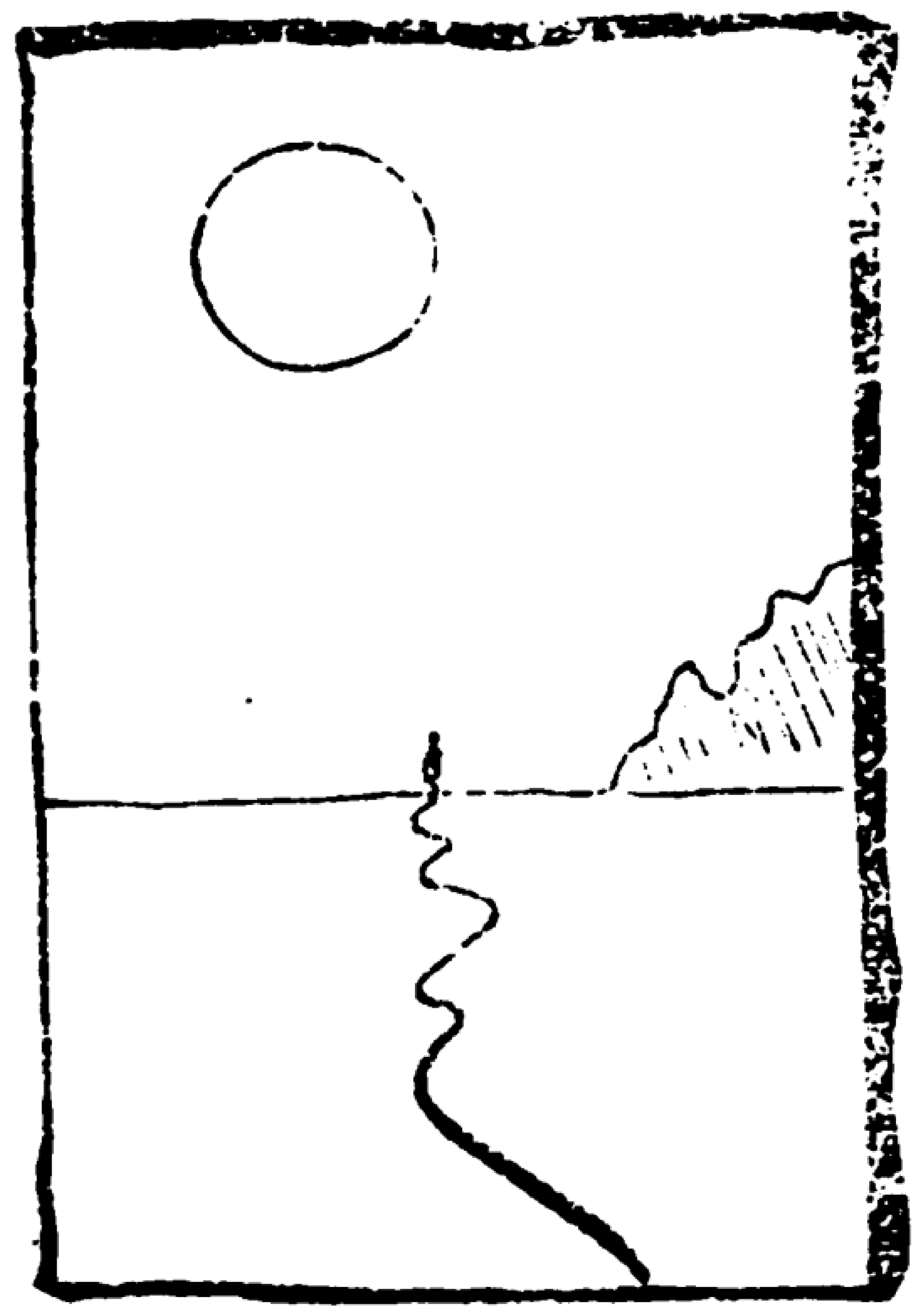
記する所に依れば、女人等の說經所等に行くは、此の頃最も盛にして、やゝ以前には、流石に若き女の徒步往來を行くさへ少なかりしとぞ、

●●●結緣八講　縉紳家の催す所なれども、世の俗衆の觀覽を許せしなり、物見車四方より集り來て、實に轅二三をさし重ねて車を立てし等、群集の狀見るべし、殿上人上達部、皆衣冠服飾の美を極め、女車の立てるを見ては、歌を送りて之れに戲れ、返歌を得ては、其巧拙を評して、笑ひさゞめき、ゆめ尊き佛講の塲とは見えず、只男女相見るの機會を作りしなり、されば清女の記に曰く「すべてたふときことの限にもあらず、をかしき物見なり」と、其光景想像するに足れり、

此の他專ら行はれしは經供養、季の御讀經、不斷の御讀經、御修法、御佛名等尙あるべし、

當時の寺院の狀を窺ふに、此頃參詣の多かりしは

高野、鞍馬、長谷寺、清水等なり、寺にては「局」と云ふものして、籠り居ることあり、清女自ら初瀬詣を記する中に、「局にゆく程も、人の居並みたる前を通り行けば、いとうたてあるに、犬ふせぎの中を見入れたる心地、いみじく尊く、などて月頃もまうでず過しつらんとて、まづ心もおこさる、燈明常燈にはあらで、うちに又人の奉りたるおそろしきまで燃えたるに、佛のきら〳〵と見え給へる、いみじくたふとげに、手ごとに文を捧げて、禮板に向ひて、論議誓ふも、さばかりゆすりみちて、これはと取り放ちて、聞きわくべくもあらぬに、せめてしぼり出したるこゑの、さすがに又紛れず、千燈の御志は、なにがしの御ためと僅に聞ゆ」云々、是れ現世未來の幸福を祈りて詣づる



人々、各佛燈を献じて、法師をして、己れの爲に祈願をこめしむるの狀なり、法師には料を與へて誦經せしむとかや、殊に正月には、欲深き望を佛に願ふて、隙なく詣でくと云ふ、眼を轉じて一方を見れば、當時の迷信又甚しと云ふべし、修驗者の輩、日々加持祈禱に暇なく、驗あるものは佛とも信ぜらるゝ物祟と云ふこと一般にあり、之を去るには、只修驗者の加持祈禱、陰陽師の祓等に依る、時には物祟つきし者の、祈禱中氣絶することあり、さるときは水を吹きかけおどして、息を吹き返さしむ「いと麗しく、長き髮を引きゆひて、物つくとて、起きあがりたる氣色も、いと心苦しく、らうたげなり」とは、物祟に病める女の狀を記せるものあり、又「ありまし」とて、

修験者に使はるゝ者あり、物祟つける者の病甚しく、修験の苦に堪へざれば、此れが代を勤むるなり、修験の狀を記して曰く『物祟にいたう病む人にやうつすべき人とて、おほきやかなる童の、髮など麗しき、生絹の單衣、あざやかなる袴長く着なして、ゐざり出で、横ざまに立てる三尺の几帳の前に居たれば、外ざまにひねり向きて、いとほそう、にほやかなる獨鈷を取らせて、をゝと目うち塞ぎて讀む陀羅尼もいとたふとし、顯證の女房あまた居て、集ひまもらへたり、久しくもあらで、ふるひ出でぬれば、もとの心失ひて、行ふまゝに隨ひ給へる護法もげにたふとし、………みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさ、………申の時にぞ、いみじうことわり言はせなどして許しつ、云々』と、余近來徳川時代修験の事を記せるものを見、又今日尙行はるゝを聞きしに、其樣略此と同じく、迷信の世に瀰蔓せること恐るべきなり、或は此れ一種の精神病か、當時は又物忌、方違など云ふあり、暦日方位に吉凶を分ち居れば、日の凶なる、其他のつゝしみに會しては、物忌とて、家内に籠り居て身を愼み、外よりの人又書狀なども取り入れず、方違とは、とある所に行くに、明日は其方位惡しとて、今夜他の方位の人の家に行きて宿し、さて明日出で行く等の事あり、現今尙此の風俗間行はる、

精進の行は盛に行はれ、千日の精進など云ふさへあり、又十二年の山籠とて、比叡山中の業を積み、あるは稻荷の七度詣とて、極めて嶮しき山路を、一日に七回行き返り詣づるなどの事をなす。又御嶽精進と云ふもあり、御嶽とは高野山の事なり、河原に出でゝは、呪咀の秡とて、陰陽師を賴み、

寺にては法師祠にては禰宜、專ら人々の祈願の事を行ふ、

（未完）

諸道の歷史

五、繪畫（上）

文學士　宮崎鳥府

繪畫は、本邦美術の第一にして、其起原は、遠く神代の昔にあれど、繪畫として一定の形式を備へたるものは、唐土より傳はりたり、日本紀雄畧天皇七年の條に、百濟より畫部、因斯羅我を貢すとあるは、史に見えたる初めなるべし。次で、魏文帝の後裔安貴の歸化するや、其子辰貴、繪畫を善くせしかば、武烈天皇に寵せられ、子孫相嗣ぎて畫事を掌り、天智天皇の朝、倭畫師の姓を賜ひたりきとぞ。

欽明天皇以後、用明、推古の朝に至りては、佛教の流盛と共に文運の進歩したりし結果、畫事も大に進歩したりければ、聖德太子は、畫師を諸方におきて佛畫を作らしめぬ。此時より、繪畫はやゝ我邦に傳播せり。當時高麗僧曇徵渡來して彩色の法を弘め、百濟よりは阿佐太子歸化して、此法を奬勵し、また文武天皇の太寶元年殊に畫工司を設け、正以下の職を置きて繪畫の事を掌らしめ、畫師四人を置きて六十人の畫部に敎習せしめられき。

かくて奈良時代を經て、平安の初期、本司を廢して更に畫所を置き、別當を長官となして、大に繪畫を奬勵せしめられぬ。されば、是等の爲に、その技進歩したるならんとは、みな人の想像する處なれども、實際に至りては、未だ幼稚なりし也。これ主に佛像の傳寫、及び宮殿、佛閣の彩畫に止りて、眞物を描寫するの研究をなさゞりし故ならむ

然るに淳和天皇の朝、百濟の阿成あらはれて、文德帝の朝、繪畫を以て屢々朝廷に召されたり。彼は、殊に山水草木及び人物を好くし、其畫く處、自ら生くるが如く、笑ふが如く、まことに其妙を得たりき。次で延喜天暦の頃、巨勢金岡出て、専ら眞を寫すを以て本となし、大に名聲を得たり。後世畫人の事を談ずるもの、先づ金岡を魁となす。これより繪畫は、全く專門の業となりぬ。

金岡は、中納言巨勢野足の子なり。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐、の五朝に仕へ、貞觀の頃に神泉苑の監となり、次で釆女正、隼人正を拜し、従五位下に叙せらる。今その事蹟の著しきを記さんに、元慶四年に釋奠行はれし時、先師先聖の像を畫き、仁和の四年には、源直方、藤原興基等をして弘仁以前の詩聖を選出せしめ、清凉殿の障子に其像を畫かしめられ又、紫宸殿に賢聖の障子を始めて建てられし折りも、像をば金岡仕うまつり、賛辭は小野道風記されしといふ。此時にや、宮中朝餉の間の前に馬形の障子と云ふを建てられし時、金岡仰を蒙りて馬を畫きたりしに、其馬、夜なく〳〵脱け出で丶、萩の戸の萩を食ひ荒したりければ、天皇勅して、其馬を繫ぎたる體に改めしめられしかば、忽ちに止みたりと語り傳へらる。

此他金岡の書きたる馬に就ては、奇異の事ども數多傳はりたれど、何れも後人の附會説にして、信がひがたきもの丶みなれば略けり。金岡が畫の世にもてはやされしと此の如し。而もその神妙なるは、只に馬のみに限らず、山を畫くに、十五層にた丶みなして、遠近をわかちたるに、孫弘高は其技劣りて、僅か五層より、書き別つことを得ざりしと云へば、山水にも、秀でたること推して知らるべし。其子孫、相見、公忠、弘高等、皆業をつ

ぎて、丹青に妙を得たりき。

又、當時金岡の孫、弘高と相并びて、藤原爲氏、藤原基光など、皆繪畫を善くせり。爲氏は、宅磨家の祖、基光は、巨勢家の畫傳をかけ、艶美を主として、此技を研究したりしかば、やゝ其眞を失ひたりと雖も、其技に至りては、遙に巨勢氏の上に出でぬ。後世此風を倭畫と稱し、基光は、遂に土佐家の祖と仰がるゝに至れり。想ふに倭畫は、元、支那の畫風を日本化したるものにして、畫體は源氏物語、歌仙、及び寺社の縁起等の繪にて、極彩色の極めて緻密なるものなりしならむ。今倭畫と佛畫とを比較するに、其異なる點は只金色を施すと、然らざるとの別にあり。又、基光を呼で土佐の祖と稱するは、其裔經隆、土佐守に任せられてより、代々、土佐守を拜し、畫所預に任ぜられしより、土佐を以て氏とするに至りたればなり。其裔廣道に至り、姓を住吉と改め、今に子孫其家學をつげり。目下考古學者として名高き、川崎千虎翁は、實に此系をつぎたる人なりと。

此時代に於て、三井寺の長吏、僧正覺猷又繪をよくす。或時供米の不法の事ありけるに、辻風の吹きすさびて、米俵を多く空に吹き上げたるを、法師ばら走りよりて、取止めんとしたる形を樣々に面白く畫きたりけるが、何日しか院の御覽じ給ひ、御入興ありて、其意を尋ねられしかば、此頃供米に、實の物は少なく、重に糟粕のみなれば、輕くて風に吹き上げられしなりと申上げられし由著聞集に見ゆ。これより覺猷は、畫を以て名を得て、後、鳥羽に退隱したる故を以て、世に鳥羽僧正と云ひ、其畫を呼で鳥羽繪と稱し、後世盛に流行したりき。

鳥羽僧正は、西宮左大臣高明公の孫にして、天臺

の座主、三井寺の長吏たり。其書く處今に傳はれるは、信貴山緣起、鳥獸戯畫、華嚴緣起等尤も名高きものなり。

此時代は、實に、繪畫の起原、發達したる時代にして、以上の專問家を出したる外、又貴族官人中に數多の名士を出せり。殊に名高きは、寛平法皇、冷泉院、花山院、及び空海、忠仁公忠平、飛鳥部常等の如きは、其妙手中の妙手なりき。（未完）

結婚に對するトルストイ翁の意見

法科大學　佐藤天風

（一）翁の性格

人生を支配する半面を男性といひ、他半面を支配する之れを女性といふ、二者は常に對角線的方面を取りて相交叉し、此に所謂意義ある人生を生ず社會國家は、即ち悉く此大基礎の上に其高樓を築かれしものに異らず、

故に一切の歴史は都て此間の關係より發展し來り、一切の平和戰鬪、一切の進歩退歩心的といはず物的と云はず、あらゆる人類の所産あるもの、皆此上に其根本を横へざるもの無し、之れを以てか、此關係は或は光彩ある文明の精華を展開し、或は黯憺たる腐敗の汚濁を放流したりき、之れが故に、苟も人生の大問題に煩悶し、懷疑の中より光明ある解決を得んとすゝの大士、皆悉く此問題に觸手せざるものなし、小說Kreutyer Sonata"、及び異性間の關係を解決せるの論文、是れ實に、如斯にして得來りし、トルストイ翁の偉大なる答案即ち是なりき、

翁は熱心なる自由平等主義の人なり、同時に最も

誠意なる博愛主義の人也、然れども彼の自由平等は、至上なる無限なる絶對的神を認め、此神より人類を見たる場合に立て、推定し確信し來りたるものならざるべからず、故に彼が道義の方面より觀じたる理想は、頗る高遠幽迢にして、殆んど神秘主義禁慾主義に等しき程のものなりき、哲學的究理に加ふるに、更に宗教的狂熱を以てし、得たる眞理は悉く實現せずんば已まざる底の熱血かの一家の財產を傾倒して直ちに之れを窮民に分與せし如き、或は孜々矻々自ら靴工の間に入りて勞働せし如き、彼の行爲は時に宛も狂人に類するものありき、之れを以てか、萬一彼の究理にして、昔者麻謌滅土の如き者に到達せんか恐らくは彼は荒野に立ちて、劍に胡風を屠るの、東歐に於ける一大英傑漢となりしやも測るべからず、要するに彼の性格は、其狂熱なる點に於て、殆んど野に叫ぶ豫言者の面影を殘し、其理想の高尙なる點に於ては、殆んど平和的宗教開祖の壘を凌がんとするものありと云ふべきなり、然らば彼が非結婚說を觀察するの前に、少くとも彼が理想とする處を一瞥して其因て來る所以を詳かにせざるべからず、

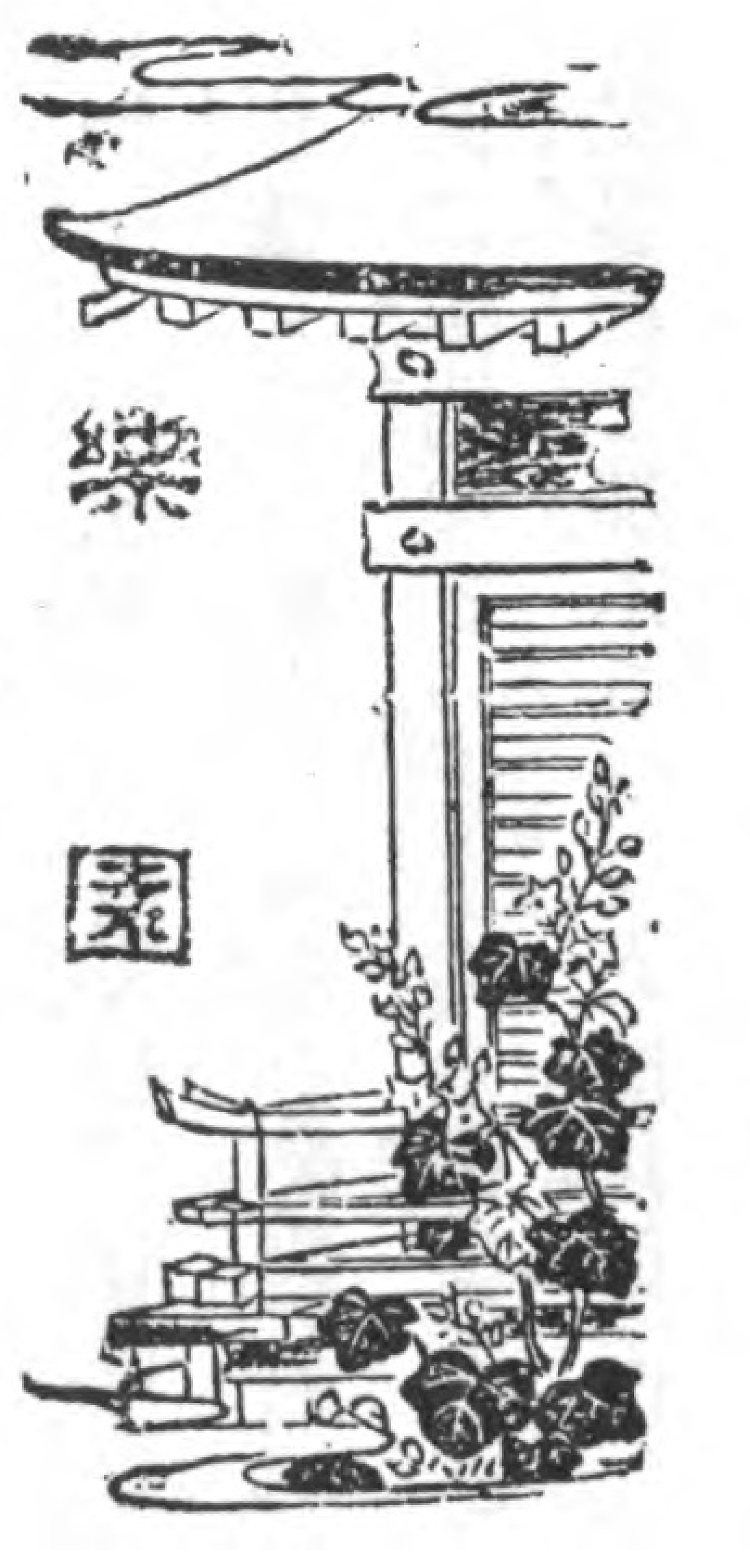
（二）翁の理想

『基督の敎の意味』に於て、彼は最も大膽なる理想を發表せり、露國に於ける正統派が、或る點に於て殆んど政治的意味を帶び、强力なる壓制の下に、不合理なる偏頗なる敎條を强ふるの時、トルストイは、宛も人道の戰士として宣戰の皷角を吹くが如くにして出現し來れり、彼自らの言に由れば、彼は基督の信者として、最も熱心なる最も柔順なる一人なり、然れども若し基督の敎にして、ザール派の曖昧なる信仰を把持し、現今の如く腐敗せる敎條を主張するものとせば、彼は最も痛切な

る最も、明白なる排基督教者の一人たらざるべからず、彼は宛も清朗なる曉鐘の如き響をもつて曰く、基督の教は絶對的理想を明示し、他教の如く關係的理想を示す事なし、忠なれ孝なれとは敎へず、然も動物性を脱却して人性を發揮し、神の平和郷を、世界の上に建つべしと敎ふ、基督は荒野に絶食すること四旬餘日あらゆる動物性的誘惑を受け、沈思默念、遂に一大活路を發見し、此に自ら神的性格を顯象せり、故に彼は、其意味に於て神の子にして、吾人も亦如斯にして神の子たるを得べし、而して之れ、自我の觀念を去りて、博愛の大精神を發揚するが爲めにして、如斯して、始めて天は降りて地上に永劫の光を放ち、神の國は直ちに吾人人類の間に見るを得ん、人生の價値と目的は此間に介在し、吾人の理想とすべきもの、亦即ち是れなりと、之れ實に正統派及びザールに對する宣戰の布告にして、やがて彼の理想の高遠幽邃なる所以なり、故に彼は肉食を排せり、故に彼は遊戯を擯斥せり、故に彼は結婚を控除し去らんとせり、而して其精進する所は、考察と禁慾と博愛と、及び積極的自由平等なりき、而して其裡面には、淨天界、地獄界等の應報的觀念を一擲して、人は只だ神に近づき神の國を建設し得るが故に價値ありと主張したりき、是れ實に、高潔なる主張にして、又尤も大膽なる斷案なり、然れども同時に、此主張の前面は、最も高尚なる、最も莊嚴なる理想を以て蔽はれたりと云はざるべからず、彼が詩人的頭腦を以て、人生最至上の瞑想默念に沒入し、直覺して如斯最美の想像を捉へ來り、一面を神化し、一面を人化し、此に渾然たる一大玉樓を描きて、更に之れに哲學的裝飾を加ふる時、人は此前に、其讚美者



として彼を人世の偉人とたゝへざるを得ず、輿論と戰ひ、暴力と爭ひ、偏狹なるかの露國正統派に反抗し、更に猛烈なる人生の最大誘惑と格闘し、然も從容迫らず、邁進直ちに其確信を斷行せんとす、是常に彼は改革の偉人ルーテルの意志の固きに比すべく、其直覺推理の明白なる、之れかの哲人フヒテと伍するを得べし、而も其理想の高尚なる、其禁慾の嚴肅なる、吾人は彼に列すべき、殆んど其匹を見出す能はざるものあり、請ふ其禁慾的進化の理想の前に、如何に彼は人生の至大問題――結婚――を觀せしかを見ん。　（未完）



花賣娘

（中）

八木原骸華

『これ馬丁、待てッたら待たねェのか。』
『何だ、呼んだのは乃公の事けェ。』
『さうけよ。』
と、嘲りの笑みを口端に浮べて、御者の顔と枯草の上の二人とを七分三分に見較べて居た、件の男は、職工らしい、彼は故らに沈着拂つて。
『一寸聞いて見るがの、車の上の二人の兒は、全

體誰の兒なんだ、よもや貴樣の子供じやアあるめエ、この乃公樣の鼻にア、どうも其麼臭ひが聽えるぞ、隱すと爲にあらねエぞ、ヤイ馬丁。』
星を指された御者は、ギックリ胸に釘、殆ど蒼くなつたのである、が、態と沈着た風を示して。
『ハヽヽヽヽヽヽ、何を言はつしやるかと思へば、串戲は措いて吳んさつせエ、自分の兒でもありもしねエものを、何で車に乘せて來べエか。』
と、御者は竊と敵手の顏を覗いたのである。
覗かれて、男はせゝら笑つたのである、續いて二つ三つ、忌しさうに舌打をして。
『此、此、此此ん畜生、隱せ、隱せ、何時までも隱して居ろ、出る所へ出て、その餓兒の正體を顯はして遣るからさう思へ、後で吠面アかくなよ。』
『待、待、待待待つてお吳んなせエ。』
御者は兩手を擧げて、止めて、遽てゝ、上を向いて下を向いて、百度廻りを二三遍して。
『乃公の兒だと、何も判然云つた譯ではありましねエ、乃、乃乃公が探して拾つて來たゞて、乃公の兒だと云つたのだが、まア勘辨して吳れさつせエ、この通り謝罪から何卒のう。』
青菜に鹽と、御者は萎れ返つた、男はさもこそと云はぬばかりの顏色で、急に高札を指して、
『じやア何か、お前はこの高札の文句が讀めねエんだな、讀めざア讀んで聞かして遣る、性根を据ゑて、確乎聞きねエ。』
『乃公はア無筆で、何卒一つ賴みますべエ。』
『おつとよし來た承知之助、いゝか讀むぞ、エー一つ、何者たりとも貴族の子弟を隱し養ふ者あらば相當の處分を受くべく、又其貴族の子弟を探し出したるものは、住所姓名を申出づべし、

『如何だ馬丁公、解つたか。』

御者は仰向反るまでに仰天して、二兒を急に抱き下し、物をも云はず、道端に捨て丶、急いで逃げて行つて了つた。

メレとカードとは、聲を限りに。

『叔父さアん、叔父さアん。』

と呼んだ、けれどもふり向きもせぬ。

二兒は杖とも柱とも賴んだ御者に捨てられて、又どの樣な憂き目を見やうかと、稚心にも前途を氣遣ひ、メレは涙を湛えた、同じ心の弟は姉の傍に犇と寄り添ひ、ワッと斗りに泣き出したのである、メレは最早慰め樣もなかつたのである。

メレの心、子供の小さい胸には、誰ぞ來て助けては呉れまいか、賴む所は只これ一つ、若しやと涙の目をあてもなく、四方に配つて居たのである、と、遙の向ひに、メレと同じ年頃の小供が、大勢集つて泣いて居る中に、年經つた婦人が、二三人して、この兒達の着て居る衣類を調べて、一人づつ抱へて行くのを見た、メレはこれを殺されるものと悟つて、怖さ恐しさの餘り、思はず其處に跪いて、紅葉のやうな掌を合せて。

『天に在ます聖母メレ、何卒私と弟のカードを助けて下さい。』

と、幾度か繰返したのである。

この可憐なる祈の天に通じたか、否、慥に通じて、手籠を提げた婦人となつて、メレの前に顯れたのである、メレの目は早くもこの婦人に注がれた。

『お丶、叔母樣、川へ捨てられて、殺される私と弟のカードを助けて下さい。』

メレは頻りに賴んだのである、婦人は無言で二兒の樣子を仔細に見て居たが、やがて。

『助けて上げませう、助けて上げますがね、二兒

共では困ります、どちらか一人にして下さい。』
メレはためらはず。
『それでは叔母さん、弟のカードを助けて遣つて下さい。』
はや、弟を渡さうとした、が、カードは首を振つて、涙ぐんで。
『いやだ、いやだ、姉さんと一所でなくッちやア。』
メレは遽て、。
『カードや、お前だゞを云つてはいけません、エカードや、おとなしくして、この叔母さんに助けて頂かないと、川へ捨られて死ぬのですよ。』
『姉ちやんと一所なら、死んでも好い、いやだ、いやだ、一人叔母さんと行くのは。』
弟も涙、姉も涙の、二人の愛情に、婦人は貰ひ泣きをしたのである、
『詮方がない、二兒とも助けましせう、が、御前達を連れて行くには、一寸家へ歸つて來なければならないから、おとなしくして、何處へも行かずに待つて居るのですよ、好いかエ、屹度來ますから心配してはいけませんよ。』
懇に訓戒を殘した婦人は、思ひ出して籠から二顆の果物を取つて、二兒に與へて立ち去つた。
三十分、四十分、一時間、メレは待つた、が、婦人は未來ない、メレは待ち草臥れたのである。
『カードや、姉ちやんわね、眠くッて眠くッてよ。』
『眠けりやア、寢んねおしな、姉ちやん。』
『寢んねしても好ければ、寢んねします、カードや、姉ちやんが寢んねして居る中に、誰か來ても、一人で行つてはいけませんよ。』
『行きやちないよ』
『好い兒です、カードや、お前は自分の名前を知つておいでかエ。』

カードは首を振るのである。
『そりやいけません、教へて上げますから、よく記臆て御在なさい、お前の名前は、カードドナルトと云ふんですよ、好いかエ、』
カードドナルト、幾度か弟は繰返した、その繰り返されて居る中に、いつかメレは草を枕に暫時の天國へ旅行を初めたのである。
約束を待たれて居る、最前の婦人は、息せき切つて馳せつけて來た、四方キヨロ〳〵不審の眉。
『はてな、姉はよく眠つて居るが、弟は何處へ行つたのであらう。』
と四方を尋ね廻つたが、遂に其姿を見出すことが出來なかつた、で、婦人は暫時考へて居たが、やがて、姉のメレを徐に抱き上げて、家路にとこ〳〵ろざしたのである。

五日の旅

千葉高等女學校教諭　田中正尾子

それの年八月十五日、急に思ひ立ちて、母上と共に午後四時發の汽車にて輕井澤にむかふ。調度どもとりそろふる暇なければ、たゞかの地なる物よりいひおこしつる品々のみカバン一つに充てたりいとわはたゞしき出立なりけり。
本所より直に上野にむかひ、八時過ぐる頃大宮に着く。辛うじて車夫を見いでゝ旅宿はととへば、あやしげに見上げてやどはあれに、されど上等とのたまはゞ公園ならではとこたふ。見やる宿ごとに、みないづれも〳〵旅商人などのやどるべきさまして、内もさこそと思ひやらるれば、さらば公園にといふに、進まぬがちにひき出だせり。幸に雨はやみにたれど、小暗き道を只二臺のみ行く。その淋

しさいはむ方なし。公園に入れば、暗さもまた一入なり。ゆき〳〵て、やどりにつきしは九時過なりけむ。室に入りて先聞えしは絃歌の聲にて、出入りする女さへ何となうあまめきたり。室の中を見やれば、拙なきかきつばたの上に、ぬれて來たとしるせるれんをかけ、床はあれども押入はなく、隣室は襖にて界せられて、旅宿めきたる風情なし。あやしきところには導かれぬるとは思へど、一夜が程はともかくにもあかされぬべしと、吹き入る涼風に袂拂はせつゝある程に、女入り來りてお浴衣めせ、湯殿にしるべせんといふ。衣かふる間も手ぬるしとやうに、衣紋竹もちてまちかまふ。とけばたゝみ、ぬげばかけ、いそぎ案内して御二人さま御はいりと叫べば、應と答へて三助は出來りぬ。介抱至らざるところなし。蚊をおふとて、大團扇もてあふぐ。いそぎ出づれば、御上りと聲かく。さきの女いで來りて代りてあふぐ。風もや冒かんと取るものもとりあへず室にかへる。夕げの膳にむかへば、女又あふぐ。隣室には絃歌の聲やみて、いまはしき戀の論ひ盛なり。やがて、あやしき女どもにおくられつゝ客去りたれば、隣室のふしどに入りぬ。宿れる客とてはわれら二人の外には更になく、ひろき家居いと靜かなり。夜のものすべて淸らなれど、あつさはげしくて、輾々しつゝ夜はあけたり。

十六日　くもれり。朝飯の前に、そゞろ歩きするに、庭の内ひろく、松樹立ちならびたる間に、萩のやさしく露をやどせる風情得もいはれず。春の花、秋のもみぢ、いづれまさり劣りはあらねども、萩ばかりあはれなるはあらざるめり。雨になやめるもよし、風にもまるゝもまたをかし。あれたる庭に生へるも、塵はき淸めたるまがきにある

も、松の根かたなどにちから咲けるも、築地のもとにみだるゝも、とり〴〵あしかるべきやは。おのれ、一年西の京にありけるが、萩の盛りの頃より、ふと結膜炎にかゝりて、日毎々々くすしの許に通ひける時、友のもとより露ふかみしほれし萩の云々といひおこされたりつる事ども思ひ出でゝ、かの友やことしの萩をいかに見つるなどおもひやりながら、萩をむかへ萩におくられて、外面の方にいで、なほ行き〳〵て氷川神社の前にいでたり。雨のあしたの道なめらかにして、動もすれば倒れんとす。やう〳〵詣ではてゝ宿にかへれば七時四十分なり。むかへの車は既に俟てり。朝げたうべて停車場にむかふ。よべの車は、夜中なれども十錢づゝといひしに、けさのは十二錢づゝなり。宿料は一人一圓五十錢づゝなり。茶料いさゝかおけば、主婦はあわてゝ手拭つゝみ、虫ばみたる團扇出すも人の情あらむかし。停車場に入れば、赤帽出で來りて、御荷物はこれだけにや。昨夜はいづこに宿りたまひしぞなどいふ。よろづひなびたり。八時廿五分發車す。徒然のあまり車内を見まはせば、かなたの隅には四十あまりの婦人と、その娘らしき十七八の洋服着たると、下女らしき十九ばかりのに、何といふべきにや、五十ばかりの男子と四人一團になりて、かたみに囀りかはし、我は顔にふるまへるも、片腹いたし。御太皷らしき男、やがてあげ尾につきなん、その時御孃様は手をだしたまへといふ。娘覺らず故をとへば、何かくるゝならんといふ。婦人きゝて似たる話あり。これの四つばかりの頃、東海道の汽車にのり、程が谷にて、驛夫のほどがやといふをきゝて、おとばやとまねびたりといふ。芝居者の噂のみに、日をくらす家庭に生ひ立つ小兒は、かゝるものにや

と興多くおぼえたり。本庄にて三人づれの乘り込めるのみにて、諸所に空席をのこせるまゝ高崎につきぬ。おほかたは伊香保行なり。われらは、こゝより信越線にのりかへて横川につく。こゝまではたゞ二人なりき。こゝにて、新潟に行くといふ男子一人のる。小雨ふりて涼しきに、車内もゆるやかにて羽織はしきやうなり。やがて發車すれば、程もなく第一トンネルに入りぬ。いでしと思ふ間もなく、第二、第三と順次めぐり來て、はてもなし。はじめの程は、時計を開きて時をはかりしも、五六號よりはそれさへわきて目を瞑りてかた隅にうづくまる。新潟行の人の、やう〳〵御役がすみましたといふに、眼を開けば、はや輕井澤に着きたり。下車するや否や、荷物と同乘して、午後一時、舊輕井澤萬松軒に到る。主人をはじめ、婢僕どものもてなし、いとねむごろにて、

いつはらず、飾らず。恰も敵に捕へられし身の、ふたゝび味方の軍に投せしごとき心地す。千葉には久しく住みなれたれど、なほ旅寢の夢おだやかならず、こゝは始めてものせし土地ながら、眺めうるはしくて故郷へかへりし思あり。市中を逍遙するに、家並少なくして賑へる土地といふにはあらねど、飲食物を商ふ店より、日用の雜品まで、何一つとゝのはぬものなく、誠に山中の一樂土と云ふべし。外國人の運動場に行けば、男をんなのけじめなく、老いも若きも打ち交りて、テニスに余念なし。まれ〳〵に、日本人の散歩するを見るのみなれば、身は外國にあるの趣あるなど、せまき土地なれども、よろづおもしろきことのみ多かりけり。近くは愛宕山に登るべく、熊野神社にも詣づべし。上州街道をたどり行けば、道のべに生へる草木は、いづれもわれ等をむかふるに似

たり。蜩は帽子もて、我はかさもて、蝶おひまわせしわどけなさよ。世の塵に遠ざかりて、氣も心めすみたるうれしさ、たとふるにものなし。ことに山中の冷氣は豫想の外にて、東京の秋の如し。身にしみ渡るすゞしさ、えもいはれず。あはれ浮世をすてゝ、こゝに、草庵の主ともなりなましかば、いかに心長閑からましなどおもひつゝ、夜に入りぬ。

十七日　いとよく晴れたり。母上伴ひまゐらせて、山路ふかくわけ入りぬ。清き谷川の流れをむすびつゝうぐひすの音をきくたのしさは、げに都に知らぬ樂とこそ覺えしか。

十八日　朝まだきより降りて小やみなく、つれ〴〵なればとて、午後三時卅分發にて、長野に向ひ、藤屋といふに着く。同じ國ながら旅宿のありさま、輕井澤と異りて、稍鄙びたり。夏のみある夜見世なりとて、市中にぎはしく、のゝしり合ふ。おほよそのありさま、野州の宇都宮に似たり。山間の一都會たるを失はざるは、善光寺あるが爲ならむかし。されど、人氣のわらきも、またその故にや。

十九日　くもりたれど降らず、朝とく善光寺に詣でゝ、九時卅分の滊車にて歸途につく。親しき友間はむとおもひしが、一人は東京に、一人は近在にゆきてわらず、はいなければ、他をも訪はざりき。

午後三時頃高崎に着きぬ。友を訪ひて、後、宿につく。長野より又惡し。出入りにぬかづく樣は、さながら角平獅師の如く、見る目あやうく、はらだゝしき迄なり。雨戸くるとて、下女のざれ歌うたふなど、耳觸ひつべき事のみにて、おせじはなか〳〵に巧なり。宿料は長野におなじく、一人一

困なれども、夜具のきたなきは此程中の最たり。居でゝちわしければ、あすは一番にてたゝんと命じおく。

二十日　四時起床、例の事どもしをへて、勝手もとをうかゞへば、人の氣合もなし。かくては、いかで一番の間にあはむ。その爲んずるやうを見んと、打ちすておけば、五時うちて、やう／＼起きいでしやうなり。あわてゝ下女わび言に來る。今更おどろくべきにはあらねど、なりはひに似合はぬおろかしさよ。昨夜は、御客少くて、心ゆるせしため、ねすごせしといふ。げにわが廊下には、外に夫婦づれの一組ありしのみなりし。先のあやまち償はんとや、御荷物はいかゞ、切符はいかゞと、もてなしのねんごろなるもをかし。朝飯の箸おくとそのまゝいでゆく。下男荷物もちて停車場まで從ひ、入場券求めて、車内まで見おくる。すべてのあつかひ、客めづらしき風情にて、はてはあはれを催したりき。病める老爺と、仕事師らしきが、赤切符もちてまぎれ乘りたると、温泉がへりとおぼしき書生と、目の湯のかへりなりといふ紳士と、胸わろき假富限の一隊と共に、一車にぎはしく上野につきぬ。青き山のたゞずまひに接し、清きながれに掬びしわが身も、いでや、又俗界の人たらんかな。

（完）

駒鳥物語

しのゝめ

頃は、春の初め、未だ一葉の新芽さへも吹き出さない大きな樹の枝に、何所からともなく一羽の駒鳥が飛んで來た。すると其の樹の下には丁度一人の年取た百姓がせっせっせと畠を耕して居る、樹の上で

は駒鳥が頻りと下を見張て、百姓が土を堀返して地蟲が飛びだすと直ぐ下へ降りては『チッチッ』と嬉しそーに鳴き乍ら、ほそい奇麗な嘴で蟲を拾つてゐる、と今度は百姓も蟲を見付けたと見えて。

『ホー澤山居るわ』獨語のやう言つて、家の鷄にでもやらうと思つたのだらう。急いで鍬をなげ出して、小さい木の切で恐々挿んでは入れ挿んでは入れ、いつの間にか半欠の植木鉢に一抔になつた。百姓は又他の鉢を持つて來て、それへも入れやうと、ふと見ると自分の鼻の先に小さな駒鳥が一疋頻りと蟲を拾つてゐる。百姓爺さん眞赤になつて怒鳴りだした。

『此奴太い奴だ、俺が折角掘りだした蟲を散々食ひちらしやがつて、やい、此の蟲をだれのだと思ふんだ。是はな俺の家の鷄が喰べるんだぞ、いいか、惡い惡戯をするな、お前なんざア毎日朝から晩まで鳴いてれば夫で好いんだ、何の能も無いくせに食ふ事ばかり拔目がないや、俺の家の鷄なんぞは、是を食はせれば必と夫丈の卵を産んで、俺に大した儲けをさせるんだぞ、小さいくせに、生意氣な!』

突然鍬を振上げたから駒鳥も驚いて又元の樹の上へひよいと飛んで了ふ。百姓は暫く拍子拔がして茫乎と其を見つめてゐると、不思議!不思議!今まで駒鳥だと思つた小さな鳥は急に大きな鷄の樣なものに成て了つた。はてな、と爺さん好ーく考へ直して又見ると、でも不思議!、自分の前にはいつのまにか一人の小さな人が立つてゐる。黑い天鵞絨の帽子を冠つて見た事も無い樣な奇麗な灰色の洋服を着、鼻の高い、眼の光つた、顎髭は、ぱらりと扇のやうに胸に廣がつて、丁度駒鳥の

やうな人、
『馬鹿め、お前の鶏は大變高い卵を産んだな、さうか、でお前はその鶏の番人なんだな、ハハ、、、、、、、この慾張りめが、可哀そーにお前の眼は不具だ、その證據には其の眼で何が見える、金の外に何か夫でも見えるものがあるのか、お前は鶏の卵で大變儲けると言ふが何所の馬鹿がそんなものを買ふもんか、今日歸つてよーく見ろ、お前の家の卵は皆んな石だ、ハハ、、、、、、、、好加減な嘘ばかり言つて、………………そう〳〵お前の孫子の名弘めは明日の晩だつたな、ぢや今日は免してやろ？、その代り明日は必と俺が行つて今日の復讐をしてやるからな、覺えて居ろ。』
『宜いとも勝手にせい。』
言ふが早いか突然鍬を振り上げて打ち殺さうとして、はッと氣が付て見ると、自分の頭の上に枝から枝へと飛び廻つてゐる一羽の駒鳥が『チッチッ』と笑ふよーに囀つてゐるばかり、何にも居ない。
何だ？夢か知らん、と爺さんは頻りに四方を見まわし乍ら、不思議そーな顔付をして、つまらねえ、何だ？、口ぐせの。樣に斯ふ言ひ續け乍ら、鍬を荷いで、左の手には地蟲の一ぱい入つた鉢をぶらさげて茫んやり、自分の家の方へ歸つて行く、、、、羽ばたきしてゐる鶏の中へ地蟲の鉢をぶちまけて自分は其儘座敷の方へ上つて行つた。そこには火鉢の前に悄然と可愛い〳〵娘が、膝の上には小さい赤ん坊を乘せて、此は透き通る樣な白い乳房を舐らせ乍ら何か裁物をしてゐる。爺さんは最早駒鳥の事も何もかも皆んな忘れて了て、夕飯が済むと直ぐ、寢床の上にころがつて了つた。
明る日になると爺さんは全然駒鳥の話しも、彼の夢のやうな妙な矮人の事も忘れて了つた。所が今

日は愈々孫子の名弘めの日なので、豫て招いて有つた人々はそろ／＼やつて來る、其う此うする中に日も暮れたので、來た人は皆んな一所に食堂の所に集つて、今度は酒宴と云ふことになつた、そこで爺さんも嫌々乍ら酒の肴に卵燒でも拵へたらと密と娘に言ひ付けた。

娘は直に臺所へ行つて棚の上から昨日産んだの、今日産んだの、合せて六箇ばかり、手に取つて見ると何うやら毎日の卵とは重みが違ふ樣に思はれる、と云つて別に深く怪しみもせず、其儘傍に置いて燒鍋などの用意をして居る、すると不思議！自分より外に誰も居ない其臺所に何か歌の樣な聲がする、今度は卵を割ると手に執ると重い／＼大變に重い、のみならず、打つても叩いても割れるどころか傷さへも付かぬ、そこで娘も段々變に思つてよく見ると、不思議！不思議！、卵だと思つたのは大きな石の固りであつた。

何か臺所の方で物音がするので爺さん來て見るとこの仕末、はッと昨日の夢のやうな話しを思ひ出して、顔色は急に眞青に成て了つた。が態と平氣な風をして、昨日の事は一ッも娘には話さず　その場の所は何とか甘く誤魔化して了つた。

そこで急いで娘を使に出して、今度は極く安い羊の肉を買つて先づ當座の間に合せ、小兒達には一つ宛菓子などを配つて、そこ／＼に自分の椅子へ返ると間もなく、づか／＼と戸を開いて入つて來た者がある。

『今晩は？』

誰だか解らない、いやに小さな奴で、黒い帽子を冠り、灰色の洋服を着、赤い顋鬚は見事に胸に廣がつて扇の樣な人だ、爺さんは一目見るより眞蒼になつて、ぶる／＼慄へ出した。

『皆さん、今晩は、』と言つたかと思ふとその人は突然皆んなが酒を飲んでる其の卓子の上へ飛び上つて、唯にや〳〵笑つてばかり居る、すると直ぐそこらに在た御馳走を手當り次第に食つたり、飲んだりして、充分に腹をふくらして又じろ〳〵爺さんを見つめ乍ら、赤い口鬚を右手に撫でまわし、今度は眼を白魚の様に細くして、何だか歌ひ出した。其の歌の上手なこと、その聲の美しい事、何所を押したら彼の小さな身體から、あんな良い聲が出るだらうと思ふ位、皆んなが思ひ〳〵に頼む歌を一々造作もなく唄つて聞かせる。

かうやつて左様二時間ばかりも歌ひ續けたかと思ふ頃、急に何か思ひ付いたと云ふ風に、懷中から大きな時計を出して。

『あーもう歸らなくちやならない………そーそー子兒は何れだね、今日名を付けたその兒さ、何と附けたね。』

『はい………あの………太郎………。』

と、さも極り惡るさーに、何だか恐わそーに、娘は自分の兒の顏を其の方へ向けて低聲に答へた。

『あー良い兒だ、可愛らしい名だ、併しそれよりもそつと良い名を私が上げよー、辨太郎と言ひなさい、辨太郎と、な、…………それから最一つやるものがある、と、言つて別に物をやる譯ぢや無いが、今日からその兒の手に觸つたものは何でもいらない物は入用の物となり、入用のものは金となり、きたない物も奇麗なものになる様にしてやらう』

と、大きな聲で言ひ乍ら、又爺さんの方をふり向いて、

『爺さん、何もそんなに青くなつて驚くにも及ぶまいぢや無いか、俺は昨日言つた通り、お前がわの小さな駒鳥に澤山蟲を喰さして呉れたその御禮

に來たんだ。………………お前の孫は今日から重寶な手になつてお前の慾張りな心をいつ迄も悦ばせるんだ、何うだ、悅しからう、アハヽヽヽヽ。』

又小兒の方に向き直つて。

『辨太郎、貴樣の手はそんな手になるんだが、然し一ッ、若しも貴樣が金を煙の樣に消して了ふ人に出つ會したらそれつ切りだ、貴樣の手はもう何でも無い普通の手に返つちまうんだぞ、好いか、忘れない樣にな、…………何！、理由か、譯と言つて別に無いが、つまり、お前の手は金を作へる手、又、その人の手は金を消して了ふ手、消すのと作へるのとが一所になるから、何でもなくあるまでの事さ。』

爺さんは未だおど〳〵聲で。

『へーぢや何ですかい、此の世の中にも金を煙にしちまう樣な可哀そーな奴が居て、そして家の辨太郎と出つ喰した時、辨太郎の手をつまらねえ手に仕ちまうんですね。』

『まあ、そんなものさ、…………やつ晩くなつて皆さん失敬しました、お先へ御免蒙りますよ。』

言つたかと思ふと又何時の間にかふッと消えて了ふ。集つた皆んなは此の不思議な侏人の事を笑ひ種にしてアハ〳〵笑ひ乍ら又酒の飲み直しを初めた。爺さんも存外復讎が輕かつたので初めの中は一所に大きな聲で笑つて居たが、そも〳〵此の爺さんと言つたら、夫こそ一通や二通の慾張りぢや無いので、先づ物はためしと、新らしいパンの一片と、それから犬にやろーとした腐つた肉を持つて來て、之を辨太郎につかませると、不思議！不思議！新しかつたパンはそく〳〵する程の金貨となり、腐つた肉は直に立派な鷄の肉となつた。サア爺さん大變なさわぎだ。其所いら中を飛

び廻つての大悦び、も一つためしと二本の空瓶を持たせると前に赤い葡萄酒か一杯になつた、斯うなると集つた者も、爺さんも、みな一所になつて、いよ〳〵興に入つた、

（未完）

文林



湖上雲　　東久世通禧

けふもまた雨にやならむ玉くしけ
箱根のうみにくもうかふなり

浦鶴鳴月　　佐々木高行

玉のうらゆふしほさして月かけも
みちたるそらにたつ鳴わたる

暮ゆく空に月いてだり　　高崎正風

暮はてゝいろなくなりしゝら雲の
ひかり見えそめて月は出にけり　　津輕承昭

茸狩　　宮地嚴夫

そめ出すもみち葉見つゝくやしくも
岡いくさひらとり殘しけり

夜殘暑

すむ月のひかりは秋にありしかと
暑さはなつにかはらさりけり

秋山路　　北郷久政

酒のゑひはやゝさめたれと紅葉に
なほおもほてる山のしたみち

暁紅葉　　鎌田正夫

あかつきの霜の色のみさやかにて
もみちはくらし山かけのには

暁虫　　植松有經

静かなるあかつきかたの虫のねは

たゝ手まくらに鳴こゝちして

旅宿虫　遠山英一

旅やかたねられぬまゝにむしの聲
きくとはなしに聞あかしけり

鴈來　岩崎勝従

朝ほらけはきちる園におりたちて
きくそめつらしはつかりの聲

曉露　鍋島榮子

入かたの月かけすみておくつゆの
ひかりもすこしあかつきの空

孟母　蜂須賀隨子

切たちしはたの糸よりひきいてゝ
たゆまぬ筋ををしへたりけむ

雨中虫　西四辻茂子

きゝなれし柴の垣ねのきり〳〵す
今宵のあめにこゑよわりけり

千代野尼　小池道子

くみあけし手桶の水はこほれても
心のつきやすみまさりけむ

衛生會　北島以登子

明らけきみよのひかりに人の身を
やしなふ道もひらけゆくかな

駒迎　大谷章子

久かたのくもゐにのほるもち月の
こまも今宵やまちわたりけむ

菊初開　佐藤艶子

日にそへて寒くなりゆくあさかせに
かをりそめたり庭のしらきく

萩ちらむとす　坂田泰子

契りにし人もこぬまにはきかはな
こよひの風にちらむとすらむ

藤原百川公　小川直子

もゝ川のはやせの波のそゝかすは
濁りたる世をたれかすまさむ

ねさめに虫をきく　河村重子

ねさめして聞はかなしも秋ふかき
草のいほりにおくきり〳〵す

富士見瀧にものして詠める歌並に短歌

下田滌興

おちたきつ　ふし見のたきは
ふしのねの　ふもとにつゝき
其のやまを　名におふたれと
さとひとの　かたるをきゝて
いはかねを　ふみとゝろかし
しもとはら　いふみわたして
はろ〳〵に　わかみにくれは
あやにくに　そらかきくもり

ふしのねの　すかたはかくれ
おちたきつ　たきのおとのみ
高くもあるかな

反歌

ふしのねは　くもにかくれて
名におへる　たきのおとのみ
たかくもあるかな

母の夢　清水清子

父をしもひとり殘して
木々の葉に散りはてにけり
母をしも獨りのこして
陽炎や消えていにける
面影の春の姿は
つきぬわが涙に浮べ

悲しさの夜半見し夢
　哀れ子は今かけもなし
野の雲の風にいゆふ
　天高くのぼる夕くれ
たつねつゝ吾はいつしか
　天高くのほり來にけり
燈火を手にとりのばし
　歌ひくる小兒のむれ
白き衣かゝやく姿
　聲もなくたゞ靜かなり
ああかなし獨わが兒の
　燈火は消えにけるかな
迷へとや暗にのこして
　この母のところ定めず

搜りゆく空の闇路の
　かなたより聲のしてけり
あゝ母よわが子の燈火
　汝が涙にぞ消されたり」（バンス意譯）



九月廿日兼題

夕鹿

天　和歌山市元寺町一丁目　長尾小榮子

かすか山ゆふこえくれはわかくさの
　つまこもれりとをしかなくなり

評、調つゞきよくとゝのひていとめでたし。

地　讃岐琴平町　横山芳子

おく露にぬれてもなくかこのゆふへ

つまとふしかのこゑのしめれる

評、いひしらずあはれ深し。

人

大隅國肝屬郡鹿屋村　宇都常子

やまのはの夕日うすれてあきはぎの
はなさく野邊にをしかなくなり

評、めづらしからねどすてがたき姿なり。

甲之部

大隅　稻垣まさ子

夕ぎりのはれぬおもひをさをしかのしの
忍びかねてやねにはなくらむ

肥後　佐々木琴子

夕まくれつゆのふしとのひとりねを
なくさめかねてしかのなくらん

東京　片山ふみ子

小はぎはら夕居るつゆをふくかせに
つまとふしかのこゑそみたるゝ

筑後　鍋山増代子

さらぬたに秋のゆふへのかなしきに
つまゝきかねてさをしかのなく

筑後　武田縫子

夕つきをうすぎりこめてやまさとの
あはれもふかきさをしかのこゑ

大阪　伊勢村春子

ふる里をしのふのやまのゆふまくれ
かりねさびしくをしかなくなり

茨城　荒野たえ子

みやま邊は夕ぎりふかくたちこめて
しかのなくねもとほくきこゆる

東京　近澤和子

ふきわたる野かせ身にしむ夕まくれ
つまとふしかのこゑそかなしき

東京　椎野清子

松かせのさそふもさひしゆふまくれ
つまこひておくさをしかのこゑ
東京 牧 兼子

夕つく日むかひのをかにかくろひて
こゑはのかにも小しかなくなり
肥後 德永雪枝子

ゆふけたくけふりも霧にうつもれて
いり日さひしくしかそなくなる
三河 服部蔦子

さらぬたにさひしき秋のゆふくれに
をしかなくなりみやまへのさと
東京 黒澤松枝子

ゆふ風のさそふもさひしもみちちる
小くらのやまのさをしかこゑ

乙之部

ゆふ月のいるさのやまをみわたせは
あはれさひしくしかそなくなる
三河 服部正子

ゆふ月のかけさしのほるみかさやま
かすかのゝへにしかそなくなる
三河 三宅中枝子

あき山をゆふこえくれはしかの音を
さそひておろすみねのまつかせ
三河 河合ぬひ子

さをしかの妻とふこゑをきくからに
わひしさまさるあきのゆふくれ
肥後 坂本菊子

ゆふつきのかけもをくらきやま里に
つまとふしかのこゑのあはれさ
肥後 坂本美智子

つまこふるしかの音遠くきこゆなり
ゆふへさひしきあきのやまさと
上總 高石登代子

まつ風のおともしつけきゆふまくれ
やまゝたやまにしかそなくなる
京都 坪内りき子

かなしきは秋のゆふへのならひとや
しかもなくれなしのはさるらん
長崎 石川幸子

軒ちかくしかの音すなりもみちゝる
かたやまさとのあきのゆふくれ
東京 小木光子

まさきちる秋のみやまのゆふくれに
あはれをそへてをしかなくなり
東京 椎野鋭子

ゆふまくれ萩にみたるゝしらつゆは
つまとふしかのなみたなるらん
東京 椎野ぬき子

山のはをとさしてふかきゆふきりの
おくにきこゆるさをしかのこゑ
大隅 前田花子

たけかりの人はかへりてゆふつきの
かけさす野邊にをしかなくなり
大隅 上赤文子

秋されはたもとつゆけきゆふくれに
あはれをしかのこゑそきこゆる
仙臺 清水若菜子

つまこふる鹿のねきけはことさらに
あきのゆふへはかなしかりけり
山口 田村多豆子

夕されはうきしあはれもかきつめて
あきの嵯峨野にをしかなくなり　東京　山本梓子

ことさらにあはれそしるきさを鹿の
つまゝつやまのあきのゆふくれ　埼玉　前野蕗賀子

見渡せはゆふきりふかしさをしかの
なくねさひしきのへのはきはら　東京　三好珍子

ゆふまくれきけはかなしも妻こひて
わかくさやまにしかそなくなる　松山　水木とし子

さらぬたにさひしき秋のゆふまくれ
つまやこふらむさをしかのなく　栃木　青木たま子

うきゝりのたてるゆふへによの秋の
あはれをもらす小男しかのこゑ　長崎　八尾いへ子

やまさとのちりしく紅葉ふみわけて
をしかなくなりあきのゆふくれ　伊豫　黒川重子

夕まくれまはきのつゆにぬれそめて
はなつましたふさをしかのこゑ　大阪　橋本しか子

そまひともさとやこひしきを鹿なく
みやまのおくのあきのゆふくれ　長門　岩田章子

夕まくれもみち散りしくをかのへに
つまとふしかのこゑたかなしき　日向　紀藤いく子

さらぬたに夕へさひしきやまさとに
つまとふしかのこゑきこゆなり　日向　紀藤のぶ子

しかのなくゆふくれことにやま住の
なれたる身にもあきそかなしき　日向　紀藤榮子

あきゝりの立田のやまのゆふくれに
つきまちわひてさをしかのなく　東京　永井さき子

なき夫をこふるゆふへにいとゝしく
あはれをそへてしかのなくなり　東京　高[illegible]榮子

そま木ひく音もたゑてつまこふる
しかのねさひしあきのゆふくれ　大阪　大阪谷信子

夕されはつゆもみたれて小はきはら
つまとふしかのなく音かなしき　伊豫　竹村竹里子

三笠やまゆふくれふかくたちこめて
しかの音さひしかすかのゝはら　埼玉　横田秋子

秋はきのはなさくのへをとことして
ゆふへゆふへにしかそなくなる　東京　戸塚てつ子

ゆふくれはさひしかりけりかたやまに
つまとふしかのこゑもきこえて　肥後　佐藤玄子

山ふかくやへかきつくるゆふきりに
つまとふしかのこゑそこもれる　肥後　吉富栗子

かり人のともしさすなりゆふされは
こゝろゆるすなみねのさをしか　肥後　野口信子

龍田やまもみちてりそふゆふつく日
くれゆくまゝにしかそなくなる　肥後　野口靜子

たひ人のやまちこゑゆくゆふくれは
こゑあはれにもさをしかのなく　相州　中山富美子

を鹿なくこゑもさひしきやまさとの
もみちにうすくゆふ日さすなり　岩代　大川ふく子

そてにちる露身にしみてかなしきは
しかなく野へのあきのゆふくれ　三河　永井さい子

夕つきのてらすすゑ野をゆきかへり
ゆきかへりつゝをしかなくなり　東京　北島功子

夕まくれすそ野のはらにつまとひて
しかのなくねそあはれなりける　肥後　德永多瑞子

ま萩さく野邊のいほりにゆきくれて
まちかくきゝつさをしかのこゑ　大隅　山田いれ子

夕つき夜かけほのくらきをくやまに つまとひわひてをしかなくなり　岐阜　佐藤そう子

紅葉ちるかたやまさとのゆふまくれ なくやをしかの聲そしくろゝ　大阪　桝田登子

はら〱ともみちこほろゝ夕まくれ ものおもはするさをしかのこゑ　茨城　小沼かの子

ゆふまくれ萩ふくかせもさひしきに つまとひわひてをしかなくなり　東京　篠田圓子

なか〱になれてはしかのなく聲を きかぬゆふへそわひしかりける　伊豫　小田操子

さひしさもいとゝ身にしむ夕まくれ つまとふしかのこゑそかなしき　肥後　佐藤直子

人とはぬみやまのおくそなつかしき ゆふへはしかのこゑもきこえて　東京　笹川ふさ子

ゆふされは秋のあはれをみにしめて ものかなしけれしかそなくなる　和歌山　瀬戸榮子

丙之部

夕されはやまのさつをやかへりけむ つまとふしかのこゑしきるなり　但馬　田尻保代子

ゆふ月の光りうすれしきりのうちに ちかくきこゆるさをしかのこゑ　名古屋　瀬木せき子

いりあひの鐘にあはれをそへにけり 嵯峨野のおくのさをしかのこゑ　大隅　宇都涙子

さらぬたにさひしき秋のゆふくれに つまとひわひてをかなくなり　肥後　坂本たけ子

さをしかのこゑかあらぬか山かけの おち葉さひしきあきのゆふくれ　東京　牛山素子

かれの音のひゝきをさまるゆふ山に しかなくなれもゝのやかなしき　長崎　片山哲子

夕かせのつたふろまゝにとめゆけは なほおくふかしさをしかのこゑ　東京　椎野秀子

ゆふまくれなくさをしかの聲きけは あきのあはれもしられけるかな　東京　椎野薫子

たかねには夕日のかけのさしなから ふもとの野邊にをしかなくなり　大隅　大津寂子

このゆふへそこともわかす聞ゆなり かせにたくへろさをしかのこゑ　大隅　宇都貞子

いりあひの鐘のたえまにきこゆなり うしろの野邊のさをしかのこゑ　大隅　大津良子

さらてたにかなしき秋をゆふまくれ きりたつやまにしかのなくなる　仙臺　清水春子

秋の野のつゆのやとりのゆふくれに つまこふしかのこゑしめりつ　埼玉　前野ふさ子

嵐はゝやもみちしぬらしなくしかの こゑもきこえてゆふへさひしも　富山　長谷川初枝子

なく鹿のこゑにまきれてゆふくれの あきもかなしとおもはさりけり　山口　村上操子

なく鹿のこゑきくまてはおほかたの ゆふへなりしをあきのゆふへも　松山　上原のふ子

いり合のかねのひゝきはしつまりて うしろのやまにをしかなくなり　大阪　中舘やう子

さらぬたに物あはれなるゆふまくれ をしかなくなりやまのこみち　松山　水木よし子

秋くさのしほ[illegible]ろ野へのゆふまくれ あはれをつくるしかのこゑかな　遠江　夏目松枝子

鹿のなくみやまのおくにわけいれは ゆふへのかせにもみちゝりしく　日向　紀藤ふじ子

さひしさのひとしほまさる夕まくれ　しかなくこゑのあはれなるかな　大阪　吉山たれ子

ふく風のたにまにひゝくゆふまくれ　こゑもわひしくをしかなくなり　近江　國松みれ子

ゆけと〱あふ人もなきやまなかに　ゆふへさひしきさをしかのこゑ　近江　國松いか子

さひしさは、へたてさりけり夕きりの　たつ田のやまのさをしかのこゑ　大阪　伊勢村花子

ゆふまくれ千草のつゆにそてぬれて　しかのねさひしみやきのゝはら　大阪　大坂谷新子

もみち葉のにしきの床にふしなから　ゆふへうしとやしかのなくらん　肥後　田代艶子

さをしかの聲もあはれにきこゆなり　ゆふへさひしきあきのやまさと　肥後　田代綾子

きり深き夕へかをかのあなたこなた　つまとふしかのこゑきこゆなり　札幌　山田靜子

いま更にあきのゆふへのさひしさを　かこつはかりに男しかなくなり　札幌　山田婦美子

三か月のかけよりたかくきこゆなり　つく波のみねのさをしかのこゑ　茨城　内田定子

吹おろすゆふきりふかきやまもとの　あらしのすゑにさをしかのなく　埼玉　横田音羽子

我ときとあきのゆふへをなくしかに　あはれはかけよはきのしたつゆ　東京　新海わか子

ゆふつゆをむすひし萩にさをしかの　むつれてふすもやさしかりけり　東京　内田とく子

木のはちる樣もあはれにみるものを　ゆふへさひしくしかそなくなる　伊勢　池田梅子

さひしさはいつくもおなし秋なれと　をしかつまとふ野への ゆふくれ　肥後　千知波橘子

夕きりに立ちともしらぬさをしかは　つゆにぬれつゝひとりなくらん　東京　片山あや子

夕まくれあはれをそへてきりふかき　やまよりなひくさをしかのこゑ　東京　矢野やす子

身にしむか木の葉ちりしく夕くれに　とほくきこゆるさをしかのこゑ　東京　川村松子

つま戀ふる鹿の音とほくきこゆるは　ゆふへさひしきものにそありける　東京　平尾あさ子

のかれすむ秋のゆふへのさひしさを　なくさめかほにさをしかのなく　肥後　坂本登子

阿蘇かねの烟りとゝもにきりこめて　ゆふくれすこくをしかなくなり　肥後　佐々有鄰子

春日やまつまとふしかのなくこゑに　あはれそひゆくあきのゆふくれ　横須賀　上田雪子

枯れはきのかけなつかしくさを鹿の　こゑあはれなりあきのゆふくれ　相洲　岩橋花子

夕されはやまかけくらしなくしかの　こゑのうちにもあきやこもれる　大分　菊波富子

野に山にはきかはなつまとひわひて　ゆふきりかくれしかのなくらむ　肥後　石井登子

たひちなるわかせをしのふ夕くれの　のきはにかよふさをしかのこゑ　青森　柿崎ひで子

いりあひの鐘のひゝきともろともに　あはれをそふるさをしかのこゑ　岐阜　吉村せい子

夕されは尾のへのしかのこゑしけく　あきのあはれそいとゝ身にしむ　肥後　徳永眞澄子

七くさのはな野のすゑにさをしかの
　なくれさびしきゆふくれのころ　肥後　澤田春子

妻こふるしかのおもひのかすかすを
　いかになくらんあきのゆふくれ　肥後　德永弘子

夕されはふしとさためすなくしかの
　こゑこそあきはあはれなりけれ　肥後　德永廣子

露しけき小野のほそみちなくしかの
　こゑあはれなるゆふくれのそら　肥後　德永萬壽子

夕されはひたうつおとそきこゆなる
　ふもとの小田にしかやたつらん　大隅　山田よね子

さらぬたに秋のゆふへはかなしきを
　あはれさそへてしかのなくらむ　東京　林環子

さらぬたに悲しきものをさをしかの
　きりにまとへるゆふくれのこゑ　廣島　衣笠澄子

なにとなくものゝかなしき夕まくれ
　あはれをそふるさをしかのこゑ　神奈川　田邊房子

いりあひのかねの身にしむ夕まくれ
　あはれつまよふさをしかのこゑ　和泉　福原菫子

夕かせになひくをはなのつゆちりて
　つきにすみゆくさをしかのこゑ　和歌山　池田松枝子

まはき原しかもふしとをたつれつゝ
　ゆふへはわきてこゑそつゆけき　肥後　坂本豊子

ゆふくれにつまとふ鹿のこゑきけは
　あはれにもまたかなしかりけり　東京　笹川松江子

弟を誡むる文

天　長崎市新町十三番地　八尾いへ子

世には遠つ祖の遺し給へる寶をたのみて、家のなりはひを怠り、益なき遊びにのみふけりつゝ、空敷月日を過す輩も多かれど、敷島の大和心もてる男の子のいと恥づべき事になん。幼きよりつらきに堪へ、苦みを忍びたる人こそ月の桂も手折り、かぐばしき名も後の世に殘し玉ひつれ。幼なくして、父君を失ひ奉りし己らはらからは、はゝそはの木かげにより生立ちぬる者なれば、父なき子はかくぞなど、世の人にのゝしられ玉はぬ様、朝な夕な心して學の道にいそしみ給ひねかし。杖とも柱ともおもひ頼める御身なれば、我家のたふるゝも倒れざるも、御身の心にてそよれ、されば何事も足はぬが身の常なりとて、こゝろ定めて、やうなき費をはぶき、萬づに堪へ忍ぶといふ事を忘れず、神代ながらの正しき道をふみ違はで心のま玉みがき給ひね。

人は交る友のいろ〳〵により清き心の白糸も、よきに悪しきに染る習に侍れは、必ず友の撰は、ゆるかせになし玉ひそ。今のわかうどは益ある文をふつくゑのかたへに積みつゝも、ともすれば心そこなふ小説にふけり、公にいましめ玉へる烟草、あるは酒をさへ人目の關を忍びては、猶たしなむこそげに、口惜しき限りなれ。さはいへ學の業にのみひたてりに凝りて身の養ひも省みざるははた心なき事どもに侍れば、もはら身のすくよかならんことをつとめ、一日も早く業おりてゆるぎなき家の礎かため、限りなき　大君の御惠にむくいまつり、はゝ刀自のこゝだの年月の御心つかひも安めまいらせ玉はん事を祈りまつる。

浪速のことのよしわしをおばしわき玉ふれと、筆の序にかくなん。ゆめはごとな見過し玉ひそ。

あなかしこ。

評、弟を思ふこゝろ並しの程、あはれにやさしく、情細やかにして筆よく整へり。

地

肥後國菊池郡城北村　佐々有隣子

避暑休業もすみ候へば、故郷にすみたまへる龜若きみよ、姉は北海道の旭川なる第七師團の夫君に仕奉りて、朝夕西海の方のみながめやり侍りぬ。抑も弟のきみは、海國男子の御身にし侍れば、學術を修練して、天皇の御爲め、國家の爲め、海ゆかば水つくかばね、陸ゆかば草むすかばね、ひたひに矢は立つとも、そびらに負はじと、つとめいそしみて、海陸の軍人となり、皇國の政治家ともなり、海外人にうしろゆびさゝれぬやうに、心氣をねりたまへと、姉が老婆の心を、末の松山すゑかけて、女子のくり言とな見すてたまはで、勉勵なしたまへ。あなかしこ。

評、むかしスパルタ母が、其子を戒めしもかくやと思はれて勇氣凜然人を感動せしむ。

人

東京市神田區三崎町二ノ八　中村やゑ子

色づきちりし桐の一葉にも、秋の哀れはしら

れ候を、故鄕遠くはなれ、孤燈の下に御勉學の御身には、一入淋しう御暮しのこと、御察し申上候。こなた御兩親様はじめみな〳〵、無事に過し居り候まゝ、御心安うおぼしめし被下度候さて一昨日の新聞紙の記す所に依れば、御身の御通學の學校しかも御身の級にて、擔任敎師排斥とか。運動なされ候よし。驚き入り候。昔より犬も三日飼はるれば三年恩を知るといふ。諺これあり候を、まして御身達は、萬物の長なる人間にはおはさずや。然かも高等敎育うけつゝおはす、君達にては候はずや。さるを日頃御敎受けし師の君を斥けんなど謀りしは、何事に候や。私この記事讀みし時の、驚きはいかばかりに候ひしか。父君母上も御身この群に入りては居らぬや。と一方ならぬ御心配にて、もしもかゝる道ならぬ事なせしならば、學校などは思ひの外なり。とく〳〵退かしめ。鋤鍬持たさん。高き敎育うけさせ正しからぬ道に蹈み迷はせんより、むしろ學淺くとも、行清きこそましけれなど。とやせん。かくと千々に御心碎かせられ、翌朝は新聞紙の配達をのみ。待ち給ひ。父上は。自老いの御眼に眼鏡かけ給ひ。昨日の記事の、つゞき讀み給ひしに、いとあやしうも、日頃行正しき御身の名ありしとて、父上は怒らせ給ひ、母上ははやも涙にかきくれ給ひぬ。私も何となく、うら悲しう、もしや何かの行き違ひにもやと、心に天の神に助け給へ。と祈りつゝ讀み返へし候に、祈りし甲斐やありけむ。御身の名はたしかに、これあり候へども。暴行せしにはあらで、かへりて双方の間に仲裁を試み給ひしとて、學生の模範よとまでもたゝへ。香しき名紙上かゞやかし給ひしにて、その時の嬉しさ、父上母上も、いかにうれしくやおぼされけん。御心の底より笑ませ給ひし御顔、御身に見せ度き程に候ひき。かくまで、御兩親様

の、御身を案じ給ふとは、ありがたき事には候はずや。されば此の後ともいかに誘ふ水あるとも惡しきと悟りなされ候はゞ、決して、流れのまゝに任し給ふなよ、こたびの如く、惡多く、善少く一度は惡し人の、感情は害すとも、世には正にかつ、邪はこれおく、いさゝかの、恐喝など、加へられ候とも、正道の勇を持ちて、向ひ候はゞ、腕力にては、敗をとり候も、天地の正氣に對して露ほども、恥しき事これなく、暴勇に負けてこそ、眞の勇氣といふべけれ。生れしこのかた御兩親の、御教育の御辛苦は、いかばかりに候ひしか。されど、豊ならぬ御家計の中より、御身の學資に、不足せぬやうにとの、おぼしめしより、父上の日いと好ませ給ひし　書畫も、奢りなればとて、ふつと、投げ見むきもした給はず、或は御身体につけ給ふもの、節し給ふなど、心なき身もありがたさに、涙こぼるゝほどにて、この筑波、相模、の海山よりも、深く高き、御恩を報じ奉らんてふ事を東の間も、御心の中より、離し給はず、すきもあらばと、千萬の惡魔、目を瞋らし、耳をそば立て、待ち居るの世に候へば、一足ふみたがひ候はゞ、底もしれぬ、ならくの谷深く陷るべく、ゆめ〳〵心お許し給ひそ、たゞ一すじに、學びの道を勉め勵み給ひ、一時もはやく御兩親樣の御心安めん事を心がけ給はん事を、幾重にも〳〵祈り上候。われよりは秋の夜長とも、相成り、御勉學には、好時季に候へども、余り家にのみ、たれこめて、御病氣にても、出てなば、またも御心配の種ますのみに候へば、適宜に御運動なされ、御身体も御壯健になされん事、望ましう存じ上御此度の潔き御振舞の余りに嬉しう、御祝ひかた〳〵思ふ一ふし申上候へば、この姉の一言と、御きゝ流しなく、御實行下され候はゞ、此上おう嬉かるべく候。卓々かしこ

大阪　桝田益子

評　一喜一憂の間に同胞の眞情あふれて文章の冗長なるを覺えざるは眞情餘あればなり。

やよ、次郎よ竹雄よ、汝が讀める書是へもて來よ、此姉がひと言

汝なさとさん。いましは何の心して書をば誦らんずるか、陽明が師の言を守りて、ひたすらに勉めはげむなればいと善し。そも〳〵書読む事の尊きはいはずもがな、日々に差向ふ文机を、正しき大道となし、墨すり流がす硯をますみの鏡と、思をうつして、明らけき文の光りに、心のやみを照らせよかし、學びの道は、あら鷲の住てふ峯のこゞしき岩嶺も、心の駒に鞭打て、千里の外まで踏みさくみ、みづちのひそめる海原の千重のあら浪も、大船の黒烟り立てゝはしる如く、いや進みに進みなば、古聖賢何でうかたからめやは。しか學びの上のみならず、後世の神とあふがれ、すめらみ國は更なり、外國までも聞ゐて、其名天の下に轟ける人々にも、我がむちうつ心の駒のたゆまず、あらぬほだしにつながれずかゝぐる手綱の一筋に、ゆるびなくつとめ、いそしみなば、時のまに千里をかけるする墨、池月、の如き龍の馬にもまさりて、いかでか昔の人に後るべしやは。挑尻ならんは、人笑ひに成ぬべしむさしあぶみ心にかけてな忘れそ、馬耳東風ときゝなしそ、かくいふ今日は、小床にまつれる亡きがぞいろのいひ遺しさとさせ給ひしなり。なま〳〵しき姉が言をも、やがて亡き父母のゝ給ふときゝきれがし。やうなきすさびに、人といさかひ、はた犬猫をうちきため、荒びたる遊びして身をなそこなひそ。學びの道の一筋に直く正しき心をむねとし、汝が名におへるごと、すくよかにして呉竹の世に生ひいでたらましかば、過ぎにし君は更なり、姉が悦びの極みなり。ゆめな忘りそ、次郎よ竹雄よ、さきのふみ、いざかへしてん●

肥前　林　くに子

本年の避暑には、必らずお歸りの事と、いと樂しみにまたれけるを、やむ事なきことの侍りて、とゞまらせ侍る由、いみじう、口惜しうこそ。何某殿御歸省あそばされしを幸ひ、御許の近來の容子、及び、學科の成績等、をちなく伺ひ侍るに、學力はいつも他に勝れつゝおはす由。誠によろこばしうなん。さりながら、かねて、たらちねの君のいたく心をなやまされ給ふ、幼なきよりの悪しきくせ、此頃は全くつゝしまれ侍るならんと、ひそかによろこびてけんを、さはなくて益烈しく、人を人とも思はで、いさかひなどし、果は亂暴の所爲などなされ、學友の間柄も兎角睦まじからぬ由、それしりたる時の姉の心、如何許、苦しく、口惜しく、ありしかを能く〳〵、推量らるべく、御許にも最早左許りの邪辨まへられぬ歳にても侍らぬに、父君いまわの時も、深く御心に掛させ給ひて呉々も御遺言遊ばされしには侍らずや、わらわは其御言の葉今も猶、耳に殘り、ゆくりなく思出でゝは時ならぬ時雨を催し侍るを草葉のかげより、此有樣を見給ひなば嘸やなげかせ給ふらん。又唯一人のおのこ子、杖共柱共思召母君のきこし召さば。如何になげきもし、悲しみもし給はん。深き思ひのあまりに。病など起させ給ひし、其時に悔みてもせんなき事なりけらし、必たけきは、身を滅ぼすもとゐなりと、先哲も云はれけり。今の内心をあらためられでは、兎ても、角ても出世のほど、おぼつかなくたとへ輕裘を着、肥馬にも乘、いかに品高きも、終には弊衣麁食陋巷に蟄居する境遇にも立到らんかし。何卒、今よりは心を改め一筋に學びの道に心をよせ。あつぱれ日本國民たるの本分をつくし、なき父君の御たまも安らけく、母君にも御孝養おこたらず、折節毎の便りにもいとよろこばれ給ふ樣心掛てよ、姉が熱情、空吹風と聞き流さで、次にはうれしき便りきかせてんや。餘はおくろゝ雁にと、かくなんかしこ。

東京　早船　[illegible]子

隙行駒の足早く、諸共に御兩親の御膝下をはなれ候てより、春と

すき夏とたち、心淋しき秋に相成候。さてそなた事さる方より承り候へば、此頃兎角惡しき友と御交り、辱き月日を遊惰に御すごしなされ候由、御身にかぎり、左様のことはあるべき筈はなしと思ひまどひ、いたく驚入候。乍去若し眞に候はゞ、御出京當時は、精勵比なしと持はやされ給ひし御身に似合しからぬ御ふるまひ、若國元の御兩親様へ聞ゆ候はゞ、如何ばかりかこち給らんと胸安からず存候。今更申迄も無之候得共、われ等姉弟兩人をはゝ〳〵と遠き都に遣され候も、奥深き學の道をもわきめさせんとの御恩に外ならず、まして御身は男子の事故御兩親様の御心遣をなみ〳〵ならず、折々の御消息にも、そなたの行御問に相成候。斯ばかり深き御慈愛をよそにしては、不孝の罪も恐しく存候。此後は心を錬され、御勉學の勞を積給はゞ、やがて月の桂をも手折て、身にほまれを輝さば、御兩親にも、如何ばかり御喜被遊候かと存候。殊にさとき御身の斯ばかりの事、御わきまへなき筈は無之と存候間、たゞ一筋に學の道御いそしみ被下度、いろ〳〵申上度候得共、餘は御面會の節に譲り申候。

東京　田中貞子

殘の暑尚去やらず、中々に暑中よりしのぎ兼候やう思はれ候處、御叔父上様御初、御一同様御許さまにも御さはりなう入らせられ、御嬉しく存候。こなた皆々無事、乍憚御安心被下度候。今更申迄も無之候へども、御兩親様御世去後は、あはれ埋木ともなるべき御身を、御引取被下、引續き御教育に預り、其當時は御勉强の御様子にて試驗の成績も宜敷との事故、私もうれしく存居候處、此頃は音樂にのみ御熱心にて、學事は怠がちに候趣承り、かげながら心を痛居申候。音樂とて一むきにあしき物と申にはこれなく、折々のなぐさみは却て氣分も引立候へども、それがため御勉學おろそかにては、第一叔父上様にも申譯なく、地下の御兩親様にも不孝の事と存候間、今よりは一筋に學の道に御いそしみ被成度祈入候。さはいへ徹夜などの過度の御勉學は、却てあしき事に候間、怠らず規則正しく御はげみ被成、一日も早く御卒業芳しき名を御揚なさる様、御心掛專一に存候。兼々申候通り叔父上、叔母上、御初皆々様の御申付、御家風御大切に御守被成て、朝夕庭のそうじなどは、御身の役と御心得、かまへてわがまゝなる御ふるまひ無之様願上候。さかしき御身のさる行ひ無之とは存候へども、弱年の事故氣付かぬ事もやと申そへ候次第、御氣にさへられぬ様願上候かしこ。

北海道　秋元たか子

秋風そよ吹きて天氣もよろしく、心すが〳〵しく候處、承れば御身は米田先生に叱られたのが悔やしいとて、母上様の御云ひ附をも更に御聞き入なく、日々遊戯にのみ耽りて出校は愚か、少しも學問など致されざる由、昨日母上様より承り、實に驚き入り候。日比賢き御身の何たる御心得違ひの事に候ぞや。夫れも御身が何の過もなきに先生の御叱りなされ候ひしならばまだしも、御身は修身のお話の時間に中井さまと何か話しをなして居つたのを見出だされて、夫れを叱られたと言ふ事に候へば、それを腹立てゝ出校せぬなどゝは氣儘な了見に御座候且つ先生が叱り給ひしは、御身を我子の様に思ふて下さるゝが故にて候へば、先生の仰せは何事によらず有難く感服するは、生徒たるものゝ當然の義務に候。それに母上様は御身が出校もせず、毎日家に在りて遊戯ばかりして居らるゝを、非常に御心配遊ばされ居るとの事なれば、今にして御身が心改めずば、母上様には御病氣にもやなり給はん。若しもその様の事ありては、御身が不孝の罪免れ難く候。御身とても成學の後は、身を立て名を揚げて、御兩親様の御恩の萬分の一をも報じ奉るべき覺悟は之れあるべくとは存じ候へども。諺にも蒔ぬ種は生くぬとか申し、學ばずして立身出世は思ひもよらぬ事に候。遠

かに心を改め、一日も早く御出校の上、母上樣の御心御やすめなされ候樣學問を勵まれ、他日有爲の人物と相成候樣御心掛の程、姉が一生の願ひに御座候。先は聞込み候まゝ、捨て置き難く、右一言御諫め申候以上。

信濃　松澤まつ子

不順の候に候ところ、御兩親樣にもます〳〵、御機嫌よく御はしまし、御身等も、御健にて、昨日より學校始まりて、御通ひの由いと〳〵嬉しく存候。さて、我等が斯く安らけく世を送るは、皆大君の、深き御めぐみに由るなれば、御兩親樣は、人の子として世に生れ出づるや、雨降る夕、風吹く朝、それは〳〵人知れぬ御心配も、皆後々身を立て、家をおこし、御國の爲に盡くさせんとのいと〳〵、有難き御心より、御身も忘れて、いつくしみ給へる御恩の程は、中々につたなき筆にはつくしがたく候ぞや。されば、何事も御兩親樣の仰せを守り、いよ、學びの道を、奧深く分け入りて、智をみがき、德をたて、以て、國恩に報じ奉らん事を暫も御忘れなさるまじく候。これぞ、我國古より行はるゝ、忠孝一つ道なる、外國には有難き、美風に候。其美風を、受つがんとする御身等は、小學時代の只今より最注意なさるべく候。彼の麻の中のよもぎと言ふことわざもあれば、友は、必ず、益友を選びて、共に直なる道をたどり給へかし。兄弟は手の指ともきけば、たがひに助けあひて、まづ身体を大事にし給へ。朝はつとめて早く起き出でよ、有明の空の景色こそ實にめで度ものぞ。去年の夏、姉と共にめでたりし池の蓮の花も清く咲き出でゝ涼しき朝風にかほるならん。あはれ、其花、泥の中よりぬけ出でゝにごりにしまぬ清き姿を、只美しとのみ眺め給ひそ。夜はなつかしき御兩親樣と共に、夕顔棚の下に、月を眺め給ふらん。姉も同じ月を夜毎に眺め入りて、あはれ御身等も、此月の如く、世をてらうすやに、なり給はん事を、祈り居り候。姉はいと達者にて、常々女德と言う事を、座右の誡として、いよ、其道を勵み居り候間、御安心下され度候かしこ。

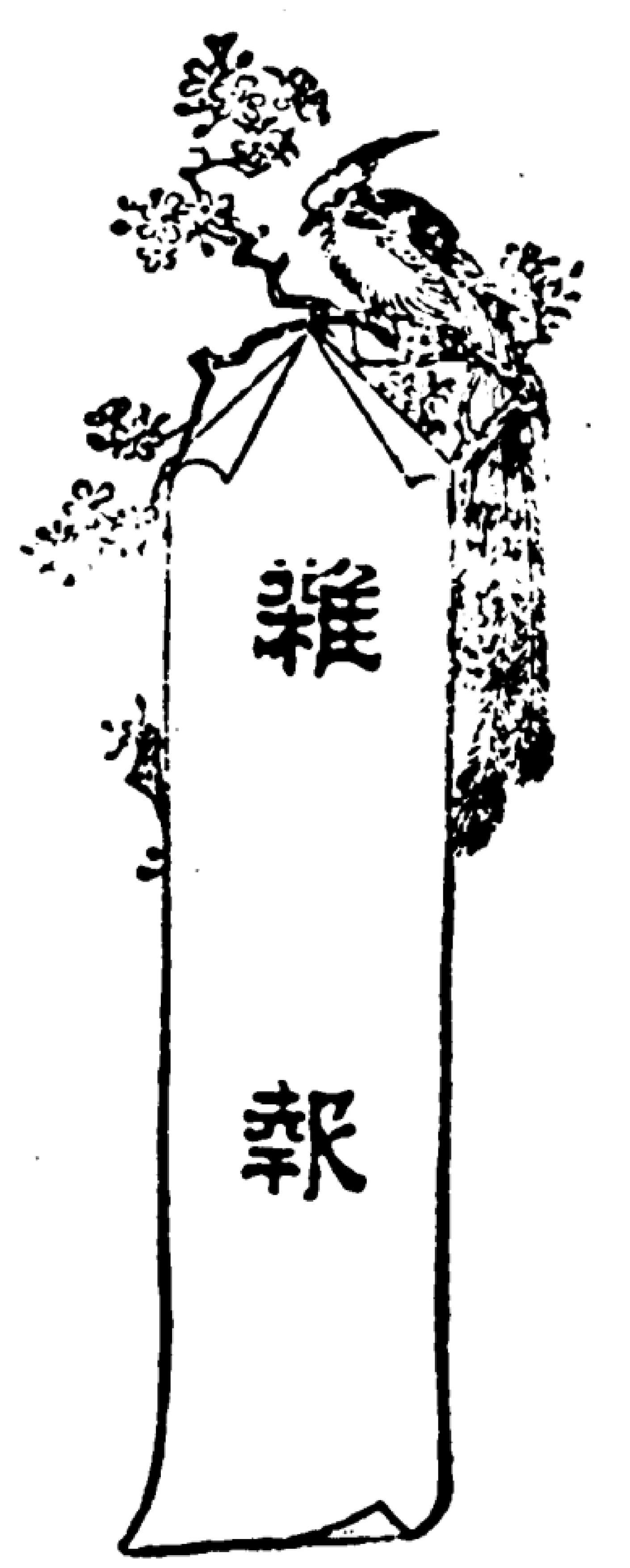
和泉　福原薫子

昨日は幸ひに日曜なりしかば、御塾まで御たづれいたせし處、生憎御他出にて、御面會は遂げざりしも、師の君に御目にかゝり、親しく御身の近頃の容子及び、學科の成績など、伺がひ侍りしに此の節は兎角不勉強がちにて、こたびの試驗は多分不結果ならんとの御心痛めての、御話しを耳にしたる姉の驚きと口惜しさは、そもいかに候ぞや。心中推し計らせ玉ひてよ、いつも家にて口ずさまれし中の、少年易レ老學難レ成、一寸光陰不レ可レ輕云々の句を、いかに心得させ玉ふにや。只今の此大切なる修學の好時機を、空しく輕過なされては、故鄕の御雙親樣に、何とか聞へ上申すべき。少年の怠りは老後の悔。汐汲む海士、薪こる賤のおのこに至るまで、勉むる者は氏なうして、世に出で敬せられ、怠たる者は高貴に生れたりとて、世に侮られ人に輕んぜらるゝ有樣なれば、かゝる世に御男子と生れし甲斐には、能くいそしみ勵みて、物事を研究し、心を正うし意を誠にして、あつぱれ、やまとおのこたるに恥ぢざる功を奏すべきには候はずや。さばかりの事辨まへ玉はぬ、御齡にも侍らねば、爾後心を改めて、御精勵、つぎの便りには何卒安神の報きかせ給ひてよ。師の君へもよく〳〵御禮鍵をれぎ置きし故、是非とも御憤發なされてよ。熱情もて綴りし此の姉のふみを、反古になし玉ひそ、先はあら〳〵御心そへまで。かしこ。

遠江　夏目松枝子

秋立初めし印にや、烈しき暑さも、いつしか消ゑ失せ、此一日二日はいと清きよく相成候。折から其許には、絶ゆす文の林を、た

どらせ給ふらんと、喜ばしう存候。こなた父上母君、並に祖母の君にも、障りなう平らかに、暮し居候、只そこもとの、學びの業の、日とく卒へねと待ち侍るぞかし。さて涙に袖を分ちしより、指屈むれば、早二とせとはなりぬ。げに光陰は人を待たずとか申さるゝも理になん。古語に人學ばざれば木石に異らずといへり。古より今に至るも、未だ嘗て勉めずして、後世に名を殘せし例なければ、勉め學びてこそ、終に名をも上ぐべけれ。先づ試に古き書どもを繙き見られよ。彼の小野道風の如き、一小蛙の、柳に攀じんとして、果さゞるも、猶屈せずして、其志を全ふせしを見て己もたゆまず、うまず勉勵し、遂に芳名を後世に垂れしに候はずや。亦もろこしの、車胤、孫康の如きも、家いと貧くして燈油すら購ふ能はずされど各學びの業を好みて冬の夜は、雪を其窓下に積みて、其明によりて書を讀み、夏の夕は數多の螢を集めて机上を輝し、以て其志を全ふせしとか。是皆世人の知る所にあらずや。猶新井白石、荻生徂徠なんど、皆古の良書に乏しき折にてもなほ大名を揚げ玉へり。況や思ふまゝに良書を得らるゝ今日に於てをや。さればたゆまずうまず勉強せば、などて大業の爲し遂げらるべき。願はくは精心一到何事かならざらんの古言を守りて目のあたりに横はれる峻しき山谷苦しき海川など、ありとあらゆる困苦に堪へ忍びて、終に其名を顯はし、以て國恩に報いなば、妾が喜び否兩親のまんぞく之に過ぐる喜びかあるべき。さは云へ其身の常ならざらんには、などかゝるわざのなし得べきや。只々御身をそこなはぬ樣、御自愛專一とぞんじ候。あなかしこ



●●●御惠恤　天皇皇后兩陛下には、東京府下北鳥島噴火の慘狀を聞食され、いと憫然に思召されたる趣にて、御惠恤として去る六日金千圓を下賜せられ、また去月十日、山口縣下非常の暴風雨被害尠からざる由聞食され、罹災者御救恤として天皇皇后兩陛下より、金一千圓御下賜相成りたりと承りぬ。

●●●●●●●滋宮韶子內親王　去る六日は同宮殿下御正祭に付き、午前宮中に於て、岩倉掌典長、以下掌典出仕の上祭典を行はれたりと。宮は　今上陛下第三の皇女にして、明治十四年八月三日御誕生にて。

十六年九月六日御薨去ありし御方なりといふ。

●龜山天皇木型御像　元弘紀念碑の上部に建設する龜山天皇御銅像の木型は、木彫家山崎朝雲の擔當にて、此程出來せしを以て、去る十四日、駒込千駄木町の同氏自宅に於て、美術家の觀覽に供せしよし。御像の丈は一丈五尺にして、頗る立派なる出來なりと云ふ。尚其鑄造は、鑄金家岡崎雪聲之を擔當する由。

●清國貝子の寄附　過般本邦來遊中なりし清國貝子載振殿下には、日本赤十字社病院へ金五百圓を御寄附相成り、また、隨員並に蔡欽差を隨へて、小石川なる盲唖學校へ御參觀あらせられ、同校へも五百圓の御寄贈ありたりと。同校にては、斯る寄贈金を辱ふしたるは、先年露國皇太子殿下御來臨の際と、今回との二回なれば、長へに貝子の高德に酬いんとて、同校維持金の内へ編入したりといふ。

●愛國婦人會と法人組織　九段坂牛ヶ淵なる愛國婦人會は、設立以來日尚淺きも、既に全國中に數十の支會を有し、會員總數二萬有餘の多きに達し、最早會勢擴張時代を經過して事業實行の途に就きたるにより、此際一層會の基礎を鞏固にせん爲め、近々協議會を開きて、法人組織となさん計畫なりとぞ。

●女子美術學校と料理法講習　東京本郷區弓町なる女子美術學校は、校舍狹隘の爲め增築中なりしが、この程落成して、舊寄宿生を移轉せしめたる由なるが、同校は去る十五日より料理法講習科を開始し、日本料理の擔任教授は赤堀翁、西洋料理は木村留吉氏にして、同所主任は、横井玉子、佐藤靜子の二女史なりといふ。

●讃岐鐵道の女子採用　讃岐鐵道會社にては、

各驛出札係及び改札係の一部に女子を採用せんとの計畫ありしが、先づ試みに客車中の喫茶室詰ボーイとして、試驗の上八名の女子(社員資格)を採用し、尚更に數名を採用する筈なりといふ。

●香蘭女學校の改良　東京麻布永坂町なる香蘭女學校は、良家の子女の入學するもの多く、從來の敎場狹隘を告げたるより、暑休中增築に着手し、今回落成したるを以て、去る十七日より始業せしが、本學年より諸事改良を加へ、敎員は總て有資格のものを任用し、英語科は特に時間を增して、本科生には一週十二席(一席四十分)を課することとし、運動場も更らに一箇所增築の計畫にて、今回始業に付き新に生徒を募集したれども、一學級二十名以内に止めて、充分に敎育を施す目的なりと云ふ。



●米國女子大學奬勵金　同奬勵金は、日本女學生のため、米國有志の醵集して寄附せしものにて、五年每に一人づゝ洋行留學せしむるものあるが、本年の候補者試驗は、來十月麴町元園町女子英學塾内同事務所にて執行する筈にて、有志者は本月廿五日迄に申込むべしとなり。

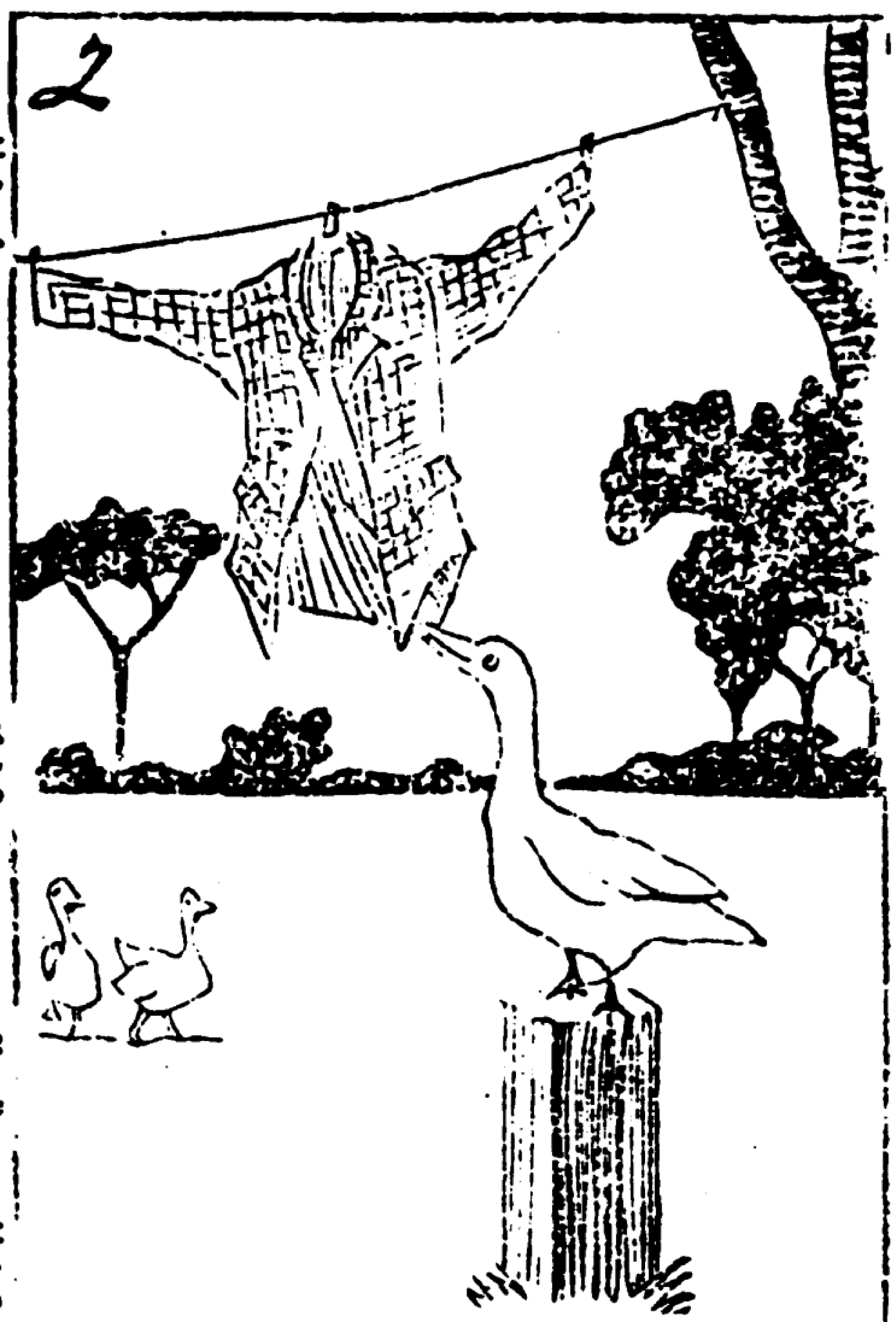
●勞働者　多くの勞働者中には、幼兒を有するが爲め、工塲に通ひ得ざるもの、及び斯る事情の爲めに、見す〳〵無垢の小供を惡道に陷らしむるものあるを憂ひ、仙臺東二番丁宮城授產塲にては、今回勞働者幼稚園なる者

を設立し、數日前其開園式を執行せしが、同園設立の趣旨とする處は、飽まで德育を主とし、若し襤褸を纏ひ居るが爲め來りて保護を托するを耻るものあらば、幼稚園にてにては、別に衣服を製し置き、幼兒を預れる間のみ彼等に清潔なる衣服を着せしめ、斷じて自屈せしめざるらんことを勉むる由。彼等勞働者に取りては、實に至大の扶助を與ふるものと謂ふべし。

●●●●

●貞婦の涙　江州下彦根町字一番町二十八番地に谷村六次郎(三十五年)とて、雜業をもて渡世とする者あり。女房サト(三十二年)との間に、カネ(十二年)ミヨ(六年)と呼べる二人の小兒さへありながら、元より豊かなる資産家ならねば、思ふが任の活計もならず、幽かに其日の煙を立て居たりしに、不運にも爲る事爲す事總べて表裏に、空しく失敗に失敗を重ねたる末は、所々に負債のみ嵩みて、遂には町にも住み詫びけん。六次郎は一通の遺書を後に、闇に紛れて馴れし故鄉を立退きしは、今より五年の前なりけり。情なくも取殘されたる妻サトは、斯と知りて悲嘆大方ならざりしが、二人の子まである身なれば、それよりしては、僅かばかりの手內職に、辛くも幼兒の養育を事とし、一方には夫の行方を絶えず尋ね探めつゝ、憂き月日を送り行きしが、昨年五月中姿を隱せし夫より、赤坂區表町三丁目十二番地本澤方との表書ありて、サトの手許に一葉の端書の着きしが、文意は極めて簡畧に、今後自分は世に亡き者と諦め吳れよと、情けなき事のみぞ記されける。永らく尋ね詫びたる末なれば、サトの驚愕と喜悦は實に大方ならず、風の便りの果敢けれど、東京と聞けば漸く百里餘を隔つるのみなればとて、其後は再三郵書を送りしも、絶えて一言の返事だになかりしより、サトは殊勝にも

出京を思ひ立ち、親しき人に頼みて、漸く長女カネだけを他家に預け、僅少ばかりの旅費を恵まれて、身は次女のミヨを背負ひつゝ、故郷を後に、東海道筋を宛然袖乞の姿にて辿り、日を經てこの頃無事に着京し、足を休むる程もなく、直ちに赤坂表町に入りて、彼の本澤方を尋ねけるが、ありし手紙の着きけるより早や一年餘も過ぎにし事とて、今は更に不明なれば、サトの落膽いはむかたなし。さもあれ、此儘にして立戻るべきならねば、其足にて赤坂署へ出頭して、詳しう其始末を物語りて、六次郎の行方捜索を願ひしに、係の警部も漫に哀を催し、定めて貯へもなかるべしとて、一時署内に留めて、長途の疲勞を勦りつゝ、兎角六次郎の居所を取調べたるに、今は區内氷川町四十六番地に一戸を構へ、車夫となりて辛くも一身を過す事明かになりしより、直に六次郎を召喚して、今日までの來歷を訊ぬるに、サトの言葉と些か違ふ所なければ、然らばとて妻を引合せしに、六次郎は夢かとばかり打驚ぎ、互に手に手を取合ひて、絶えて久しき再會を喜びしが、誠や五年目のこの無事の對面に、夫婦が心の中や如何なりけん、六次郎は旋て涙を拂ひつゝ、係官に厚く禮を述べて、妻子を我家に引取りたりとなむ。或



ずべき貞婦なりかし。

●●●●熊谷の忠僕　埼玉縣熊谷町に酒井惣七といふ舊家あり。現今の戸主は、同じき惣七、家名を名告りて五代目に及び、家運日に隆盛を極めて祖先を辱しめず。此處に至れるには深き因ある事にて、土地にては誰知らぬ者なき次第なるが、其は、同家に忠僕村田八太郎のあるが故なり。同人は、今年古稀を過る事已に三年、老境に達しながら、尙矍鑠たる事遠く壯者も及ばず、平常の行爲も高潔忠誠にて、多く其比を見ず、忠僕の龜鑑として賞するに餘りありて、同人は始めて酒井家の三代目に仕へ、年を閲する事實に六十餘年、主家三代の久しきに及び、或は幼主を補育し、或は家政の處理に心肝を碎ける杯、主家に仕ふる事終始一貫して、一日も異る事なきに、現戸主は同人が多年の功勞を思ひて、去年四月熊谷町役場に受賞の恩典を申請する處ありしに、越えて本月三日本下埼玉縣知事は、木杯一組を下賜せりと。八太郎の名譽はさる事ながら、斯る忠僕を出したる酒井家の名譽も、亦賞するに足るべし。

●●●●流行の袷　秋風立ちて袷の時候にも近づきたれば、今秋の流行ものを左に紹介すべし。▲婦人向矚着　本年新に流行して最も好評なるは、小紋に裾模樣を施せるものにて、染方は裾の所を暈しの薄色染にし、其上へ裾模樣を置くなり。模樣は多く白上りになし、又は少しく彩色入の染出しをなしたるものにて、總て淡泊なる好みなり。例へば、流水に光琳の紅葉或は菊、葦、女竹、藪柑子、籬に鐵扇花等を描き出し、地質は縮緬にて、二枚袷上下對の仕立とす。年若も中年增も柄の大小こそ異へ、小紋、模樣もその形に異るなし（仕立上代價五十圓位）長襦袢は縮緬繪羽友禪にて、地色は鐵と鼠、模樣は匹田絞り入秋草の繪を染出した

るものか、又は地質紋羽二重にて霞暈しの朧染となし、箔押の千鳥模様を置きたるものなど良し(代價二十三圓位)帶地は、厚板織の丸帶、地色は、葡萄色又は鐵御納戸等の濃き色合もの、模様は草花又は古代唐草或は波の打寄等にて銀絲入のものか、又は縞御召にて赤の横縞(代價三十圓より四十圓位)又地質鹽瀬にて濃き鶯茶に古代更紗の布地を散らしに置きて染出し、中に金更紗も混り居るなどは最も高尚ある好みなり(代價五十圓位)

▲澁好み●●●着物は紋織の御召にて、地色は黒、模樣は角通しの小紋を金茶の濃き色にて織出し、之を二枚袷の對仕立として、裾廻しには栗梅色の羽二重を用ゐるなど中々澁い好みなり(仕立上代價四十五圓より四十七八圓位)長襦袢は、地質縮緬にて紅無しの繪羽友禪(代價十七圓より廿圓位)帶地は、片側地質鹽瀬にて金入描更紗模様、片側は博多織の黒無地にて木目形の地紋を織出し、總て佛國製のセルカンに擬して地質はそれよりも厚きもの(仕立上代價二十二圓位)派出好み●●●着物は縮緬、地色は藍皮にて之に黒繻子の半襟を掛け下着は地質御召にて茶色の辨慶縞、又は障子格子(仕立上代價三十五圓位)又、地質結城紬、或は銘仙、地色は藍皮にて小格子、或は大大名、子持縞等裾廻しは絽の勝色又は中花色のもの(仕立上代



價十三圓より二十圓位）帯地片側は、博多織の紺献上或は焦茶の献上にて、片側は唐繻子の黒又は茶色のもの（仕立上代價十五六圓位）▲羽織●●地質は、縮緬又は絽縮緬にて、色合は黒或は濃き花色、葡萄色等、胴裏の模樣は若竹又は遠山の景色か、或は宗達風の蚊張釣草に蝶の畫、山に松、松に水、雛に菊等を重なるものとし、其他種々の好みあるべし。勿論無双仕立てなり（仕立上代價三十五圓より五十圓位）但しこの無双羽織の胴裏に模樣を付けるには、從來は下方へ境界線を描きて其上へ諸模樣を染出せしものなるが、近頃は境界線を廢して付けぬやうになり、従つて模樣の置方も變りて、少し下方に下り、以前のものに比すれば長く且つ大きくなり、又絽縮緬も以前と違ひ、胴裏模樣の表に透く位のものを好み、地色は從來黒に限りたるが如くなりしも、本年は他の變り色流行するよし。

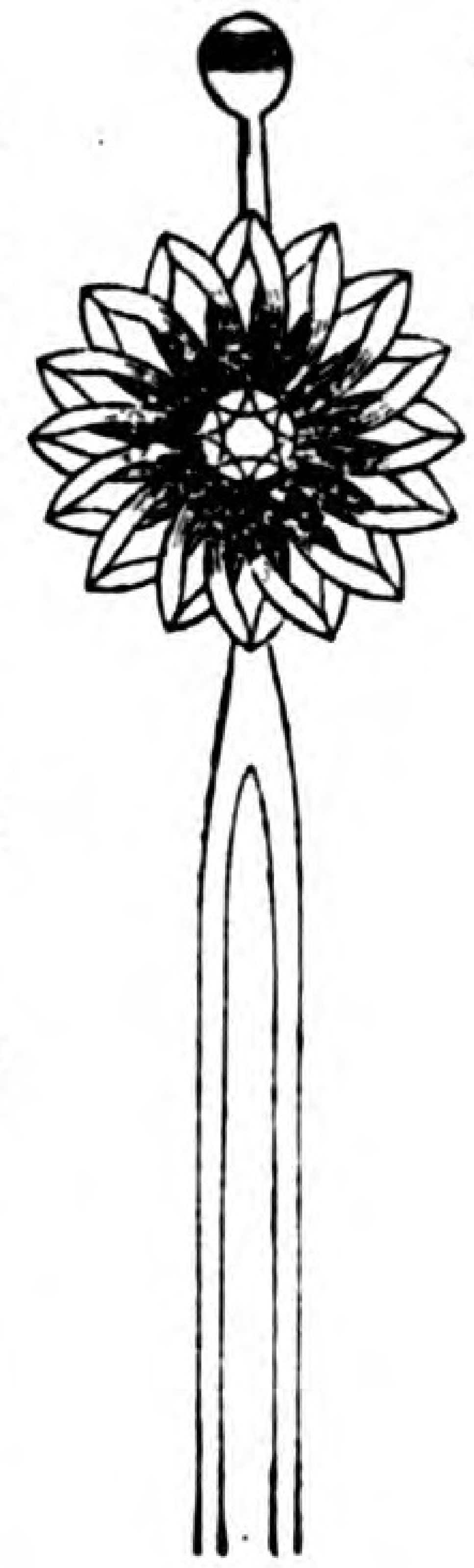


●流行の●●●●●金屬製簪（銀座尾張町白牡丹本店の話）一昨今流行の簪と申せば、左に掲げたる圖の如き金屬製の平打が、最も好向きでございます。併し年頃によりまして、形の大小等がございますけれども、先づ二十才より二十七八才位の婦人には、五分半より六分位、三十才より四十才位の人には、四分より五分位の所が、一番需用の多い樣に思はれます。序

に二三種の新案品を御紹介致しませう。

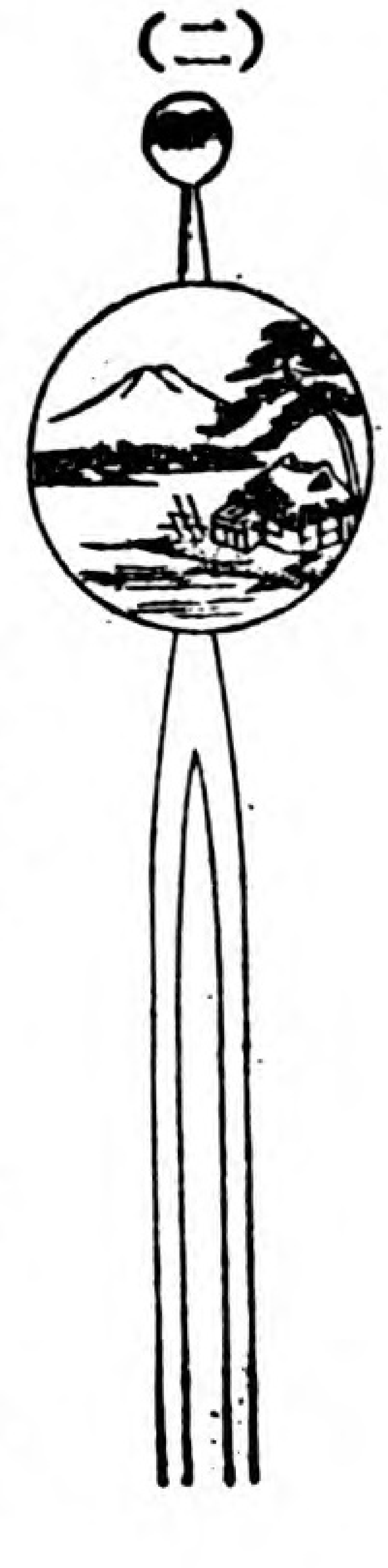
◎一號は拾八金、又は二十金にて造りまして、圖の如く『菊花』又は『松葉の丸』『水巴』『壽の字丸』『立田』『菊水』などの模樣を、手際好く總透彫に致し、「ダイヤモンド」『眞珠』等をちりばめ、目方も輕く、極意氣なるもので御坐います。價は小形十四五圓より、大形二十五六圓、又寶石入は三十圓以上六拾五圓位

(一)



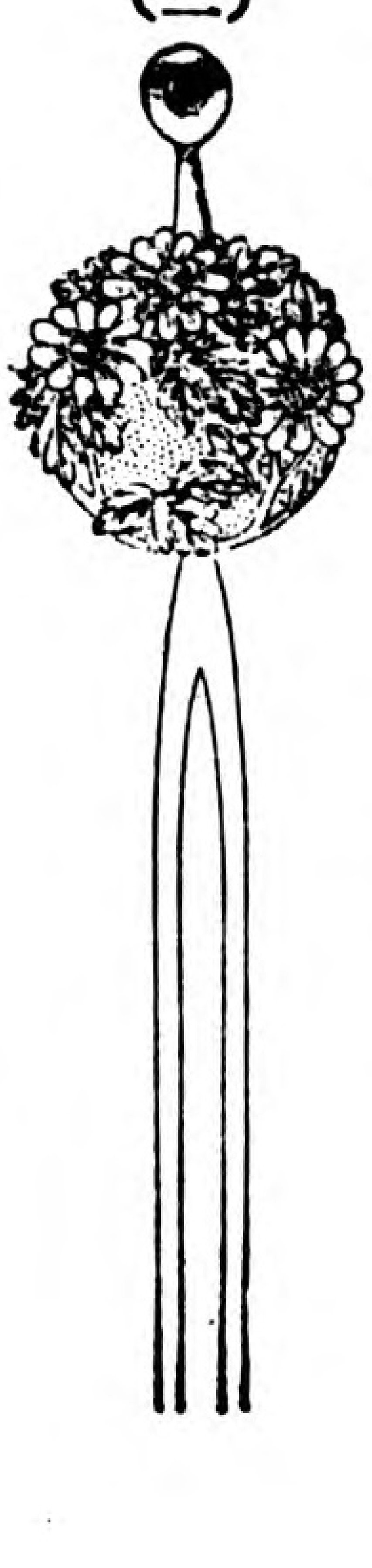
◎二號は純金、又は二十金にて造りまして、之に「プラチナ」『赤銅』『朧銀』等にて、圖の如く山水風景、或は古代光琳の圖案等を應用致し、何れも斯道大家の手に成りたる象嵌、又は片切彫刻を施せしものにて、誠に風雅な品で御坐います。價は小形貳拾圓より三十圓、大形にて五十圓内外位で御坐います。

(二)

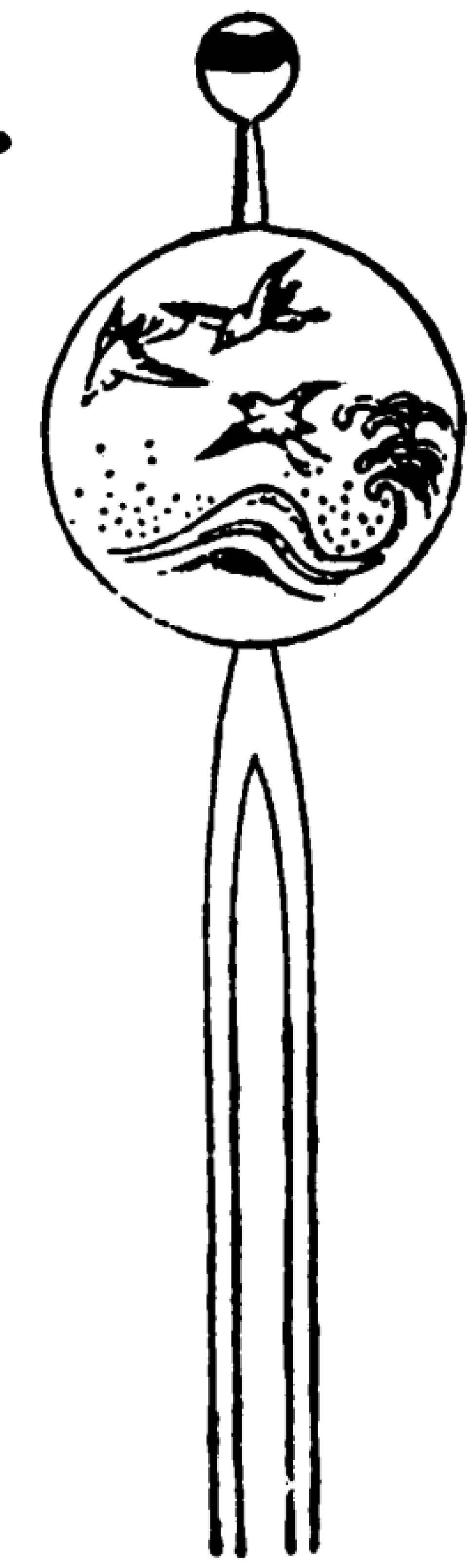


◎三號四號は矢張り純金、又は二十金にて造りまして、模樣は『浪に千鳥』『桐に鳳凰』『四君子』『菊桐』『牡丹』等、其他花鳥虫魚の內より新撰したる圖案を、高彫、又は中肉彫に致せしもの、、如何にも佳麗で高尙の品なれば、二十才前後の若向きに適當のもので、價は二號と大抵同樣位で御坐います、外にも銀製にて、各號と略ぼ同樣のもので壹圓以上五六圓迄種々とございます。

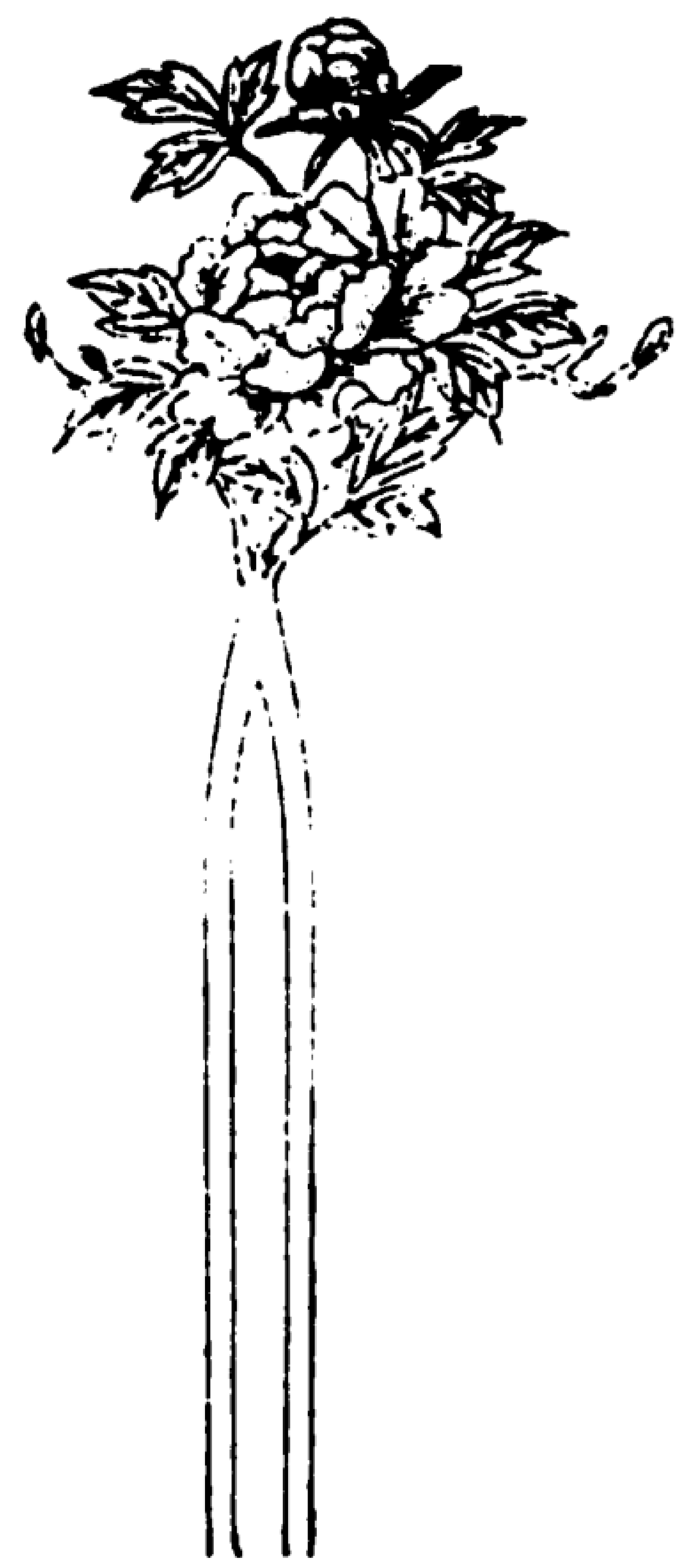
(三)

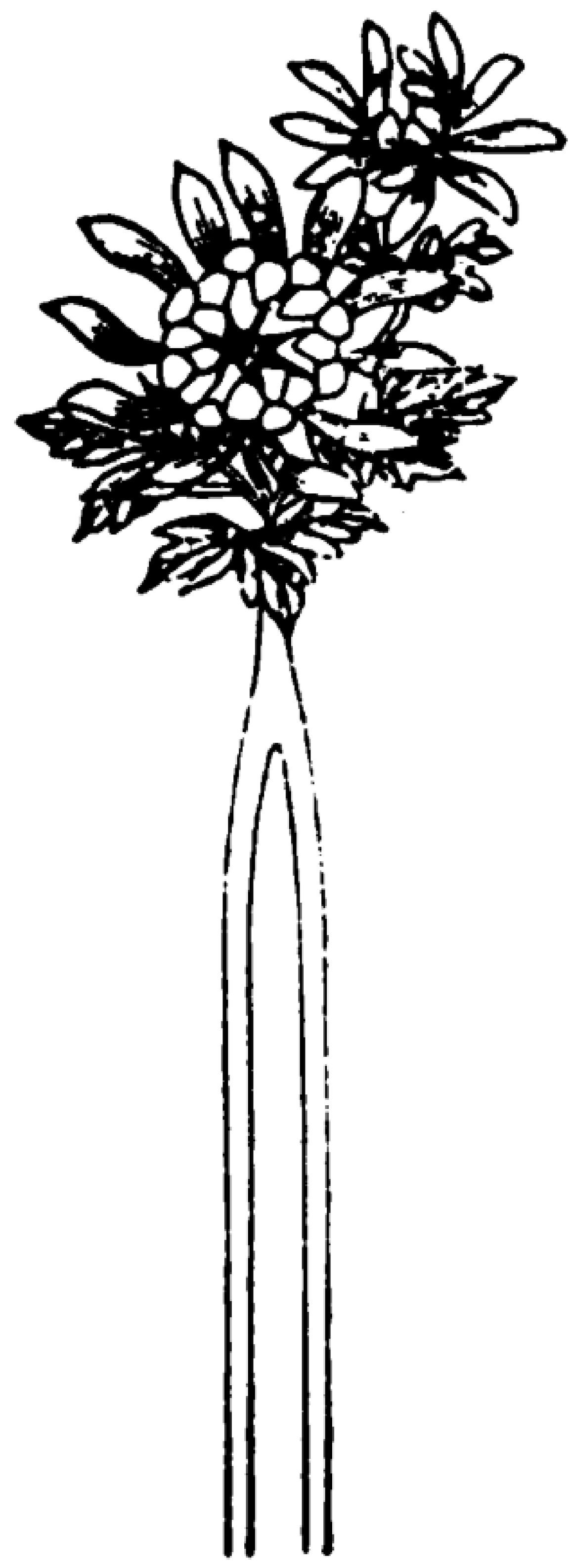


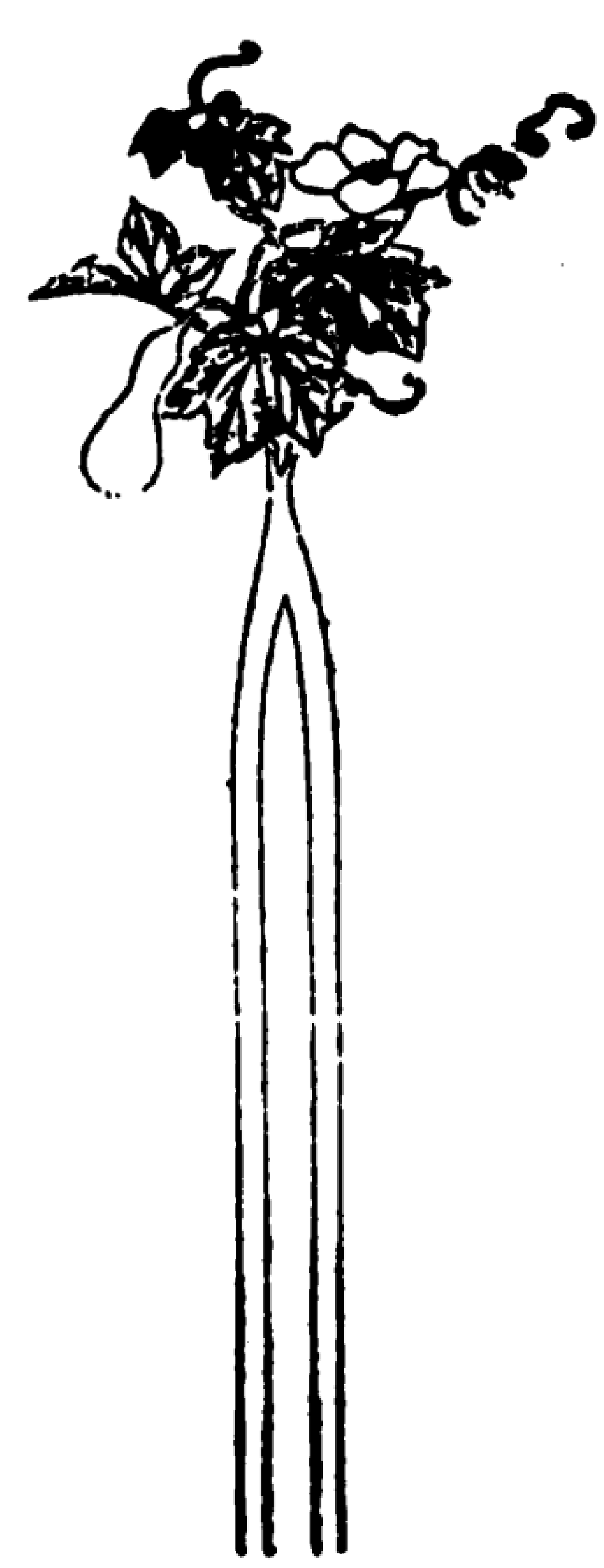
（四）



◎金銀製の花物之は圖の如く『芙蓉』『薔薇』『百合』『菊』『牡丹』其他の草花を其儘に寫し出したる如き、美妙なる製作品にて、丸髷又は島田、銀杏返しの前差、或は束髪夜會の洋風の髮飾りにも兼用致されます。價は十八金製小形にて拾五圓位、大形三十圓位、又、更銀製は、小形壹圓半位より、三圓、大形は四五圓より八圓位までございます。







落葉籠

▲信州の御方に御答します。音樂學校は、教員を目的とするものと、進んで音樂を深く研究する人との別によつて、入學程度もちがひ、費用も多少ちがひますが、たき子さんの目的はどちらでありますか（かをり）

●私は裁縫學校に入學いたしたいと思つて居りますけれど、幼少の時父母に別れし爲め、學費なく、

兄は病亡しまして困りますが、東京の内にて、二年半の間學資貸してくれる會社や家がありませぬか、又何程の學科で入學させませうか（岩内文子）

●長歌今樣歌を學ぶに、何か宜しき稽古本は何處に有之候や、または何が尤も稽古に便なりや、書名を御高示被下度、譯者の君に願上候也（大阪某女）

▲佐々木信綱氏の著述で、近世長歌今樣歌集といふ本が博文館から發行されてあります之は十分とは云へぬが其一端をうかゞうには足ます。（かゝり）

●私は田舍の者でありまして、親姉兄は昔かたきで、女はいつまでも勉强するとなまいきになるといふのですが、私はどこまでも勉强したいと存じますが、どうしたらばよいでありませうか、皆さん御きかせ下さい（武藏田邊房子）

▲それは、まことに研究を要する事柄ですが、まづ、諸媛の御考へを聞きませう（かゝり記者）

●枕の草子のこゝろゆくもの丶くだりに「さうちうが家の人の」云々とかいつけ侍るは、如何あること柄にや侍らん。其さうちうの人となりもわきまへず、でたいづれの書に傳記の見え侍るにや。願はくば委しう御敎へ給ひてかし。

●落葉籠に投じ侍るには、歌文月並兼題を參らす折、同封いたしても、差支おはさずや。伺ひまゐらす（札幌まつ子）

▲字體鮮明でさへあれば、歌文と同封でも決して惡くはありませんが、用紙はかならず別にして貰ひたいのです。（かゝり）

口繪について

●近藤良造氏　氏は靑森縣第一高等女學校長也熱心育英の事に從ひ、德望頗る高しといふ。

●高木光子　刀自は東京府第二高等女學校女敎員の首席敎諭にして、後進子女の敬慕する者多し

とぞ。

●福島將軍の家庭　曩に本紙樂園に揭けたる「福島將軍の夫人」にて、其大概は了知せられしならむ。此度卷首に揭げし口繪を參照せば、いかに將軍の家庭の和輯せるかをも併せて知るに足るべし

●布引の瀧　神戸市を距ること凡そ五丁許の山中にありて一を雌瀧、一を雄瀧と稱し、雌瀧は高さ七丈三尺幅二間、雄瀧は高さ十五丈幅十三尺あり、いづれも崖上より奔下せる水勢凄まじく、餘沫衣を襲ひて、夏猶は寒き心地す。加ふるに山高く樹茂りて幽邃の趣甚だ愛賞すべし。

●堅田浮御堂　近江八景の一なる堅田の落雁を以て世に知られたる勝地あり、寺號を海門山滿月寺と稱し、登臨の風光頗る佳なり。傳へ云ふ勾當內侍の世を果放なみて、詫住ゐせし名蹟なりと。

●和歌の浦　『和歌の浦には名處がござる、一に權現。二に玉津島。三にさがり松、四に鹽釜よ』と俗謠に唄はるゝは此處なり。紀州和歌山を距ること一里餘にして、眺望絶佳の勝地なり。

●新刊寄書

体育	百五號	日本体育會
令徳	四ノ八號	同會本部
婦人と子供	二ノ九號	フレーベル會
兒童研究	五ノ七號	教育研究所
法の母	百十號	夫人正法會
日本婦人	三十四號	帝國婦人協會
東京經濟雜誌	千百四十八號	經濟雜誌社
女子の友	百二十一、二十二、號	東洋社
偕行社記事	二百九十七號	同社
女學世界	二ノ十一號	博文館
中央公論	十七ノ九號	反省社
文藝	四號	殿々堂
裏錦	百十八號	倚綱社
兵事雜誌	七ノ十六、十七號	同社
兒童新聞	十八、十九號	同社
六合雜誌	二百六十號	ゆにてりあん會
をんな	二ノ八號	大日本女學會
教育公報	二百六十二號	帝國教育會
新聲	八ノ二號	新聲社
慶應義塾學報	五十五號	慶應義塾
亞細亞教報	一號	亞細亞教報社
小天地	二ノ十一號	金尾文淵堂
風調	六號	風調社
女學講義	第三回後期十號	大日本女學會
俳聲	二ノ六號	俳聲發行所
こゝろのはな	五ノ九號	大日本歌學會
教育時論	六二六號	開發社
家庭	二ノ九號	家庭發行所
工談雜誌	一五一號	工談會
東京感化院月報	一三號	同院

小松宮彰仁親王殿下題辭　　内務大臣内海男爵題辭

前内務大臣樺山伯爵題辭　賞勳局總裁大給子爵題辭　内務大臣官房編纂

明治國民龜鑑

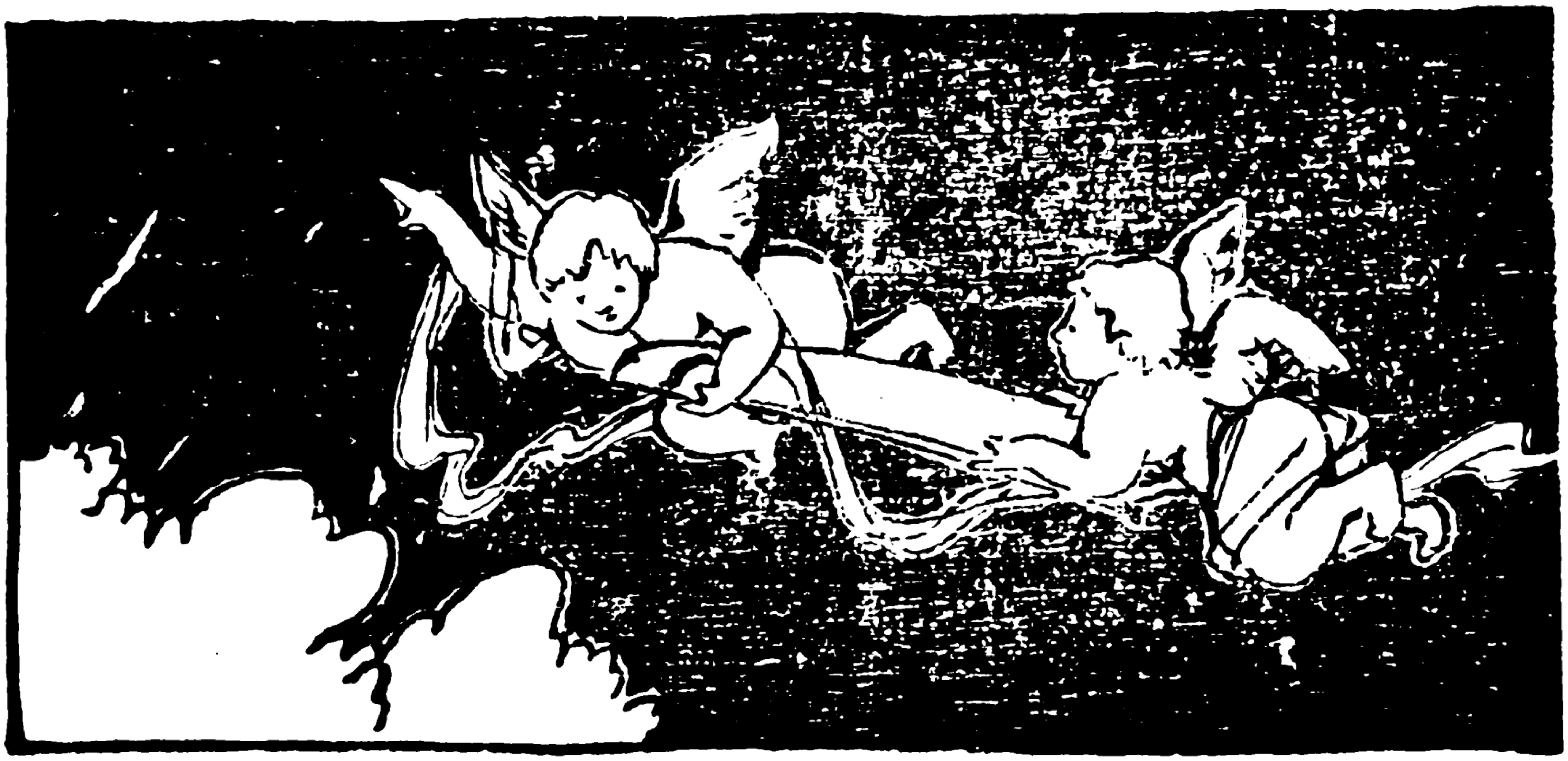
定價金貳圓

本書は明治十四年發布の褒章條例により紅綬綠綬藍綬の褒章を賜はり其善行を表彰せられたる者の傳記にて之が編纂の任に當れるは我文學界に名聲高き文學士大町桂月君ゆゑ字句流麗文章平易毫も難澁難解のことなく叙寫傳神の妙を極めたれば、孝子順孫節婦義僕を始め、一身の利害を顧みず專ら力を公同の事業に致し、若くは實業の發達を圖れる有志家、及び萬死を冒して他人の生命を救助せる義俠者等の面目鬚眉躍如として紙上に現れ、其志氣節操義烈の行爲を眼前に見るの思あらしむ、實に國民必讀の要書なり、本社今回原本の御下附を請ひ得つ精巧の活版に附し總傍假名附として婦女童幼にも讀易からしめんことを勉め、極めて廉價を以て販賣することとせり今回製本出來す大方の諸君速に御購讀あらん事を乞ふ

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　株式會社　國光社出版部

堀内新泉子著



一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤縄を結び、音樂の効により陰鬱柔懦なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむると云ふ趣向斬新の家庭小説にて、春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫妻、一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲

家庭小説

女樂師

喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も主要は一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは、大方諸君の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭敎育を裨益すること疑ひなし

壹部定價參拾五錢　郵税六錢

發行所　東京國光社出版部

嬢さんがお待ちかねの

少女讀本

月の巻が出來ました



堀内新泉著 ◎ 壹冊價定拾八錢郵稅四錢

花の巻に對する批評

◎毎日新聞評　堀内新泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最と面白く、且つ有益の冊子なり、目次花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評　まじめな所があつて先づ／＼善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評　家庭小説を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる規篇小説數種を集めたるものなり面白くなつかしくまた哀れに悲しき間教訓的意味を含ませて娘たり妻たり母たるものゝ心得を説きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の巻雪の巻こそ待遠しけれ

◎教育時論評　家庭向の著書、花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭教育の一助とすべし

◎中央公論評　家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドケ無き物語中自然に教訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし

◎東京日々新聞評　家庭讀本をあらはして以來、常に斯かる著を公にして、世の好評をほしいまゝにせし老人讀本に續いて今又この著をなす、趣味の淺源はしばらくこゝに言はず、昔人はたゞその年少女子を害すなきを喜ぶ。

◎國民新聞評　花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等、既に少女らしき命題にして、著者亦た既に此種の著に經驗あり、且つ成功したるに近し、夏の浴場、避暑の山、少女の調度の中に收めらるゝは、またなく應しかるべし。

◎國文學評　花の宴、ゆき姫、野末の露、玉椿、山吹、ぬひはり、の六篇を輯めて、一冊としたもの、皆、孰れも、教訓の意を寓して最も少女に適するやうな誠に罪のない物語である。讀み終つた跡に、滑らかな和氣靄々たる家庭の面影が、髣髴として、目前にあらはるゝやうな心地がする。吾人は、曩に、著者の『家庭讀本』を讀みて、その筆の、斯の種の著作に甚だ適するものあるを見たが、本書を讀みて、なほその然るものあるを認める。著者の、美はしき性格が、おのづと筆の上に現はれるものであらう。

發行所　東京築地　國光社出版部

◎賣捌　國光書房　北隆館　東京堂　文魁堂

近刊

鐵血宰相語錄　全

村上濁浪譯述

壹部定價金參拾錢
郵稅四錢

歐洲の政治家某嘗て云はく『伯都夜會の席に於ける比斯麥公の談論は、其の片言隻詞と雖も、日耳曼議會に於ける多數政治家の言論に比して、遙に優りたる勢力を有す』と。思へ公が銀燭の下、麥酒の盃を擧げ、客に對して說き出だせる一場の談柄が、忽ち一大問題となりて、當時の歐洲政治社會を震盪せしめたるを、本書は則ち公の秘書官、時の新聞記者等が、常に公の左右にありて、耳聞目睹して、世に傳へたる書籍雜誌の中より、粹を拔き、華を摭りて文學的逸事體に編製したるもの、或は「ヂスレリー」と握手し、或は「ゴルチヤコフ」と歎唔し、或は「ナポレオン」を揶揄し、忽ちにして熱火の修羅場となり、忽ちにして樽俎の和局を現し、忽にして閑靜なる家庭となる、其間躍如として公の風丰面目を描き出して餘あり。

公逝いて既に數年。世は凡庸政治家の競爭場となり了れりと雖も帝國主義の發達は益々著しく、世人皆な大偉人の出現を望みて已まざる也。此時に當りて十九世紀第一流大偉人の談柄逸事出づ、豈又讀書界の一大快事ならざらんや。

東京築地　株式會社　國光社出版部

新刊

文學士大町桂月著

常磐御前

定價
金拾參錢
郵稅貳錢

江南の橘は江北の枳となるとかや、平家の庭に移され、更に大藏卿の園に植えられたる源氏の名花は、伏見の雪に千行萬行の血淚を呑みて、遂に他家の枳とな り了れるも、その苦節は鐵拐山頭に再び春風を迎へ、壇浦の烟波に凱歌を揚げて、目出度く初志に酬ゆるに及びぬ。思ふに義朝を以て夫となし、義經を以て子としたる常磐の一身が、源平二氏興亡の連鎖たるは言はずもがな、大町文學士の健筆は優に此間の消息を寫し出して些の餘蘊なし。製本美麗當時流行の細長形袖珍となし、表紙畵、口繪等仔細に意を用ゐたれば、汽車汽船旅行の伴侶たるは云ふも更なり、樹蔭涼を納るゝの時、午窓机に凭るの處、讀誦一番、當年を夢みるの概ありて、興味津々禁ずべからざらん。

東京築地二丁目

發行所 株式會社國光社出版部

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十二版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵税金六錢

近日出來豫告

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　國光社出版部

明治三十五年九月廿日發行
每月二回五日廿日發行
第貳百六拾壹號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京市京橋區築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷